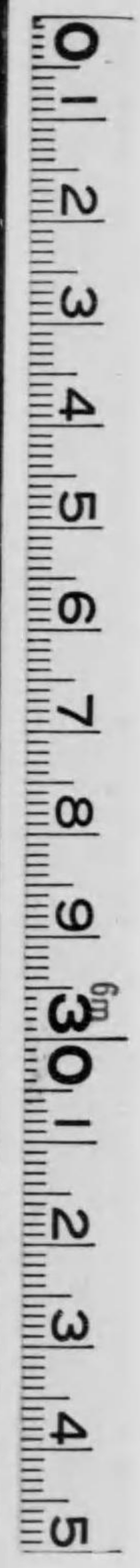


先哲  
美濃  
文教  
史要

11

327

×  
複写



始



美濃文教史要

11-327

伊藤信著

先哲事蹟

美濃文教史要



發行所

郁文堂書店  
岡安書房

大正  
9. 2. 19  
内交

世 稽

松泉

合 六

大正八年十二月

研壹共



序

美濃の地、文化の淵源頗る遠く、學界世々其の人に乏しからず。鴻儒あり、碩學あり。文豪あり、詩宗あり。或は人格崇高なる教育家あり。或は氣節凜然たる憂國の士あり。自ら中流の砥柱となり、能く郷土の文化を贊襄し、休明の氣運を鼓吹せり。此等前賢の事蹟を闡明して、以て人心を薰化し、民風を振作するは、國民教育に關るもの、當に力むべき緊要事とす。伊藤君此に觀る所あり。多年此等先哲の事蹟を探查し、文教變遷の概要を叙して一書を著し、名づけて先哲事蹟美濃文教史要といふ。蒐輯頗る努め、包羅遺す所なし。以て郷土文化の由て來る所を明かにすべく、以て子弟教誨の資となすべし。其の社會

風教に及ぼす効果の多大なるべきは、余の信じて疑はざる所なり。  
刻成りて序を余に請ふ。依て一言を述べて卷首に冕すと云爾。

大正八年十月

鹿子木小五郎

序

方今我が邦國運隆昌、皇威宇内に輝き、文化燦然として、實に世界五大強國の一に居る。五十餘年前蕞爾たる東陬の一島國たりし既往を回顧するに於ては、誰か我が國運の異常なる進歩に驚嘆せざるものあらんや。是れ素より維新開國の宏謨雄圖と國民上下の一致協同に因らずんばならずと雖も、其の能く西歐の文物を輸入して此の急速なる發展を遂げ得たる所以は、實に徳川時代の文教興隆に基因するものなくんばならず。而して吾が郷國濃州の地は此の郁々たる文化を贅褻したる先哲故賢に乏しからず。然るに維新滄桑の變に際し、時勢推移の急激倏忽なる、人々新を競ひ奇を喜ぶに専らにして、亦退きて温故知新彰往考來を事とするもの尠し。是に於て乎、先賢の流風遺韻漸く聞ゆることなく、茫乎として尋ぬ可からず、遂に全く泯滅に歸せんとするに至る。豈惜しむ可きに非ずや。我が畏友伊藤信君深く之を慨し、潜心拮据博く先賢の事蹟を検討蒐輯して、美濃文教史要と題し、之を岐阜縣教育會雜誌に寄せ、累篇連載すること四

年の久しきに及べり。人皆之を愛讀し、激賞措く能はざりき。而して君今回更に訂正増補して、之を世に行はんと欲し、廣く群籍を涉獵し、先哲の遺著手稿を採訪して、殆んど遺漏なく、其の異同を鈎稽して、或は之を遺老に問ひ、或は之を苔碑に探り、遂に能く大成することを得たり。故に其の考據精確、論斷剴切にして、秘奥を闡發し、幽隱を顯揚し、能く文運隆替の跡を明にせり。而して其の傳ふる所の士、德行仰ぐべく、事業法るべく、其の深邃なる學術、富瞻なる詞藻は道を進め教を垂るべく、興を寄せ懷を遣るべし。其の人出處進退相同じからず、趨舍造詣相異り。雖も、其の恬淡にして名利の外に超脱し、操守堅正、悠然として樂地を名教の中に求め、終生渝る所なきに至りては概ね皆一なり。其の高風清節讀む者誰か肅然として襟を歛めざるものあらんや。況んや吾人卯童の際より我が郷土の前輩先哲として夙に景慕したる所、其の行事を審にするを得ざるを以て、恰も雲霧を隔て、江山を望むが如く、慊焉の情に禁へざりしもの、今君が研鑽編摩の勞に因りて、其の詳密委曲を知悉することを得、其の風丰聲容躍如として楮表に見はれ、景仰嘆嗟の情轉た切なるものあり。嗚呼是れ獨り先哲の善行芳躅を不朽に傳ふるのみならず、吾人後進をして切磋砥礪止まざらしめんことす。其の世道人心を裨益するの功亦大なり。と謂ふべし。劊劊の功成るに及んで、君弁言を余に徵せらる。余常に君の篤學博識に推服す。則ち敢て不文を顧みず。欣快の至情を披瀝して、一言以て序となす。

大正八年十月七日

吉 村 勝 治 識

## 例言

一、本書はもと美濃文教史要と題して、大正四年十月より大正七年八月まで、前後四年の岐阜縣教育誌上に連載せるものなるが、此の度知友諸氏の懇懇により、更に修補を加へ、且新に美濃文教年表並に索引を添へ、單行本として出版するに至りしなり。

一、本書記する所の先哲の事蹟は、其の人により或は詳細なるあり、或は簡略なるあり。是れ單に其の人物學問によりて軒輊せしに非ずして、資料の存在と否とに由るもの多し。今は將に湮滅せんとする事蹟を探查するの時代に於て、此が公正なる比較論評を下さんことは、更に之を他日に待たんす。

一、余が始めて筆を此の文教史要に染めて同誌に寄稿してより、幾多の貴重な資料を寄贈若しくは貸與せられ、諸種の援助を賜はりたるは故賀島七舟、故一柳芳洲、金森毅庵、森桂園、津田天游、建部樟園、阿部榮之助、棚橋暢吉、船戸義實、飯尾英一、山田喜一、田中長秋、西垣丈吉、久野正二郎、武



藤寅治郎、井口鱗介、能戸得一、小林一郎、河合三郎、西部金兵衛等の諸氏なり。特に記して其の厚意を感謝す。

一、先哲の肖像並に遺墨の類をも多數掲載せん希望なりしが、経費の都合により大部分は遺憾ながら割愛せざるを得ざりき。  
一、出版に臨み、更に大に修正増補せしむ雖も、猶疎漏杜撰の點少からざるべし。切に大方諸賢の是正を望む。

大正八年五月

鹿城傳馬街僑居にて

著者識

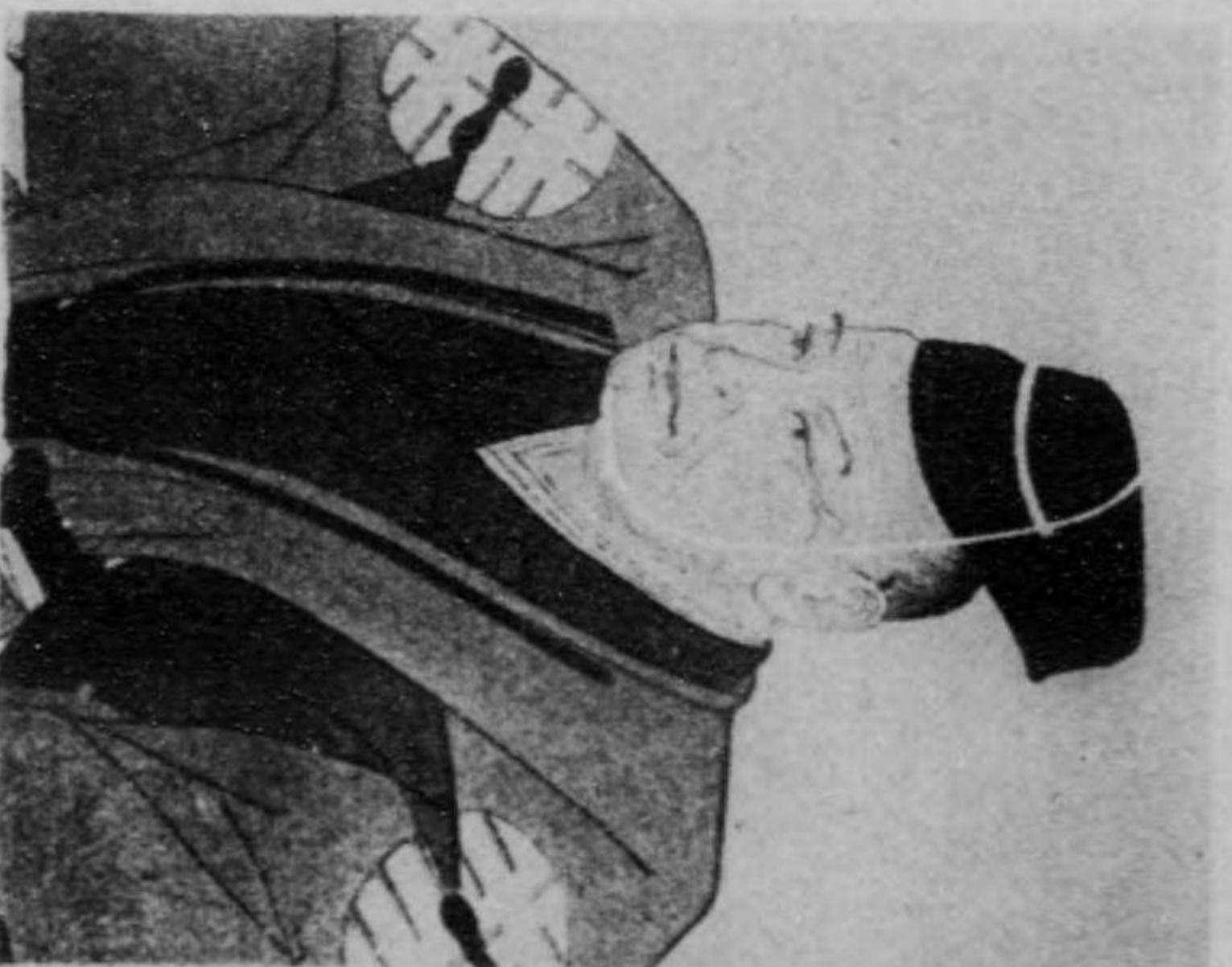
附言

東京河田泰氏藏



像肖齋一藤佐

武藏林昇氏藏



像肖齋述林



野村藤陰



小原鐵心



石原東堤 撰 紅關女史

塚原墓園 村瀬藤城 江馬細香女史

服部笙岳

梁川星巖

柴山老山 澤井樵歌 柏瀬蛙亭

日比野享川



大垣市江馬春齡氏所藏

石華堂

白鷗社集會圖

崇山寺山

新井野

日出禮草

鉢盛鉢亭

藥川呈進

照路正盛

藤原重則

村岡藤助

石見隆香文虫

河原東長

藤 孫蘭丈虫

先哲事蹟 美濃文教史要目次

前編

一、緒言……………頁

二、時期の區劃と文教盛衰の概観……………頁

1. 創始期……………頁

2. 興隆期……………頁

3. 衰微期……………頁

三、美濃儒學の諸流派……………頁

1. 程朱學派……………頁

2. 敬義學派……………頁

3. 陽明學派……………頁

4. 復古學派……………頁

5. 古註學派……………頁

6. 折衷學派……………頁

本編

第一章 前代文教の一瞥……………頁

平安時代……………頁

室町時代……………頁

第二章 創始期……………頁

一、元祿以前の文化……………頁

戸田氏織……………頁

深田正室……………頁

長沼澹齋……………頁

梁田崑巖……………頁



二、元祿以後寛政以前の諸藩の文教……………一六

1. 岩村藩 佐藤周軒 福島松江 佐藤文永 西村子麟

2. 郡上藩 江村北海 其他

3. 大垣藩 守屋岷眉 守屋東陽 關祖洲 附奏岷眉

4. 高須藩 其他 川合春川等

三、當時の古註派及敬義學派……………三二

1. 古註學派 武田梅龍 土岐震亭 中西淡淵 伊藤冠峰 須藤水昌

2. 敬義學派 加島圓齋 林 乾城 附林伯英 合田恒齋 岡田寒泉

四、山田鼎石と金龍道人並に當時の詞家……………四四

山田鼎石 金龍道人 室洲和尙 宮田嘯臺 矢橋赤山

第三章 興隆期……………五三

一、林述齋及佐藤一齋……………五三

二、頼山陽の來遊と其門下……………六六

三、梁川星巖と白鷗社同人……………九八

四、大垣藩文教の興隆……………一五

戸田睡翁 岡田主幹 菱田毅齋 水野陸沈 小原鐵心 高岡夢堂

五、郡上藩及岩村藩の文教……………一三〇

1. 郡上藩 杉岡敬桑 山田翠雨 入山謙受

2. 岩村藩 田邊恕亭 若山勿堂 原田文嶺

六、高須藩及今尾藩の文教……………一四一

1. 高須藩 日比野秋江 松尾東萊 川内當當 川内老泉 森川謙山

2. 今尾藩 座田維貞 近藤活齋

七、加納藩及岐阜の文教……………一五一

1. 加納藩 吉田東堂 長月得齋 片岡成齋 片岡江南 三宅樵齋

2. 岐阜町 野田長阿 野田新甫 堀田華陽 小野石芝 林厚江

八、苗木、高富、野村諸藩の文教……………一六四

1. 苗木藩 曾我祐申

2. 高富藩 附桑原鷲峰 淺羽讓

3. 野村藩 鈴木重遠

4. 久々利 木曾仲泰

九、角田錦江並に當時の郷先生……………一七〇

角田錦江 附 郷餘齋 青木東山 横山三川 村上杏園 渡邊梅邨

高橋杏村 附 三上藤川

二〇、方外の諸家……………一八一

稻葉五雲 溪毛芥 木蘇大夢 日野霞山 竺南園

第四章 衰微期……………一八九

一、西濃地方の文教……………一八九

1. 大垣 野村藤陰 菱田海鷗 雲谷任齋 高木晚翠 田邊胤外

安藤老山 一柳芳洲

3. 高須 河原道南 岡崎格堂 市川靈精 高木竹軒

今尾其他 岸上老山 久保田象外 榑橋碌翁 森島簡齋 原奚疑齋

4. 西濃文壇の概観 戸倉竹圃 杉山千和 江馬金粟 戸田葆堂 其他

二、中濃地方の文教……………二二三

1. 中濃出身の諸家 榑橋松村 榑橋天頼 神山風陽 木蘇岐山

2. 岐阜及其附近 賀島七舟 小林華山 其他

3. 中濃文壇の概観 森春濃の寄寓と其門下

三、北濃及東濃地方の文教……………二三三

村瀬雪峯 村瀬藍水 神谷簡齋 水谷奥嶺

結語……………二三七

附録

美濃文教年表 (巻頭)

人名索引 (巻末)

美濃文教史年表

年號	干支	美濃文、教關係事項	日本文教關係事項	美濃諸侯沿革
元和	乙卯		正月野中兼山生 石川丈山薨	夏大阪役、豐臣氏滅 德川家康薨
二	丙辰			
三	丁巳		石川丈山、藤原惺高ニ謁ス	
四	戊午		五月林鷲峰生 十二月山崎闇齋生	
五	己未		九月藤原惺高歿(五十九)	竹腰正信、今尾ニ封セラレ
六	庚申		人見鶴山生	
七	辛酉			遠山秀友(苗木)嗣グ
八	壬戌		八月山鹿素行生 木下順庵生	
九	癸亥		九月伊藤坦菴生	
寛永	甲子			
二	乙丑			
三	丙寅			
四	丁卯		七月伊藤仁齋生	
五	戊辰		中江藤樹大學啓蒙ヲ著ス 六月菅得菴歿(四十八)	德川壽昌(高須)封ヲ奪ハル
六	己巳			

二二七五  
後水尾

二二八〇

(家光)

二二八五



二二九〇  
明正

七	庚午	(買水)		十一月貝原益軒生	岡田將監美濃郡代トナル
八	辛未	深田正室、萬國全圖準天儀ヲ尾州侯ニ献ズ			奥平忠勝(加納)卒、家絶 大久保忠秀小原ヨリ加納ニ移 五萬石ヲ食△
九	壬申			十二月林道春(羅山)孔廟ヲ 忍岡ニ建ツ	
一〇	癸酉			中江藤樹伊豫ヨリ江州ニ歸	
一一	甲戌				戸田氏鐵大垣ニ移封シ十萬石ヲ 食△
一二	乙亥	長沼濟齋生			
一三	丙子	深田正室尾州侯ニ仕フ			
一四	丁丑				
一五	戊寅				
一六	己卯				大久保忠秀(加納)明石ニ移ル 松平光重明石ヨリ加納ニ移ル 七萬石ヲ食△
一七	庚辰			中江藤樹始テ王陽明ノ説ヲ 唱フ	小笠原貞信、下總關宿ヨリ高須 ニ移ル
一八	辛巳				遠山友貞(苗木)嗣ク
一九	壬午				
二〇	癸未			熊澤番山、藤樹ノ門ニ入ル	
正保	甲申				
二	乙酉				
三	丙戌	長沼濟齋加納侯近習トナル(年十二)			
四	丁亥				

後光明

二二〇五

二二一〇  
(家訓)

慶安	戊子			正月那波活所歿(五十四) 八月中江藤樹歿(四十二) 六月三宅奇齋歿(七十) 十二月谷時中歿(五十二)	岡田將監、笠松假陣屋ヲ立ツ 戸田采女正氏信(大垣)嗣ク
三	庚寅				
四	辛卯			八月淺見綱齋生	
承應	壬辰				
二	癸巳				
三	甲午				
明曆	乙未	二月戸田常閑(氏鐵)卒、(七十九)			
二	丙申			柳原塞洲生	
三	丁酉			正月林羅山歿(七十五)	
萬治	戊戌			二月室鳩巢生	
二	己亥			朱舜水歸化ス	
三	庚子			七月江村剛齋歿(五十四)	
寛文	辛丑				名取半右衛門美濃郡代トナル 本莊道芳、采地ヲ各務郡ニ受ク 郡代名取半右衛門、笠松ニ陣屋 ヲ置ク
二	壬寅			正月三宅尚齋生	
三	癸卯	深田正室(得和)歿		伊藤仁齋論孟古義中庸發揮 等ヲ草定ス 十二月野中兼山歿(四十九)	
四	甲辰			九月江村專齋歿(百)	
五	乙巳	佐藤周軒生			

二二一〇

靈元

二二二五

六	丙午		二月 蘇生 徂徠生	
七	丁未			
八	戊申			松平光永(加納)嗣
九	己酉			
一〇	庚戌		四月 伊藤東涯生	
一一	辛亥			月田氏西(大垣)嗣
一二	壬子	正月 梁田峴巖生	五月 石川丈山歿(九十)	
延寶	癸丑			
二	甲寅			
三	乙卯			
四	丙辰			
五	丁巳			
六	戊午			
七	己未			
八	庚申		九月 太宰春齋生	
天和	辛酉		九月 山崎闇齋歿(六十五)	月田氏信(大垣)卒(八十三)
二	壬戌		正月 安藤東野生	月田氏西(大垣)歿(五十八)氏定
三	癸亥			
貞享	甲子			

二三四〇

二三四五

二三四〇 (綱吉)

二三四五 東山

二	乙丑		九月 山鹿素行歿(六十四)	竹腰正武(今尾)生
三	丙寅		六月 下河邊長流歿(六十三)	
四	丁卯			月田氏成(氏鐵曾孫)野村ニ封セラル
元祿	戊辰		正月 人見鶴山歿(六十九)	
二	己巳		平野金華生	
三	庚午	長沼澹齋(宗敬)歿(五十六)	十二月 聖堂ヲ湯島ニ移ス	小笠原貞信(高須)越前勝山ニ移
四	辛未		八月 熊澤蕃山歿(七十三)	
五	壬申			
六	癸酉	守屋蛾眉(煥明)生	新井白石甲府ニ仕ヘ侍講トナル	
七	甲戌		十月 松尾芭蕉歿(五十三)	
八	乙亥			
九	丙子			
一〇	丁丑	梁田峴巖、加納侯ニ仕ヘ、文學顧問トナル(年二十六)		
一一	戊寅		五月 宇野明霞生	
一二	己卯	關祖州生	十二月 木下順庵歿(七十八)	
一三	庚辰		十二月 徳川光圀歿(七十三)	松平義行(尾州侯光友ノ子)高須ニ封セラル
一四	辛巳		正月 僧契沖歿(六十二)	
一五	壬午			松平乘紀信州小諸ヨリ岩村ニ移
一六	癸未			

二三四〇

二三四五

二三四〇

實永	甲申																
一	乙酉																
二	丙戌	梁田岫巖致仕ヲ加納ヲ去ル 安藤奎州大垣侯ニ仕フ	三月伊藤仁齋歿(七十九)	松平光熙(加納)嗣ク													
三	丁亥	深田明峰(正室ノ子)歿(六十九)	正月柳原實洲歿(五十一) 五月三宅尙齋忍城ニ繼セリ														
四	戊子		八月伊藤垣菴歿(八十六)														
五	己丑	中西淡淵生															
六	庚寅																
七	辛卯		十月淺見綱齋歿(六十)														
正徳	壬辰																
二	癸巳	金龍道人(敬雄)生	三月江村北海生														
三	甲午		八月貝原倉軒歿(八十五) 正月龍草庵生														
四	乙未																
五	丙申	秦岫眉生 八月武田梅龍生															
享保	丁酉																
二	戊戌		五月後藤松軒歿(八十六)	松平兼賢(岩村)嗣ク													
三	己亥	梁田岫巖明石藩ニ仕フ(四十八)															
四	庚子	五月山田鼎石生	四月安藤東野歿(三十七)														
五	辛丑																
六	壬寅																

七	壬寅																
八	癸卯																
九	甲辰	守屋岫眉(煥明)大垣侯ニ仕フ(年三十二)		戸田氏長(大垣)嗣ク													
一〇	乙巳		五月新井白石歿(六十九)														
一一	丙午																
一二	丁未		那波魯堂生														
一三	戊申		正月孫生徂徠歿(六十三) 六月細井平洲生														
一四	己酉																
一五	庚戌																
一六	辛亥																
一七	壬子	七月守屋東陽(元泰)生															
一八	癸丑	土岐震亭生															
一九	甲寅																
二〇	乙卯	佐藤文水(周軒ノ孫)生	八月室鳩巢歿(七十七) 北海、江村氏ヲ冒ス(年三十三) 十二月皆川淇園生	戸田氏長(大垣)歿(四十九)氏英 嗣ク													
元文	丙辰		七月伊藤東涯歿(六十七) 荷田春澤歿(六十九) 柴野栗山生														
二	丁巳	深田慎齋(正室ノ孫)歿(五十五)															
三	戊午	須藤水昌(元昌)生ル															
四	己未																

二二六五

(家宣)  
二二七〇  
中御門

(家繼)  
二二七五  
(吉宗)

二二八〇

二二八五

二二九〇

二二九五  
櫻町

高須松平義淳(宗譜)入りテ尾州藩ヲ襲ギ、二男義敏後ヲ嗣ク

二四〇〇	(元文) 五 庚申	七月佐藤周軒歿(七十七)	正月三宅尙書歿(八十)	
	寬保 辛酉	關州尾州ニ出テ、學ヲ 西村子麟(信興)生レ ニス(年三十)		
	二 壬戌			
	三 癸亥			
二四〇五	延享 甲子		九月石田梅巖歿(六十)	
	二 乙丑		四月宇野明霞歿(六十八)	
	三 丙寅	佐藤文永岩村侯侍御 ニシテ(年十四)	六月頼春水生	松永乘温(岩村)嗣ケ
	四 丁卯	宮田嘯登(維禎)、江馬蘭齋生レ	五月太宰春峯歿(六十八)	
桃園	寬延 戊辰	福島松江(子幹)岩村侯ニ仕フ(年三十七)	清田龍川、菅茶山生	
	二 己巳			
二四一〇	三 庚午	川合春川(孝衡)生レ 中西淡淵竹隱侯ニ從ヒ江戸ニ出ツ	市川寛齋生	
	寶曆 辛未		古賀清里生	
	二 壬申	七月中西淡淵歿(四十四)	六月祇園南海歿(七十六)	
	三 癸酉		山本北山、龜田鶴齋生	
	四 甲戌	三月守屋蛾眉歿(六十二)		
	五 乙亥			
二四一五	六 丙子	八月日比野秋江生	頼杏坪生	竹腰正武(今尾)七十壽
	七 丁丑	七月梁田岫巖歿(八十六)		安藤信成(加納)奥州平ニ移ル 永井直陳、岩槻ヨリ加納ニ移ル (二萬二千石)
	八 戊寅		六月中井覽菴歿(六十六)	金森頼錦(八幡)南部ニ流サル

二四二〇	(家治) 一〇 庚辰	野田風川(元龍)生	七月服部南郭歿(七十七)	六月青山幸道、富津ヨリ郡上ニ 移ル 竹腰正武(今尾)歿(七十五)
	一一 辛巳		猪飼敬所生 秦滄溟(蛾眉ノ子)生	
俵櫻町	一二 壬午	川内當齋生	柏木如亭生	
	一三 癸未		葛西因是生	
二四二五	明和 甲申	川合春川平安ニ遊學ス(年十五)		
	二 乙酉			
	三 丙戌	十月武田梅韻(欽縣)歿(五十一)		
	四 丁亥		十一月岡白駒歿(七十六)	
	五 戊子	六月林述齋生	大窪詩佛生	
	六 己丑	金籠道人(敬雄)美濃ニ來ル(年五十七) 守屋東陽、戸田侯ノ侍講トナル(年三十八)	菊池五山生 十月加茂重淵歿(七十三)	戸田氏英(大垣)養(四十)氏教嗣 ケ 永井直齋(加納)嗣ケ
二四三〇	七 庚寅			
鏡桃園	八 辛卯	五月野田白石園(元貞) 十二月樂原定齋垂井ニ 泗水菴ヲ建ツ	松崎謙堂生	松平義柄(高須)嗣ケ
	安永 壬辰	六月福島松江歿(六十) 八月須藤水昌歿(三十) 十月佐藤一齋生	正月日本詩選成	
	二 癸巳	八月關祖州歿(七十五)		
	三 甲午	江島蘭齋、元澄ノ後ヲ		
	四 乙未		田中大秀生	青山幸完(郡上)嗣ケ
二四三五	五 丙申		十月谷川士清歿(七十)	

六	丁酉	(安永)		松平義祐(高須)嗣
七	戊戌			
八	己亥	鼎石詩集出版 川合春川紀州藩ニ筑仕	山本北山作詩、作文志殺ヲ著ス 十月富士谷成章(四十二)	
九	庚子	金龍道人織田塚傳ヲ建	頼山陽生 中島松隱生	
天明	辛丑		篠崎小竹生	松平乗保(岩村)嗣
二	壬寅	正月金龍道人示寂(七十) 四月守屋東陽(五十一) 春川詩草出版	廣瀬淡窓生	
三	癸卯	水野陸沈生	四月松平君山(八十七)	
四	甲辰	菱田毅齋生 十月田中道廣(五十五)	十月久米訂齋(八十六)	
五	乙巳	四月柏淵蛙亭生		
六	丙午			
七	丁未	江馬細香生 佐藤文永致仕(六十八)		
八	戊申	柴山老山(菅太古)生	二月江村北海(七十六)	
寛政	己酉	六月梁川星巖生	市川寛齋江湖詩社ヲ設ク 異學ヲ禁ズル令ヲ出ス	
二	庚戌	佐藤一齋岩村侯近侍トナル(年十九)		
三	辛亥	村瀬藤城生 九月泰城眉(七十六)		
四	壬子	江馬蘭齋江戶ニ遊學ス(年四十六)	二月龍草庵(七十九)	
五	癸丑	十二月井田東正(棄擲)歿 三月土岐慶亭(六十一)	大鹽後素生	

二四四〇  
光四〇  
格

二四四五

(案齊)

二四五〇

六	甲寅	村瀬秋水生		松平勝富(高須)嗣
七	乙卯	日比野秋江、高須藩ニ聘セラル(年四十)		
八	丙辰	野田鳳川(三十八) 神田柳溪生		戸田氏興(野村)嗣
九	丁巳	正月後藤松陰生 五月川内老泉生	齋藤拙堂生	
一〇	戊午	金森宛庵生		
一一	己未	森東門(珠玉)歿	中村智齋(八十一) 岡田新川(六十三) 安井息軒、藤森弘庵生	
一二	庚申	正月山田鼎石(八十一) 同 櫻原誓齋(七十八)		
享和	辛酉	牧百峰(彌齋)生	六月細井平洲(七十四) 九月本居宣長(七十二) 大槻磐溪、佐藤牧山生	
二	壬戌	川内當當私塾方靈館ヲ開ク	芳野金陵生	
三	癸亥	十一月角田錦江生		
文化	甲子	張紅園生 村瀬太乙生	二月中井竹山(七十五)	松平義和(高須)嗣
二	乙丑	佐藤一齋林家塾長トナル(年三十四) 川合春川松坂學問所掌教トナル(年五十六)		
三	丙寅	關元洲(祖洲ノ子)歿(五十四) 梁川星巖京ニ入ル(五十四) 片岡成齋生、三月江馬活堂生	藤田東湖生	戸田氏教(大垣)歿(五十二)氏庸嗣
四	丁卯	梁川星巖始テ江戶ニ遊ブ(年十九) 水曾旭翁(仲泰)生	五月昔川淇園(七十四) 十二月柴野栗山(七十二) 藤井竹外、廣瀬旭莊生	
五	戊辰	柴山老山江戶ニ遊ブ(年二十一) 正月森島簡齋生	十一月清田龍川(六十二) 九月加藤千隆(七十二)	青山幸孝(郡上)嗣
六	己巳	二月横山三川生 九月柳餘齋生	十一月上田秋成(七十八)	
七	庚午	星巖再ビ江戶ニ遊ブ(年二十二) 正月松井八澄生	村上佛山生 頼山陽出テ、備後ニ寓ス	

二四六〇

二四六五

二四七〇

八	辛未	六月西村子麟受(七十) 村瀨藤城濱華ニ遊ブ、(年二十一) 原田文謙生	二月村田春海受(六十六) 佐久間象山生 岡本黄石生	
九	壬申	四月田邊忍亭生 七月江馬金粟生	五月山本北山受(六十一) 春日潜庵生	月田氏綏(野村)嗣ガ
一〇	癸酉	秋九月山陽美濃ニ來遊ス(年三十四) 仲春江馬細香入洛ス(年二十八)	恩田蕙樓受(七十一) 十二月尾藤二洲受(六十九) 龜井南溪受(七十二) 小野湖山生	
一一	甲戌	七月佐藤又永受(八十)	山陽小石梨枝ヲ娶ル	
一二	乙亥	三宅權齋生 三月稻葉五雲生	二月稻春水受(七十一) 中井履軒受(八十五) 曾我耐軒 土井整牙生	
一三	丙子	八月岡田寒泉受(七十一) 九月梁川星巖郷ニ歸ル 十一月小原誠心生 田邊風外生	五月古賀精里受(六十八)	
一四	丁丑	正月溪毛芥生 七月合田恒齋受(四十六) 頼山陽西遊、後藤松陰之ニ從フ	十二月村瀬榜亭受(七十五) 大沼枕山生 七月柏木如亭受(五十七) 森春濤生	
文政	戊寅	二月杉岡歌桑受 三月杉岡歌桑郡上藩ニ聘セラレ 四月後藤藤川受(六十一) 九月三野風雅刊行 杉山千和生	七月市川寛齋受(七十二) 正月石原正明受(六十二) 赤田臥牛(元義)受 四月葛西因是受(六十) 山陽水西莊ニ卜居ス	青山幸寛(郡上)嗣ガ
二	己卯	九月日比野秋江受(七十) 後藤松陰、篠崎小竹ノ女ヲ娶ル 十二月曾我祐申生	四月太田錦城受(六十二)	
三	庚辰	三月星巖紅蘭ト婚ス 三月杉岡歌桑郡上藩ニ聘セラレ 四月後藤藤川受(六十一) 九月三野風雅刊行 杉山千和生		
四	辛巳	二月杉岡歌桑受 三月杉岡歌桑郡上藩ニ聘セラレ 四月後藤藤川受(六十一) 九月三野風雅刊行 杉山千和生		
五	壬午	二月杉岡歌桑受 三月杉岡歌桑郡上藩ニ聘セラレ 四月後藤藤川受(六十一) 九月三野風雅刊行 杉山千和生		
六	癸未	正月神谷簡齋生 三月川内老泉受(二十七) 九月川合春川受(七十五) 巖荷溪詩集刊、神山鳳陽生		
七	甲申	九月日比野秋江受(七十) 後藤松陰、篠崎小竹ノ女ヲ娶ル 十二月曾我祐申生		
八	乙酉	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生	三月龜田鶴齋受(七十五) 八月菅茶山受(八十) 頼山陽日本外史ヲ著ス 四郷隆盛生 頼山陽日本樂府成 十一月本居春庭受(六十六) 五月松平定信受(七十三) 吉田松陰生 二月山陽月瀬ニ遊ブ 秦滄浪(龜)受(七十二) 九月頼山陽受(五十三) 九月本居大平受(七十八) 五月頼杏坪受(七十九) 七月柴野碧海受(六十三) 龜井昭陽受(六十四) 二月大窪詩佛受(七十二) 小原君雄受(八十四)	松平樂美(岩村)嗣ガ 戸田氏彬(大垣)生 青山幸禮(郡上)嗣ガ 松平義建(高須)嗣ガ 笠松代官野田芹吉自殺ス

二四八五

二四八〇

仁孝

二四七五

二四九〇

二四九五

(家慶)

二五〇〇

九	丙戌	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生	三月龜田鶴齋受(七十五) 八月菅茶山受(八十) 頼山陽日本外史ヲ著ス 四郷隆盛生 頼山陽日本樂府成 十一月本居春庭受(六十六) 五月松平定信受(七十三) 吉田松陰生 二月山陽月瀬ニ遊ブ 秦滄浪(龜)受(七十二) 九月頼山陽受(五十三) 九月本居大平受(七十八) 五月頼杏坪受(七十九) 七月柴野碧海受(六十三) 龜井昭陽受(六十四) 二月大窪詩佛受(七十二) 小原君雄受(八十四)	松平樂美(岩村)嗣ガ 戸田氏彬(大垣)生 青山幸禮(郡上)嗣ガ 松平義建(高須)嗣ガ 笠松代官野田芹吉自殺ス
一〇	丁亥	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
一一	戊子	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
一二	己丑	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
天保	庚寅	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
二	辛卯	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
三	壬辰	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
四	癸巳	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
五	甲午	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
六	乙未	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
七	丙申	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
八	丁酉	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
九	戊戌	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
一〇	己亥	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
一一	庚子	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		
一二	辛丑	三月星巖、山陽ト花ヲ嵐山ニ賞ス、四月星巖 聖代春唱成、宮田瑞齋之ニ序ス、 正月野村藤陰、雲谷任齋生 三月星巖入洛、銅駝坊ニ寓ス 細橋松村生、村瀬雪吹生 井上吳齋生、河原瀧南生 十二月木曾仲泰家ヲ嗣ガ 梁川星巖二月歸郷、九月南遊ス 長月得齋北遊、後江戸ニ遊ブ、入山謙受生、 愛日樓文詩成ル、牧百峰、日本樂府ニ註ス 二月星巖、齋藤拙堂等ト月瀬ニ遊ブ 神田孝平生		

三	壬寅	小原鐵心大垣 三代ニ任ズ 一柳芳洲生	三月香川 樹殺(七十六) 四月卷菱湖殺(六十七) 閏九月平田 萬胤殺(六十八) 頼山陽ノ母梅 胤殺(八十四) 館柳 樹殺(八十三) 四月松崎 懺堂殺(七十四)	松平兼翁(岩村)嗣ク
一四	癸卯	正月郷東岡殺(八十二) 五月安藤老山生 木村寛齋殺(四十六)	仁科白谷(五十五)殺	
弘化	甲辰	村瀬太乙犬山藩ニ聘セラル 十二月久保田 象外生	十二月林 權字殺(五十四)	
二	乙巳	六月、星巖玉池吟社ヲ開ケテ歸郷ス	九月田中大秀殺(七十二)	
三	丙午	暮春、星巖入洛ス、三月菱田 格齋殺(二十六) 牧百峰 學習所講師ニ舉ゲラル	二月朝川 善庵殺(六十九)	松平義建(高須)ノ子慶恕(慶勝) 入りテ本藩ヲ襲ケ
四	丁未	神田孝平 牧百峰ノ門ニ入ル	二月朝川 善庵殺(六十九)	松平義比(高須)嗣ク
嘉永	戊申	十一月坪井 誠軒(信道)殺(五十四) 十二月星巖 黄葉山房ニ移ル	二月朝川 善庵殺(六十九)	
二	己酉	九月星巖、鴨沂ニ徒ル	二月朝川 善庵殺(六十九)	
三	庚戌	五月南宮 詩鈔刊行	篠崎小竹殺(七十二)	
四	辛亥	四月神田 柳溪殺(五十六) 十一月村瀬 立齋殺 十一月鳥居 研山殺(三十二) 同月月田 葆堂生	閏二月齋藤 竹堂殺(三十八)	
五	壬子	得齋詩文鈔刊行 七月柴山 老山殺(六十五) 清水任所生	中林竹洞殺(七十八)	
六	癸丑	九月村瀬 藤城殺(六十三)	六月菊池 五山殺(八十四) 廣瀬 淡窓殺(七十四) 十月藤田 東湖殺(五十四) 十月本居 内遠殺(六十四)	戸田氏共(大垣)生
安政	甲寅	三月水野 陸沈殺(七十二)	山本梅逸殺(六十八)	松平乘命(岩村)嗣ク、 月田氏良(野村)嗣ク、 月田氏正(大垣)致仕、氏彬襲封
二	乙卯	十一月近藤 活齋殺 縦壑三宅氏ヲ嗣ケ(年三十九)		
三	丙辰	木蘇岐山生		
四	丁巳	二月菱田 毅齋殺(七十四) 三月川内 當當殺(九十五) 四月戸田 睡翁殺(六十七) 八月陸田 維貞殺(六十五)		

五	戊午	九月梁川 星巖鴨沂小隱ニ病殺(七十) 張紅蘭 賦ニ投セラル		高須松平 義比(茂徳)又茂榮ト改 ム(入りテ尾州藩ヲ襲ギ、秀慶後 ヲ嗣ケ)本庄道美(高宮)嗣ク
六	己未	二月張紅蘭 赦免セラル 九月佐藤 一齋殺(八十八)		
萬延	庚申	四月小寺 翠雨殺(三十六)	五月飯田 忠彦殺(六十二) 十一月安積 良齋殺(七十六)	
文久	辛酉	九月江馬 細香殺(七十五) 十二月村瀬 藍水生		
二	壬戌	八月金森 宛庵殺(六十五)	藤森弘庵殺(六十四)	永井尙服(加納)嗣ク
三	癸亥	二月牧百峰(齋齋)殺(六十三) 二月田邊 恕亭殺(五十二) 九月三上 藤川出郷行方不明トナル(年四十)	五月貫名 海屋殺(八十六) 廣瀬 旭莊殺(五十七) 十二月板原 廣道殺(五十一) 七月佐久 間象山斬ラル(五十四)	
元治	甲子	十月後藤 松陰殺(六十八) 原田文 嶺岩村藩ニ聘セラル(年五十四)	七月齋藤 拙堂殺(六十九)	月田氏彬(大垣)薨シ、氏共嗣ク
慶應	乙丑	閏五月飯沼 愷齋殺(八十四)		
二	丙寅	正月井田 澹泊殺 四月宇野 南村殺(五十四) 桑原 驚峰殺(四十八)	九月鹽谷 岩陰殺(五十)	
三	丁卯	三月水野 民徳殺(五十九)		
明治	戊辰	五月小原 鐵心、無何有莊ニ退休ス 同月高橋 杏村殺(六十四) 十二月梁川 星巖靈山ニ祭祀ヲ賜フ		青山幸宜(郡上)嗣ク
二	己巳	四月井上 果齋殺(四十二) 七月片岡 成齋殺(六十四) 十月高岡 夢堂殺(五十三)	横井小楠 暗殺セラル(六十二)	松平義生(高須)嗣ク
三	庚午	正月木蘇 大夢寂 十月原田 文嶺殺(六十)		
四	辛未	正月岩瀬 尚庵殺 山田翠 雨郡上藩ニ聘セラル		
五	壬申	二月森清 子殺(四十) 四月小原 鐵心殺(五十六) 十月日野 霞山寂 十月村上 杏園殺(六十七)		

二五三〇

明治

(慶喜)

二五二五

二五二〇

(家茂)

二五一五

(家定)

二五一〇

孝明

二五〇五

(天保)

六	癸酉	森春瀧岐阜雜詩ヲ著ス	
七	甲戌	杉山千和大垣雜詩ヲ著ス	
八	乙亥	八月山田翠雨歿(六十一)	
九	丙子	七月村瀨秋水歿(八十三)	九月安井息軒歿(七十八)
一〇	丁丑	三月小野崎立堂歿(五十)	齋藤誠軒歿(五十一)
		九月橫山三川歿(六十九)	富田節齋歿(六十七)
		宇野筆山歿(三十二)	三月春日潛庵歿(六十八)
一一	戊寅	十月田邊風外歿(六十二)	林鶴梁歿(七十三)
		十二月細野要齋歿(六十八)	大槻盤溪歿(七十八)
一二	己卯	三月張紅閣歿(七十六)	
		八月村瀨雪峽歿(五十三)	
一三	庚辰	二月森島簡齋歿(七十三)	清人胡鐵梅、陳曼壽、大垣ニ來遊ス
一四	辛巳	二月細餘齋歿(七十三)	
		五月曾我祐申歿(五十七)	
		七月村瀨太乙歿(七十九)	
		鷗笑新誌創刊	
一五	壬午	一月江馬金粟歿(七十一)	鷲津毅堂歿(五十八)
一六	癸未	十月溪毛芥寂(六十六)	清人王季園朱印然、大垣ニ來遊ス
一七	甲申	四月青木東山歿(五十九)	
		五月林厚江(三益)歿(五十四)	
		五月森川謙山歿(七十三)	
		十二月角田錦江歿(八十二)	
一八	乙酉	岸上老山歿	
一九	丙戌	四月片岡江南歿(四十九)	
		十二月河原澗南歿(五十九)	
二〇	丁亥	正月小原鐵心正五位ヲ追贈セララル	
二一	戊子		

二五三五

二五四〇

二五四五

二五五〇

二五五五

二五六〇

二五六五

二二	己丑	八月雲谷任齋歿(六十三)	頼友峰歿(六十七)
		十一月井田雷堂(謙)男爵歿(五十六)	十一月森春瀧歿(七十二)
二三	庚寅	四月神山鳳陽歿(六十七)	菊池三溪歿(七十三)
		三月水曾旭翁歿(八十五)	佐藤牧山歿(八十八)
二四	辛卯	四月梁川星巖正四位ヲ追贈セララル	大沼枕山歿(七十四)
		三月入山謙受歿(六十四)	中村正直歿(六十)
二五	壬辰	二月村瀨藍水歿(三十二)	
		高木晚翠歿(五十七)	
二六	癸巳	五月柳橋松村歿(六十七)	
二七	甲午	一月稻葉五雲歿(七十九)	
二八	乙未	三月菱田海陽歿(六十)	
		清水任所歿(四十四)	
二九	丙申	七月三宅惟馨歿(八十一)	二月川田鑿江歿(六十七)
		七月關橋隆翁歿(七十九)	
三〇	丁酉		
三一	戊戌	二月岡崎格堂歿(六十五)	四月岡本黄石歿(八十八)
三二	己亥	三月野村藤陰歿(七十三)	十二月鱧松塘歿(七十六)
三三	庚子		
三四	辛丑		三月江馬天江歿(七十七)
三五	壬寅	岸觀瀾歿(四十六)	
三六	癸卯	五月久保田象外歿(六十)	
		正月神谷簡齋八秩壽筵ヲ開ク	
三七	甲辰	六月鴻雪瓜歿(九十一)	
		九月神谷簡齋歿(八十二)	
		十二月溪雲嶂歿(六十五)	
三八	乙巳		
三九	丙午		



四〇	丁未	(明治)	四月淺羽讓殿(六十九)		
四一	戊申		七月戸田葆堂殿(五十八)		
四二	己酉		飯沼愨齋從四位 <small>高岡夢堂正五位</small> 追贈セラ	依田學海殿(七十七)	
四三	庚戌		四月小原唯陽(通)男爵殿(六十九)	四月小野湖山殿(九十七)	
四四	辛亥		八月磯貝景城殿(六十一)	十二月重野成齋殿(八十四)	
			十月柳橋天額殿(七十七)		
大正	壬子		一月島居圭陰殿(七十七)		
			五月安藤老山殿(六十九)		
	癸丑		二月座田維貞正五位 <small>二</small> 追陞セラ		
三	甲寅		一月村石樵(由巳)殿(七十七)		
			十一月小林華山殿(八十二)		
二五七五	四 乙卯		九江市川董鶴殿(八十一) <small>十一月林述齋、佐藤一齋從四位</small> 野村藤陰從五位 <small>二</small> 追贈セラ		
	五 丙辰		七月木蘇岐山殿(六十一)		
	六 丁巳		十月賀島七舟殿(八十一)		
	七 戊午		野川湘東殿(七十九)		
	八 己未		九月高田鳳溪殿		
二五八〇	九 庚申		二月一柳芳洲殿(七十八) 六月連雲瀟殿		
	一〇 辛酉		小野芹一殿	一月松平義生(舊高須藩主)子爵(六十六)	
	一一 壬戌				
	一二 癸亥				
	一三 甲子				

先哲 美濃 文教史要

伊藤 信著

前編

一、緒言

昔人曰く、「山水秀麗の氣能く偉人を生ず」と。我が美濃の地、固より佳山水多し。而して古來此の秀麗の氣をうけ、名を學圃藝苑に爲せるもの、素より尠少に非ざる也。或は鴻儒林述齋、佐藤一齋の如きあり。或は詩人梁川星巖、山田鼎石の如きあり。或は柴山老山、村瀬藤城の如きあり。或は三宅樞臺、野村藤陰の如きあり。其餘悉く擧ぐるに遑あらず。或は經學に、或は詩文に、能く我が郷土の文化を進め、以て休明の氣運を鼓吹し、山川の秀麗を發揮せり。其の功豈没すべけんや。

明治維新後泰西の學問藝術が盛に我が國に輸入せらるゝや、經學詩文の業は舍て、顧るものなく、是等前賢の事蹟また盡く湮滅し去らんとす。近時郷土研究の聲漸く盛にして、縣志郡志等の編纂漸く多きを加ふ。我が郷土また二三其の舉あるを聞く。尙に賀すべき也。然れども未だ此の方面の研究をなせるもの有るを聞かざるは甚だ遺憾に堪へざる也。

余竊に此を憾み、菲才自ら揣らず、年來此等前輩の著書、遺稿、碑文其他參考となるべき資料の蒐集

に力を用ひ、或は閑を偷みて其の遺跡を訪ひ、漸く我が郷土文教史の大要を髣髴せしむることを得たり。依りて先づ隗より始めよの語に従ひ、以下其の大略を記述せんとす。若し此の編、聊かにも我が郷土史の闕を補ふを得ば實に望外の幸なり。

然れども闇幽顯晦の事たる、淺學寡聞、余輩の如きの到底能くすべき所に非ず。況んや其の遺稿手澤等多くは散逸して、甚だしきは一の参考資料すら得難きものあるに於てをや。此の編素より疎漏杜撰の點多々あるべきを疑はず。希くは博雅の士君子、幸に補正の勞の吝む莫らんことを。

### 二、時期の區劃と文教盛衰の概観

慶元以前は措いて問はず。徳川氏の盛時に至り、幕府獎學の影響をうけ、我が美濃に於ても諸藩競ひて學校を創建し、多士濟々、文教蔚然として興起せり。爾後明治に至るまで、其の間約三百年、國勢漸く推移して、文教亦自ら盛衰興廢なき能はず、今假に別ちて、創始期、興隆期、衰微期の三とす。

1. 創始期 元和偃武以後寛政以前を假に名づけて創始期といふ。當時我が美濃に於て藩校の創立せられしもの、岩村に知新館(元祿末年)あり。高須に日新堂(享保年間)あり、八幡に潜龍館(天明年間)あり。學者の聘せられて來りしもの、加納藩に梁田、蛭、あり。岩村藩に佐藤、周、軒、あり。郡上藩に江村、北海、あり、各々文學を以て任用せらる。民間の學者には、岐阜に山田、鼎、石、あり。笠松に伊藤、冠、峰、あり。垂井に櫻原、楚、齋、あり。各々塾を開きて徒を教授す。此他詞章を以て名あるもの神戸の金龍道人、加納の宮田、嘯、臺、岩村の須藤、水、昌、山人、赤阪の矢橋、赤、山、等あり。文化漸く是より見るべきものあらんとす。

創始期

興隆期

2. 興隆期 文化文政前後より天保、嘉安の盛時を経て、慶應前後に至る其間約七十年、之を興隆期とす。藩校の創設せらるゝもの加納に憲章館(文政年間)あり。大垣に致道館(天保八年)あり。今尾に格致堂あり。學者詞人彬々として輩出し、文教勃然として興隆の運に向ふ。林述齋、佐藤一齋は岩村より出で、昌平齋に文教の柄を乗り、河合春川は高須より出で、紀州藩の儒官となる。加納には吉田、東、堂、あり。岐阜には野田、白、石、あり。高須に川内、當、あり。今尾に近藤、活、齋、あり。大垣に菱田、毅、齋、井田、澹、泊、あり。揖斐に柴山、老、山、あり。上有知に村瀬、藤、城、昆、弟、あり。梁川、星、巖、は安八郡會根より出で、詩を以て天下に鳴り、妻紅、蘭、亦詩を能くするあり。其他山陽門下の名ある者には、岩手に神田、柳、溪、あり。大垣に女流江、馬、細、香、あり。又、名森に後藤、松、陰、文、珠、に牧、百、峰、あり。前者は大阪に、後者は京都に出で、帷を下せり。一齋門下の長戸、得、齋、(加納)は江戸に出で、桑原、鷲、峰、(山縣郡栗野)は田邊藩に仕ふ、また星巖門下には大垣の宇野、南、村、高田の柏淵、蛙、亭、等あり。曾て菅原有功の三野風雅を編輯するや、實に作家二百を收む。亦盛なりと謂ふべし。濃州の文化此の時を以て最盛期とす。

衰微期

3. 衰微期 明治維新以後現今に至る約五十年間、之を衰微期とす。舊藩校は廢藩と與に廢止の運命に遭ひ、加之泰西文物輸入の影響を被りて、經學詩文の業漸く衰連に向ふ。然れども前代隆盛の後をうけ、學者詞人猶多く殘存し、魯靈光として見るべきもの少しとせず。大垣に野村、藤、陰、菱田、海、鷗、等あり。加納に片岡、成、齋、三宅、樞、臺、あり。笠松に角田、錦、江、あり。岐阜に林、犀、江、賀、島、七、舟、あり。高須に河原、湍、南、あり。今尾に岸上、老、山、あり。大跡(養老郡)に戸倉、竹、圃、あり。揖斐に棚橋、天、籟、あり。日置江(稻葉郡)に青木、東、山、あり。其他棚橋、松、村、は東京に、神山、鳳、陽、は京都に出で、各々文名を馳せたり。

星移り物換り、今や學界の香宿殆んど凋落して寥々曉天の星よりも少く、文壇轉た寂寞の感なき能はず。  
 以上を近世美濃文教變遷の概観とす。是より以下篇を分ち章を別ち、時代を追うて、更に詳記する所あるべし。

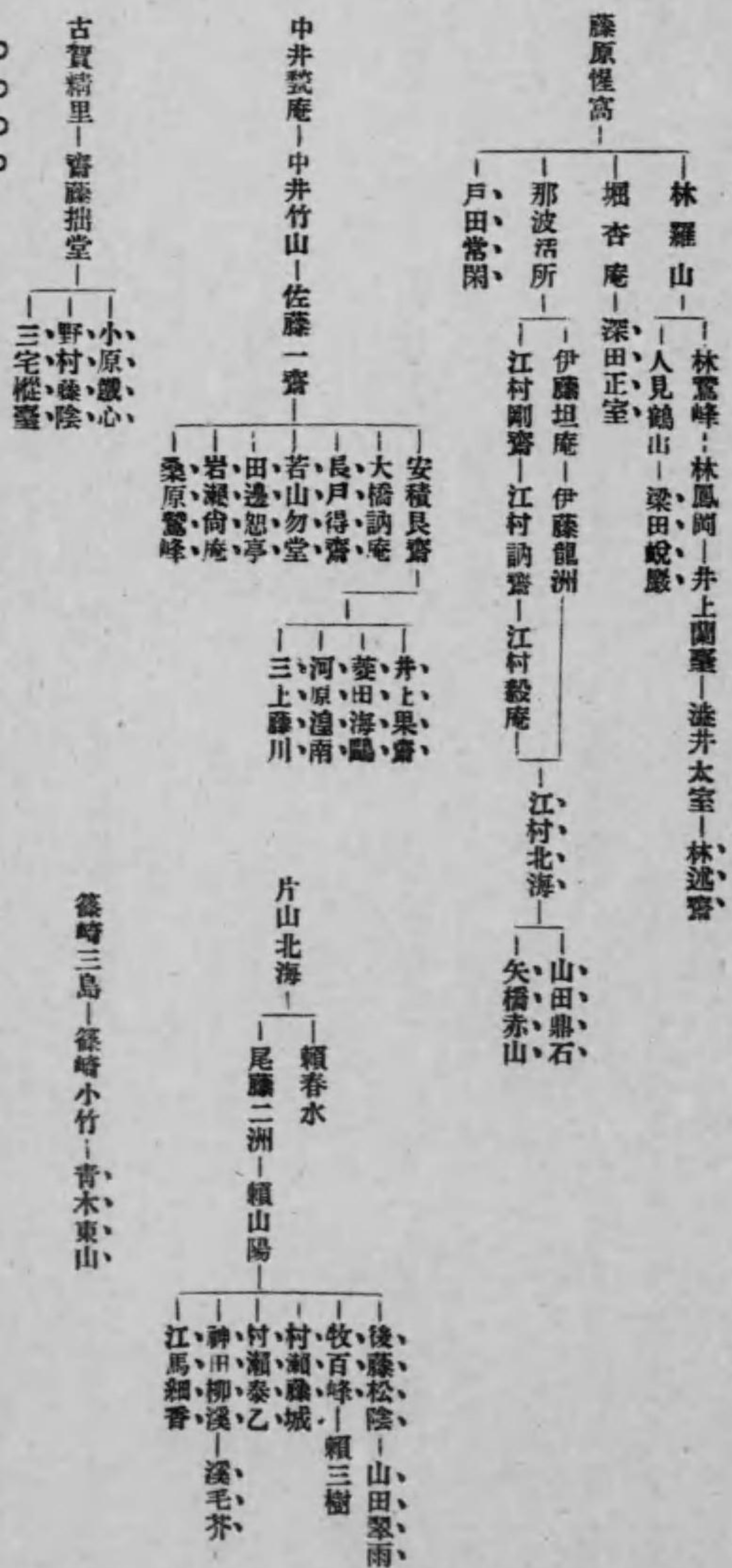
### 三、美濃儒學の諸流派

程朱學派

本篇に入るに先ち、便宜の爲め、我が美濃儒學の傳統につきて更に一言述ぶる所あるべし。

(一)程朱學派 程朱學の本邦に入るや舊し。元和中に至り藤原惺窩之を首唱し、林羅山父子之に和し、幕府委ぬるに學政を以てす。於是天下靡然として之に嚮ふ。古義復古學の行はるゝに及びて一度衰微せしが、天明寛政に至り、幕府柴野栗山、古賀精里等を擧げ、異學を禁するに及び復盛なり。我が美濃にありては、惺窩の門に戸田常閑(氏鐵)あり。堀杏庵の門に深田正室あり。二人を美濃程朱學の先驅とす。梁田蛻巖は人見鶴山の門より出で、聘せられて加納侯に仕へ、佐藤周軒は後藤松軒に學び、來りて岩村藩儒學の祖となる。林述齋(岩村侯の子)は澁井太室の門に遊び、出で、林家を中興し、佐藤一齋(周軒の曾孫)は中井竹山に學びて、昌平叢に儒官たり。一齋門人頗る富む。我が美濃にありては、長戸得齋(加納)、若山勿堂、田邊恕亭(岩村)、岩瀬尚庵(大垣)、桑原鷲峰(栗野)等あり。一齋門下の高足、安積良齋の門には井上果齋、菱田海鷗(大垣)及河原遼南(高須)三上藤川(關原)あり。江村北海は伊藤龍洲の子にして江村毅庵の後を繼ぎ、郡上の青山侯に仕ふ。山田鼎石(岐阜)、矢橋赤山(赤阪)等其の門に出づ。頼

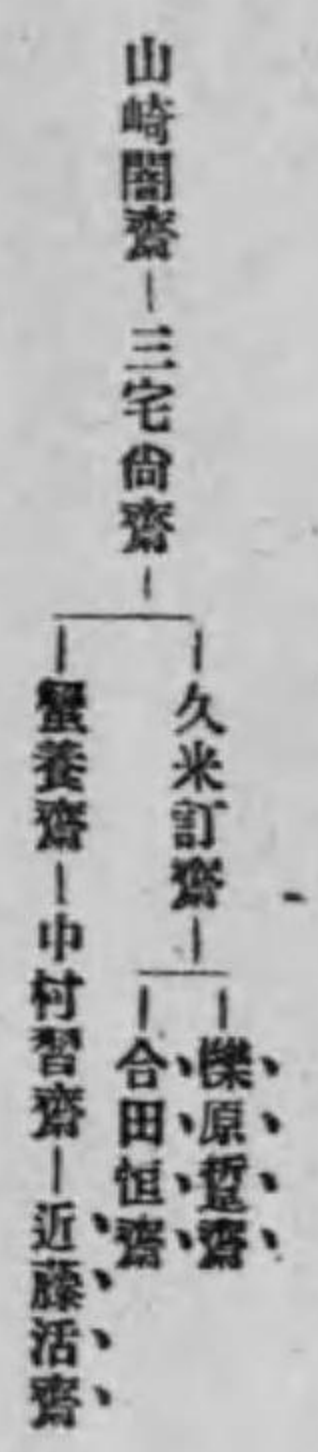
山陽の門下には村瀬藤城、村瀬泰乙(上有知)、後藤松陰(名森)牧百峰(文珠)、神田柳溪(岩手)等あり。齋藤拙堂の門下には、小原鐵心、野村藤陰(大垣)、三宅樞臺、加納等あり。篠崎小竹の門に青木東山(日置江)あり。要するに、美濃の儒學は幕府三百年を通じて程朱學の風靡する所たり。左に其の傳統の系譜を示すべし。



敬義學派

(二)敬義學派 萬治寛文の際山崎闇齋の唱ふる所、闇齋、谷時中より南學を傳へ、程朱を主とすれども、

頗る取舍する所あり。専ら敬義の説を唱ふ。其の學三宅尙齋に傳はり、尙齋之を久米訂齋に傳へ、訂齋之を櫟原、蒼齋(垂井)に傳ふ。蒼齋の同門合田恒齋後を受けしが、蒼齋歿し恒齋去りて其の傳を失せり。別に開齋の流を汲むものに近藤活齋(今尾)あり。活齋の學遠く尙齋の門人蟹養齋より出づ。我が美濃山崎派の學者、前後此の兩三人あるのみ。後遂に振はず。



(三)陽明學派 寛永中、近江の中江藤樹之を首唱す。所謂王陽明良知の學是なり。我が美濃にありては直接其學を傳へたるものなし、近世に至り佐藤一齋及び梁川星巖あり。一齋はじめ程朱學を主とすと雖、後陽明學に傾きしは事實にして、其の門人佐久間象山、吉村秋陽、山田方谷等王學者としての面目を發揮せるもの少からず。梁川星巖は詩を以て一世に鳴れるもの、晩年王陽明、劉念臺の説を奉じ、尊王の大義を稱へたり。

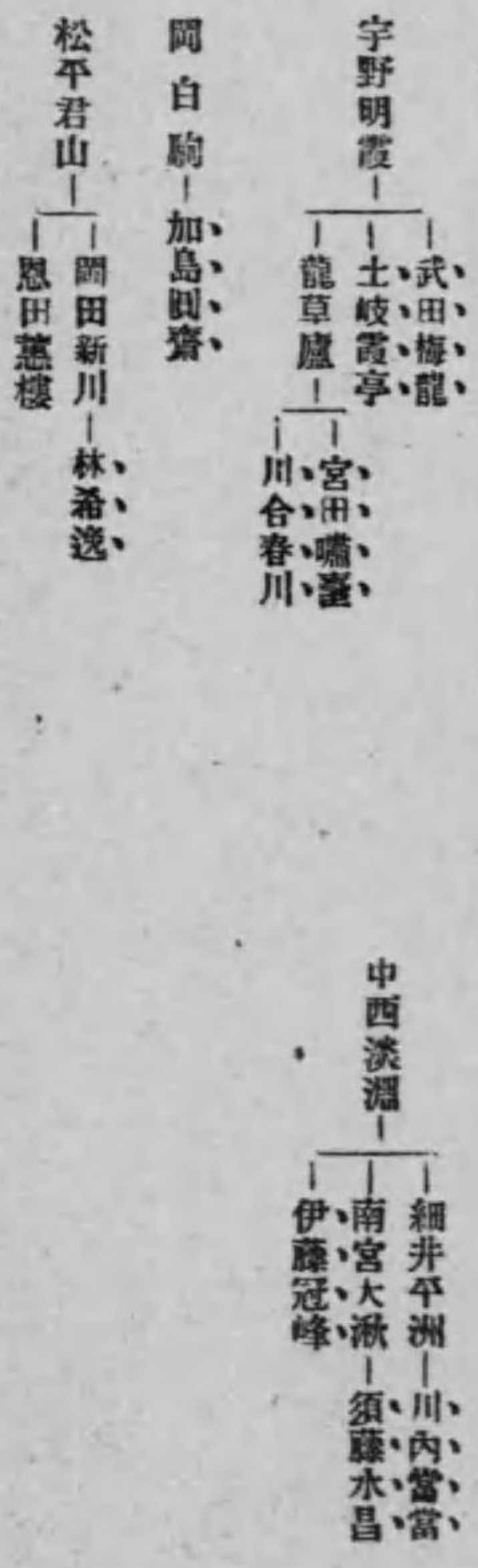
(四)復古學派 元祿中荻生徂徠の唱ふる所、其の學、事功を主とし心性を論せず。程朱の學を排し、兼ねて古義學派を斥く。其の文は先秦以上を取り、詩は盛唐以上を取り、稱して古文辭と云ふ。我が大垣の關祖洲曾て徂徠の門に學び、後名古屋に出で、講學す。同門の守屋峨眉は來りて大垣侯に仕ふ。服部南郭の門には峨眉の子東陽及岩村の福島松江、佐藤文永あり。岩村藩の學、前に佐藤周軒の程朱學あり、此に至り復古學に轉じ、後又朱學に復歸せり。

陽明學派

復古學派



(五)古註學派 古註の本邦に行はるゝや久し。朝廷固より之を用ひ、清宮二博士の家之を傳ふ。宋學行はるゝに及び、殆んど之を高閣に束ぬ。明和安永の際に至りて漸く興隆す。其の學漢唐の注疏に基き、宋明諸家の註を參取す。巖垣、古屋、宇野、細井の諸家相繼ぎて起り、隱然朱學の一敵國をなせり。我が美濃にありては宇野明霞の門に武田梅龍及其弟土岐霞亭あり。龍草廬の門に宮田嘯臺(加納)、川合春川(高須)あり、中西淡淵の門に伊藤冠峰(笠松)あり。細井平洲の門に川内當當(高須)あり。南宮大湊の門に須藤水昌(岩村)あり。岡白駒の門に加島圓齋(岐阜)あり、岡田新川の門に林希逸(神戸)あり。朱學が諸藩の儒學を風靡せるに對し、此は民間に傳播せるの觀あり。



(六)折衷學派 其の學櫟原、蒼洲に胚胎し、程朱の説と漢唐の註疏とを參へ用ひ、斷するに自己の見を以

折衷學派

てす。明和安永の際井上金峨、山本北山の徒一時に輩出し、之を唱へて復古學を排斥し、自ら一派を爲せり。我が美濃にありては、北山の門に柴山老山(揖斐)あり。梁川星巖また曾て北山の門に遊ぶ。星巖の門下に柏淵蛙亭、宇野南村、菱田恪齋等あり。其の他皆川淇園の門に菱田毅齋(大垣)あり。廣瀬淡窓の門に稻葉道敷あり。同旭莊の門に棚橋松村あり、霸府の末期に際して稍盛なるを得たり。

井上金峨—山本北山—  
梁川星巖—宇野南村—  
柴山老山—菱田恪齋—  
柏淵蛙亭

皆川淇園—菱田毅齋—

龜井南冥(祖徠派)—龜井昭陽—廣瀬加莊—棚橋松村—  
廣瀬淡窓—稻葉道敷

之を要するに徳川時代の美濃儒學は前後を通じて程朱學最盛なり。蓋し官學獎勵の影響なるべし。之に次ぎて盛なるを古注學派とす。敬義、陽明、復古の諸學派は一時之れ無きに非ざるも、久しからずして其の跡を絶てり。古義學派の如きは遂に一も聞ゆる所なし。幕府の末期に方りては、時勢に伴ひて折衷考證の學行はれ、以て明治に及びしなり。

本 編

第一章 前代文教の一瞥

平安時代

我が美濃文化の淵源や頗る遠し。是を前にしては平安時代、島田忠臣の吟詠を遺せるあり。是を後にしては室町時代、五山學僧の輩出するあり。多少の風化を我が郷に及ぼせるや必せり。

陽成天皇の元慶七年島田忠臣美濃介を拜して來任し、後秩滿ちて歸洛す。其の「過三輪渭」の詩は既に人口に膾炙せり。曰く

河源出處幾崔嵬。

路次層盤望眼迴。

短晷一朝行過電。

長流萬里俯聞雷。

嵐寒山業排紅壁。

浪濤石林聳漆臺。

惆悵老慵田別駕。

年餘三知命一不看來。

と。田氏文集載する所、美濃在任中の作に係る詩十數首あり。「元慶七年美濃大雪以詩記之」の末節には

且莫詩三張豐歲瑞。

先須勞三問孝廉家。

と云ひ、「銜後晚望吟懷」の詩には

外吏三餘無暇日。

且因銜退閱詞章。

と吟じ、「和野秀才叙德吟見寄」の轉結には

勸課農桑非我力。

只應三州境化吟詩。

と咏せり。思ふに多少の風化を州民に與へしならんか。(田氏文集)

室町時代五山詩僧の美濃より出でたるもの、愚中周及あり。雲溪支山あり。惠鳳、翺之あり。南江宗侃あり。愚中は岐阜の人、興國二年(北朝曆應四年)年十九、天龍寺船に搭じ、支那に赴きて法を求む。留る事十年にして歸朝す。赤間關に至り賦して曰く。

到二赤間關一訪二古蹟一。  
城門直對海王宮。

波沈二寶劍一蛟龍護。  
島壓二明珠一舟楫通。

五色雲浮日上東。  
瞻望願覺 皇都近。

樹色滿二樓還細雨。  
鐘聲隔二岸又回風。

と、以て其の詞藻の一端を知るべし。著稟明集及草餘集あり。支山は美濃の大守土岐頼清の子、相國寺に居る。著西巖集、臆隱集あり。惠鳳は曾て支那に遊び、歸朝の後、東福寺に居る。寛正六年西游稿の著あり。遺稿を竹居清事と云ふ。南江は初め相國寺に投じて、法を支山に嗣ぎ、後、一休和尚に隨從せり。詩稿を鷗巢集と云ふ。

是より先、五山學僧の美濃に来れるもの、夢窓疎石(虎溪山永保寺を開く)あり。寂室元光(美濃東禪寺に居る)あり。龍湫周澤(揖斐大興寺開山)あり。太清宗渭(武儀郡神淵龍門寺に住す)あり。疎石には夢窓國師語録あり。元光には寂室録あり。周澤には隨得集あり。太清には紙襖録あり。又、後れて應仁の初、萬里周九は來りて鶴沼に棲居す。著梅花無盡藏あり。

應仁、文明の前後、郡上の東常縁(東益之の子)の一門學僧を出すこと最も多く、其の叔父に江西龍派、慕哲龍攀(並に千葉師氏の子)あり。弟に正宗龍統あり。子に龍宗常庵あり。龍派には續翠集あり。龍統には禿尾柄帚及禿尾長柄帚あり。常庵には角虎集、寅闇集及崇常庵文集あり。(野史、五山詩僧傳、五山文學小史)

室町の季世には雲外、東竺、及び玄興、南化あり。雲外は厚見郡高桑村の人、建仁寺の兩足院に居る(僧長軍師として招かんせしに奉をさして天上せりと傳ふ)嘗て上加納織田塚に戦死者の靈を吊ひ、一偈を作りて曰く。

一塔飄然壁二碧空二。

從來將二謂各英雄。

戰場秋晚好時節。

劍樹刀山黃落風。

と。(上加納圓德寺内碑文)玄興は美濃の人、快川紹喜に參して大事を決得す、天正四年稻葉一鐵の請に應じ、曾根(安八郡)の華溪寺の開山第一世となる。著虛白集あり。(華溪寺略縁起、佛教大辭典)

此等禪僧の詩文集は、中には泯滅して傳はらざるものあれど、多くは叢林の間に傳唱せらる。曩に五山文學全集の刊行あり。初めて世に知らるゝに至れり。

以上述ぶる所は、纔に全豹一斑に過ぎず。此の他、尙、學識に富める禪僧の美濃に來往せるもの亦少からず。以て、濃州の文化が此等禪徒に負ふ所無き能はざるを知るべし。

## 第二章 創始期

### 一、元祿以前の文化

元和建齋の後、世を擧げて泰平を謳歌するの時、美濃文教の先驅たり、且程朱學の祖たりしものを戸田氏鐵及び深田正室となす。氏鐵は大垣に封せられ、正室は名古屋藩に仕ふ。稍後れて加納に長沼澄齋あり。更に後れて梁田蛻巖あり。然れども當時文教未だ開けず。果して幾何の風化を郷土に及ぼせるか、知るべからざるなり。

戸田氏鐵はもと武弁の士なり。父を一西と云ひ左門と稱す。關原の役徳川秀忠に従て東山道を上る。明年江州大津の城を膳所に移して一西に賜ひ、三萬石を食む。氏鐵文祿四年叙爵して采女正となり、父死して左門に改む。元和二年尼崎に徙り五萬石を食み、寛永十二年乙亥七月大垣城を賜ひ、五萬石を加賜せらる。同十五年島原の賊を討せり。

氏鐵幼より好んで書を読み、略々經史に通ず。學識あり。其の膳所に在るや、講武の暇、藤原惺窩に従ひて、四書六經及び通鑑の旨を問ふ。惺窩先生行狀に「戸田左門氏鐵問通鑑綱目。先生開首卷講温公名分論」といふものは是なり。又林羅山、菅得庵を招致して、經書を講じ、老莊を談じ、好んで古今を討論す。老後閑居して常閑と號す。明暦元年二月十四日卒す。年七十九。城西圓通寺に葬る。法號を覺岸院殿長樂常閑大居士と云ふ。著す所八道集、四角文集及戸田左門聞書あり。八道集は明君、闇君、良臣、俊臣、賢道、愚道、武道、自欲の八篇より成り、公が子孫の爲に萬世の鑑戒を垂れたるものなり。今、日本教育文庫に收載せらる。

四角文集は一に志學文集と云ふ。學問、修身及び爲政に關する辨訓要道の類を収録せるものにして、公が自身修養の資に供し、併せて子孫に遺したるもの也。左に其一節を抄せんか。

玉不琢、不成器。人不學、不知道。是故古之王者。建國君民。教學爲先。說命曰「念終始、與于學」。其此之謂乎。  
君子視人之善、猶己之善。故開道誘掖以成之。視人之惡、猶己之有疾。故規戒撻撻以止之。  
猛虎猶懼不若、蜂蟻之致、實育之狐疑、不若童子之必死。所以貴於果斷一也。志非果斷一則不立。勤非果斷一則易倦。聖人者惟輔天地之宜、以順物理之自然一已。抑豈敢有所爲、以拂自然之理一也哉。

攻心爲上。攻城爲下。心戰爲上。兵戰爲下。  
治國之難、在於知賢、而不在于自賢。

以て其の一斑を窺ふに足らん。此の書久しく公庫に藏せられ、後其の所在を失せしが、曩に戸田伯爵邸内寶庫より發見せられ、曩に大垣市制實施記念の展覽會開催の際、天主閣樓上に陳列せられて、一般に觀覽せしめられたり。(八道集、古代人物志、岐阜縣地誌、樂城會誌)

深田正室、名は得和、字は正室、圓空と號す。犬山城主石川光吉の孫、美濃加茂郡深田村(今は坂祝村に屬す)に居る、因て氏とす。人と爲り剛毅明敏、京に入り、學を堀杏庵に受け、兼て天文地理に精し。寛永十三年初めて尾州藩に仕へて儒官となり、君側に書を講ず。徳川義直の命を受けて初めて學問所を開きしは此の人にして、是れ後の藩校明倫堂の基をなせり。寛文三年歿す。南天道町徳林寺に葬る。子明峰、孫慎齋、曾孫厚齋並に尾藩の儒官たり。遂に我が美濃文化と直接相關する所なし。(日本教育史資料、名古屋史要)

加納には、寛永十六年、松平光重、明石より封を移し、光永を経て光熙に至り、正徳元年山城の淀に移る。其の間七十餘年、前に長沼澹齋あり、後に梁田蛻巖あり。並に藩に用ひらる。  
長沼澹齋、名は宗敬、字は外記、澹齋と號す。父廣次、松平直政に松本に仕へ、後去つて松平光重に明石城に客たり。寛永十二年宗敬を生む。宗敬生れて三四歳奇童の稱あり。光重の封を加納に移すや、宗敬之に従ひて來る。年十二仕へて近習となり、百石を食む。十六にして、疏を上りて事を言ひ、後又讒言を進むること數次、遂に合はず、去りて江戸に赴く。後、筑後國主有馬頼利に仕へ、寛文八年致仕す。

初め宗敬の加納に在るや、圓明院の開祖秀導老師が兼ねて文藝に通ずるを以て、就きて字を習ひ、旁兒の小學を讀むを聞きて、輒ち能く之を記す。老師爲めに其文を摘みて講解す。宗敬大に悦び、是より篤く洛閩の説を信じ、持教を以て主となし、聖賢を以て必ず及ぶべしと爲し、經術を沈研し、傍ら甲州流の兵法を學び、古今の兵書を稽查し、和漢洋を參用して、兵要錄二十二卷、(安政二年出版、佐藤一齋の序あり)を著す、而して最も深く悟るものは風后の握奇、武侯の八陣にして、握奇八陣集解の著あり。一時の聲譽海内に高けれ共、權門に奔馳するを好まず。又兵家を以て自ら名づくるを欲せず、必ず先づ經を説きて武に及ぶ。晩年山城の伏見に隱る。元祿三年歿す。年五十六。墓は伏見の榮春寺に在り。學徒數千人、長沼流の兵法天下を風靡せり。

加納圓明院に澹齋の靈牌及行狀を藏せり。靈牌裏面の文及行狀、共に尾藩の世臣中山和靖の撰する所、但行狀は今傳はらず。又境内に遺跡碑あり。題して「長沼澹齋先生遺跡碑」といふ。碑文は木曾福島山村良由侯の撰に係る。惜しむべし、文字磨滅して讀むに堪へず。(事實文編、澹齋靈牌、及同遺跡碑文)

梁田蛻巖

梁田蛻巖、名は邦美、字は景鸞、通稱才右衛門、蛻巖と號す。父勝、秀麻橋侯に仕へ、寛文十二年蛻巖を江戸の邸に擧ぐ。蛻巖生れて穎悟、幼にして學を好み、人見鶴山に就きて學ぶ。又山崎闇齋の學を喜び、其の著につきて精研す。才識高遠、業大に成り、最も詩に工なり。年二十二にして江戸に徒を教ふ。後鶴山を介して新井白石に見え、又室鳩巢、三宅觀瀾等の諸名士と往來す。白石妄りに人を容れず。獨り蛻巖の才を異とし、厚く之と交るといふ。元祿十年、年二十六、加納松平侯に仕へ、文學顧問を以て月俸三十口米を給せらる。居ること十年、寶永三年致仕して去る。其の執政に寄する詩に曰く。

釣響當日脱羊裘。

遺恨至今凝不流。

と。享保四年、年四十八、赤石藩の文學となる。蛻巖程朱の學を修め、傍ら禪理に參し、又神道を信ず。恒に言ふ「宣聖之學。東方之道。乾毒之教。鼎足不相悖。」と、蛻巖詩才巧妙、變幻百出、奇正互用す。而して鍛鍊力を極め、屹々休まず。少より老に至る迄格調屢變す。初は宋を學び、中年唐を學び、又退いて明を學ぶ。而して遂に初盛唐を以て標準とす。江村北海曰く「讀蛻巖之集。譬猶上三崑崙之邱、步步是玉。入三梅檀之林、枝枝是香。詩至於此、宜無遺論。而猶有未盡善者一何也。蛻巖用才太過耳云々」と。文を作る尖新、亦其詩の如し。寶曆七年歿す、年八十六。左に其の詞藻の一斑を示さんか。

雜詠

昔我客瀘州。一登養老山。斷崖數百仞。青壁不可攀。水崖分兩道。迸落白雲間。林風散珠玉。灑射洗塵顏。別來三十秋。音音留泉石。夢從羽人遊。煙霞繞巾烏。神灑飲椒闌。頓覺換綉魄。飄然駕蒼虬。天關遠咫尺。登三觀。楊峰。古壘烏啼不見人。嶺雲澗水共傷春。誰知夜半風前笛。吹落梅花一作戰塵。伯夷叩馬圖。獨憐義士滅戎衣。華山作日春烟綠。不及首陽崑崙薇。

所著、四書講義、太伯至德章考證、蛻巖詩文集、蛻巖問答書、清詩選、學範等あり。子邦鼎業を繼いで文學となる。其の加納在任の邸趾を蛻巖屋敷と云ひ、妙泉寺附近に在りしと云ふ。(日本詩選、先哲叢談、近世叢語、日本教育史資料)



當時加納の地前後此の二人あり。後年學者詩人種を接して出づるもの、豈其の風を望んで起つに非ずと云ふべけんや。

(程朱學派)  
 藤原惺高 名肅、字敬夫、播磨人  
 元和五年歿  
 林羅山 名信時、字子信、人見下關軒、名壹、字道生、稱林塘庵、入見鶴山、友元、又號竹洞  
 細杏庵 名正意、字敬夫、深田正室、近江人、仕尾藩  
 戸田氏鐵

### 二、元祿以後寛政以前の諸藩の文教

我が美濃諸侯の文學を好めるもの、前に大垣戸田侯、加納松平侯あり、然れども未だ藩費の設あるを聞かず。其の是あるは岩村藩を以て嚆矢とし、之に次ぐを高須藩及び郡上藩とす。

岩村藩

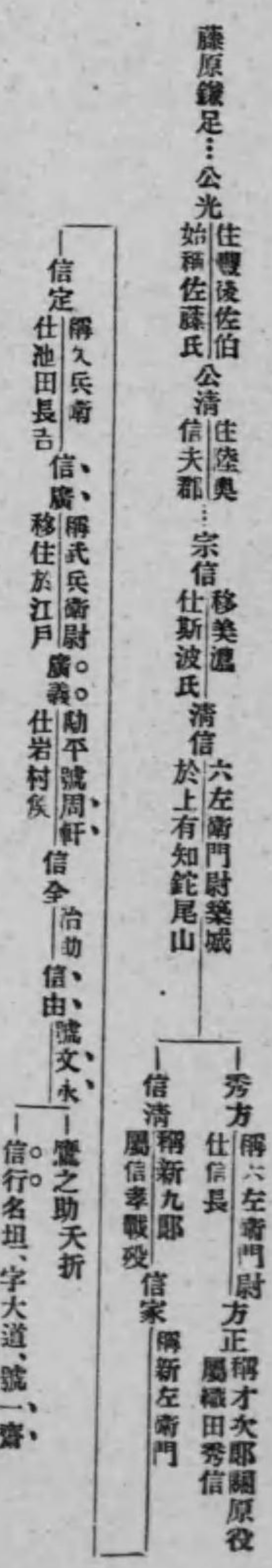
1. 岩村藩

元祿十五年九月松平乘紀(大給松平と云ふ)信州小諸城より岩村に移る。乘紀儒學を尊崇し、居城の後、學舎を興立し、名を文武所と唱へ、後知新館と改む。後藤松軒の門人佐藤周軒聘せられて儒員たり。學派は程朱學なり。ついで服部南郭の門人福島松江及佐藤文永(周軒の孫、儒員たり。是に於て藩學は復古學に轉ず。後西村子麟に至り。再び程朱學に復歸せり。(日本教育史資料)

佐藤周軒

佐藤周軒、名は廣義、小字は勘平、周軒は其の號、晩に塵也と號す。其先は藤原鎌足に出づ。鎌足の裔孫相摸介公光豊後の佐伯に住し、始めて佐藤氏と稱す、子公清陸奥の信夫郡に住す、後十餘世、美濃

に移り、斯波氏に仕ふ、六左衛門清信城を美濃の鈍尾山(一に古城山と云ふ美濃町に在り)に築き武儀郡五千貫の地を食む。斯波氏亡びて織田氏に歸す。長子秀方嗣ぎ、信長に仕ふ。次子信清、別に五百貫の地を食み、織田信孝に屬して戰没す。之を周軒の高祖となす。曾祖信家先ちて卒す。祖信定備中松山城主池田長吉に仕ふ。長吉子無く國除かる。父信廣移りて江戸に住み、周軒を生む。(近世哲先叢談)



周軒學を好み、後藤松軒の門に學ぶ。嘗て京師に遊び、便道伏見を過り、伯母を省す、伯母家頗る富む。周軒の至るを喜び、且其の篤志を感じ、乃ち百金を出して之に贈つて曰く、「汝此を以て學資と爲せ」と周軒辭して受けず。伯母曰く「辭する勿れ、我が子放蕩、將に産を傾けんとす。其の濫費して以て燕樂に供せしめんより、寧ろ汝に與へて善を爲すの用に充てしめん」と。周軒益々辭して曰く、「一家の主既に此の如し。何ぞ、別に儲ふる所有つて、不慮に備へざるべけんや、余は一介の書生、資無きは固より分のみ」とて、遂に一金を受けずして去れり。以て其の志節の堅きを知るべし。

時に柳澤氏新に侯に封せられ、廣く名士を招く。乃ち秩三百石を以て周軒を聘す。周軒應せず。其の出處を重んずる此の如し。幾も無く松軒の薦により褐を小諸侯に釋く。俸僅かに二十口のみ。小諸は岩

村侯の舊封なり。

周軒人と爲り嚴毅廉直、初めて儒を以て仕へ、後、世子乗賢の傳たり。大に輔弼の義を竭し、舉止動作悉く規するに正を以てし、世子に憚らる。享保二年世子立つ。立ちて一年、左右の少年を聚め嬉戯度無し。周軒屢々諫むれども聽かれず。遂に職を辭せんことを乞ふ。老臣之を白す。侯愕然として曰く「吾過てり。吾過てり。我頑童に昵み、耆徳を遠く。此れ彼の職を辭する所以なり。吾將に過を改めん。卿等盍ぞ我が爲に之を言はざる」と。是より侯懲艾徳を修め、勵精治を圖る。乃ち大に周軒を用ひ、擢んで、老職に陞し、祿を増して三百餘石に至る。是の時岩村の政大に治まり、吏に姦慝なく、民に盜賊なし。侯進みて老中に拜せられ、一時稱譽あるは實に周軒與りて力ありと云ふ。

周軒渡洛の學を奉じ、篤く師説を信す。其の學實用を主とし、虛文を事とせず。所著四書參考、小學參考各若干卷あり。寛保元年七月十七日歿す。年七十七。(先哲叢談、近世叢語)

福島松江

福島松江、名は興世、字は子幹、松江は其の號、茂右衛門と稱す。江戸の人なり。少にして服部南郭の門に入り、護園修辭の説を治む。餘熊耳、石筑波、宇瀧水等と友とし善し。赤羽社中の諸士皆詞藝に銳意し、一人の意を實踐に留むる者無し。松江特に操行確實を以て著る。

初め足有適父の後をつぎ、矢田侯に仕へ、事に坐して去る。家眷五人、窮迫特に甚し。松江遂に儒となり、講説徒に授く。寛延元年(時に年三十七)岩村侯に仕へて儒官たり。後累遷して藩の參政に至る。明和九年六月十日歿す。年六十一。著す所、王制分封田畝考、喪服圖解、官制稱號通考、世語類備、世説私考、絶句解考證、松江詩集、同文集あり。(日本教育史資料、先哲叢談)

佐藤文永

佐藤文永、名は信由、字は壹卿、又子遷、文永は其の號、勘平と稱す。周軒の孫なり。父は信全、治助と稱す。文永幼にして書を好み、佐々木文山を師とす、年甫めて七歳能く大字を書す、名頗る著る。年十四、岩村侯乘賢の侍御となり、世子乗温に友伴して、共に文武の業を習ふ。弱冠の頃服部南郭に従つて學を受く。南郭嘗て文永の樓に題して愛日と云ふ。其の至性あるを以てなり。後、侯卒して世子立つ。頗る任用せらる。寶曆十三年父の職秩を襲て家老に陞る。後、侯老を告げ、世子乗保立つに及び復之に仕ふ。文永三君に歴仕し、老職に居ること三十餘年、安永天明の際、權貴政を弄し、請托風を成す。一度其意に忤へば禍測るべからず。而るに文永恒に其間に周旋し、回護調停以て君事を濟す。功を以て秩三十石を加賜し、原秩を併せて三百五十石となる。天明七年(年六十八)病を以て致仕す。

是より後優游病を養ひ、次子一齋及一力を携へて西國に遊ぶ。幾句の内外、名區勝蹟探討せざるなし。後、數年信州淺間山に登り、又常毛の勝區に遊ぶ。晩に書畫局戯を以て娛となす。文化十一年七月廿七日歿す。年八十、義子信久(小菅氏の子、治助と稱す)職秩を襲ふ。(續近世叢語)

西村子麟

西村子麟、名は信興、子麟は其字、初政、太郎と稱し、後勝三郎と稱す、原姓青木氏、西濃州股御茶屋村青木門三郎の第五子なり。寶曆三年出て、西村氏を冒す、時に年十二、明和二年父政又の後を嗣ぐ。初め命せられて祐筆となる。安永三年西濃代官となり、天明七年東濃代官に徙る。後郡奉行となり、更に勝手用人班となる。初秩十石、年を追うて漸く増し終に秩六十石に至る。

子麟人と爲り恭謙衆に遜る。家貧窶、之に處して恬然たり。好んで書を読む。而して藏書なし。毎に人に就きて借覽す。初め穴戸立庭を師とし、學漢唐を主とす。晩に其學の未だ醇ならざるを悟り、幡然途を

易へ、濂洛に歸せり。當時藩の子弟多く其の門に出づといふ。

其の人に接する温藉謙然、柔情事に勝へざる者の如し。然れども公家の利害を論ずるに及んでは、慷慨激烈、諸老臣の坐に在りと雖、敢て屈せざる也。居常酒を嗜み、山薯野菽、眞率適を取る。未だ嘗て奢侈に至らず。人或は酒肴を贈れば、屬吏を會して相與に飲食歡を盡す。曰く「此物職業を以て之を得。宜しく爾等と共にすべし。焉ぞ獨り之を私するを得ん」と、其の清廉此の如し。或人其の貧を憫み、無盡會を爲り以て之を濟はんとす、子麟辭して曰く、「貧は是れ士の常、何ぞ人を累はさんや」と是を以て人益之を畏敬すと云ふ。

文化八年六月二十一日歿す、年七十。岩村城西妙法寺に葬る。後、門人骨議り、碑を立て以て其の履歴を勒す。題して『西邨子麟先生行實之碑』といふ。現に岩村に存せり。(碑文に據る)

(程朱學派)  
名字未詳、以經明識宏稱、佐藤周軒、  
後藤松軒、私淑于惺高、享保二年歿

(復古學派)  
名雙松、字茂卿、號徂徠、名元喬、名子遷、  
一編、島松、江、  
茲生徂徠、江戸人享保十三年歿、服部南郭、京師人、實曆九年歿、佐藤文永

郡上藩

2 郡上藩

寶曆九年六月、丹後宮津城主青山幸道、郡上八幡に封せらる、前城主金森頼錦、邑内治まらざるに坐して、前年奥州盛岡に幽せられしを以てなり。青山侯世々儒學を尊崇し、曩に江村剛齋を辟して儒官とせり。孫毅庵、また青山侯文學たり。幸道移封の後十數年にして下世し、安永四年其子幸完繼ぎて立つ。天

江村北海

明年間幸完始めて學校を創設し潜龍館と號す。藩の子弟をして必ず學に就かしむ。毅庵の義子北海、客師として來り儒道を講明す。郡上の文教是より漸く盛なり。(日本教育史資料、近世叢語)

江村北海、名は綬、字は君錫、通稱傳左衛門、北海は其號なり。實は伊藤龍洲の次子にして、錦里の弟なり。正徳三年春京師大火あり。龍洲の家災に罹る。妻河村氏播州赤石に往き、兄河村某に寓し北海を生む。北海九歳より十八歳まで赤石に成長す。未だ嘗て學を知らず。好んで俳諧を作り、頗る其奥を究む。赤石の文學梁田蛻巖嘗て一見し、其才を愛して勸むるに學に従事せんことを以てす。且曰く、「子の才氣を以て之を吟哦に發せば、盛唐諸家の典型前に在り。以てよく大名を成すべし。豈十七字の俚歌に苦思すべけんや」と、北海其言に感激し、始めて學に志せりと云ふ。是より晝夜孳々として手に卷を釋かず。之に従事すること三年、享保十九年春、歳二十二、始めて父龍洲に代りて經史を講説し生徒に教授す。殆んど老成人の如し。兄錦里と與に家學を研尋し先業を羽翼す。錦里は經藝を以て聞け、北海は歌詩を以て知らる。又弟清田儋、是は文章に名あり。當時稱して伊藤氏の三珠樹と爲せり。

北海の義父毅庵、名は簡、字は易從、江村專齋の曾孫なり。專齋の第二子宗珉、剛齋と號す。宮津青山侯の儒官たり。其子宗流、訥齋と號す。乃ち毅庵の父なり。毅庵二子あり、長は棕實、青郊と號す、季は如圭、復所と號す、並に毅庵先ちて歿す。毅庵龍洲と約するに、北海を以て其の嗣と爲すを以てす。享保十九年毅庵青山侯の駕に従ひ江戸に在りて病篤し。後事を龍洲に託し、此年六月遂に歿す。是に於て北海出で、江村氏を冒し、職を襲ぎて青山侯に仕ふ。伊藤、江村二家共に歷世儒を以て業となし、北海に至つて一手二絃を承く、奇と云ふべきなり。

(程朱學)

藤原惺高 名那波活所 名胤 字道圓 什紀井侯

伊藤坦庵 名宗恕 字務 伊藤龍洲 名道基 字十崇 本姓清田 爲坦庵嗣

江村北海 清田備叟 名絢 字君錦

江村實里 名縉 字君夏

江村專齋 名宗具 字自 攻瀧洛學

江村剛齋 名宗琨 字友石 任青山侯

江村訥齋 名宗流 字若水 江村毅庵 名簡 字易從 任青山侯

江村實齋 名宗實 字若虛 任青山侯

江村復所 名如圭 字希南 任青山侯

江村北海

北海文學を以て宮津侯に仕ふること九年、歳三十(寛保二年)に至り、侯其の吏才あるを知り、擢んで、京邸の留守と爲し、兼ねて錢穀を掌らしむ。事に幹たること二十四年、邸舎大に理る。後、侯(幸道)封を郡上に移す。北海を召して大に之を用ひんとせしが果さずして即世す。即ち致仕して居を室町の四條下街に卜し、再び諸侯の聘に應せず、翰墨を以て自ら娛めり。然れども青山侯は曾祖剛齋以來の舊主なるを以て、幸道在世の中は言ふに及ばず、致仕の後と雖、比年郡上に往來せるは事實にして、藩校潜龍館の創設にも關與せるが如し。それより客師として藩の子弟を教授せり。其の京師及び郡上の間を往來するや、過ぐる所の宿驛、赤坂、加納、岐阜、關等の人士、教を請ふもの亦少からざりき。

北海詞華を以て一時に鳳鳴し、加ふるに風雅温藉、人皆喜んで依附す。故に才俊の士多く其門に出づ。當時三北海の名あり。大阪の片山、北海、江戸の入江、北海、京の江村、北海、是なり。然れ共、君錫實に三北海中の冠冕たり。其の他姓を冒せしを以て恥とし、經術を以て門戸に標榜せず、自ら好む所の歌詩を以て遠邇に振揚するもの五十年、賜杖堂の名天下に聞ゆ。堂は高祖專齋、後水尾上皇の鳩杖を賜ふを以て命名せし所、毎月十三日諸名士及び門人子姪との賜杖堂に集り詩を賦す。專齋の時より北海まで五世、一

百五十年未だ曾て斷絶せず。是又海内未曾有のものなり。天明八年歿す。享年六十七、著に蟲諫、樂府類解、授業編、諸子擷英、明七子詩評說、日本詩選正編、同續編、日本詩史、日本經學考、杜律刪注、唐詩訓解刪注、北海詩鈔、北海文鈔等あり。而して最も著るるものを日本詩選正續十四卷とす、その撰もと粗莽、故に「納」錢入「選江君錫」の諺ありと雖、採擇頗る廣く、且邦人撰集の魁たり。北海の名幸に朽ちずと云ふべし。(先哲叢談後編、近世叢語、事實文編)

當時郡上藩は北海の薰化を被り、文學最も盛にして、天明年間既に濃北風雅一卷(齊藤雄編纂、江村北海の序あり)の梓行せらるゝあり。次期の文化文政年間に亘り、濃北の一角に據りて文壇に雄視せり。作家の主なるものには藩老小出謝海(名公純、字君蝦、一號蓬萊、通稱關右衛門)を初の、久代播海(名景明、字文靜、一號靜樂園)柘村霞涯(名舜、字君乘、通稱來太郎)飯田白齋(名美榮、字君達、通稱嘉兵衛)水谷君山(名照弘、字晉卿、通稱又七)齋藤恬愈(名安世、字濟美、通稱根桂)同春圃(名安禮、字公節、濟美の子)二村梅山(名公忠)等あり。左に其の詞藻の一斑を示すべし。

新 霽

淡青、綠、鬱、葱、出、樹、高、樓、一、望、通。

新霽、更、披、連、日、悶。

西山、遙、對、夕、陽、風。

小 出 謝 海

閑半樓即事

青山、綠、水、繞、三、關、千、一、空、翠、露、衣、六、月、寒。

不、用、登、山、謝、公、展。

西郊、風、色、曲、賦、看。

登仙橋逐涼

柳、外、風、蕭、暮、景、新。

閑看、三、飛、螢、倚、欄、久。

不、知、水、氣、濕、三、紗、巾。

送三北海先生

河、梁、殘、月、照、離、情。

更、有、三、寒、鴻、知、我、意。

相、呼、頻、作、三、斷、腸、聲。

幾、月、關、山、音、信、稀。

愁、看、木、葉、帶、風、飛。

方、知、塞、上、寒、應、甚。

夜、夜、挑、燈、裁、寄、衣。

以て郡上文學の盛を知るべし。

大垣藩

3. 大垣藩

大垣には前に藩祖常閑公の文學を好めるあり。然れども爾後杳として學界に聞ゆる所なし。享保前後に至り、始めて守屋蛾眉の聘せらるゝあり。其の子東陽及び關祖洲の出づるあり。されど未だ藩校の創立を見るに至らざりき。

守屋蛾眉

守屋蛾眉、名は煥明、字は秀緯、通稱小十郎、蛾眉山人と號す。系物部守屋より出づ。因て守屋を氏とす。其の先は河内國若江東弓削邑の人、高祖小十郎定昌、甲斐の武田氏に仕へ、天正八庚年、參州長篠に於て戰死す。曾祖内藏昌長、繼ぎて武田氏に仕へ、天正十年壬午、鳥居嶺の戰に力戰重創を被り、本國油川に退きて疾を養ふ。武田氏滅びて後、徳川氏甲斐の名族を徵す。昌長之に與る。祖源左衛門定秀、駿州侯忠良に仕へ、侯國除せられて後、下總の古河に退隱して歿す。父唐、字は秀安、江戸に住し醫を業とす。母は黒川氏、元祿六年癸丑年を以て蛾眉を生む。

蛾眉少にして學を好み、家學を受け、繼ぎて醫業を守る。初め安藤東野(名は煥圖、字は東壁、通稱仁右衛門)に學び、後東野に従ひ往きて萩生徂徠に見ゆ。既にして東野歿す。乃ち徂徠の門に學ぶ。學既に成り、特に詩文を好くし、兼ねて書に巧なり。享保九年、大垣侯(戸田氏長)に聘せられ、祿二百石を食む。時に年三十二。蓋し蛾眉を大垣侯に薦めたるは、侯の侍醫安藤奎州(名は順徳、徂徠の門人)にして、友人服部南郭

(名は元喬、字は子遷)平野金華(名は玄仲、字は子和)の兩人も亦之を勸奨せるもの、如し。

蛾眉の仕に大垣に就くや、徂徠は其の行を餞するに送序一章(載せて徂徠集に在り)扁額(題して蛾眉山房と云ふ)一面、書幅(蛾眉山月歌)一軸を以てす。蓋し異數と云ふべし。徂徠嘗て蛾眉を評して言ふ、「東壁死して東壁死せず」と。其の爲す所克く東野に肖たるを以てなり。又以て蛾眉が徂徠の一人として嶄然頭角を露し、護園社中に重きをなせしを知るべし。同門本多忠統侯(勢州神戸藩主、字は大乾、號は猗園)服部南郭、平野金華、越智雲夢(名は正珪、字は君瑞、別號神門)太宰春臺(名は純、字は徳夫)土屋藍州(名は昌英、字は伯暉)の諸子も亦各送序一章を裁し、以て賀し以て警す。其の得意思ふべき也。

蛾眉性恬淡にして洒落、詭激の行、夸詡の言を爲すを欲せず。躬を守る終始一の如し。君子人なり。社交廣しと雖、終生莫逆の友として肝膽相照したるは、服部南郭、平野金華、越智雲夢等の二三子にして、又神戸藩主本多猗園侯の知遇を得たり。蛾眉も詩文を善くすれども、亦稿を留めず、概ね之を燒棄したりと云ふ。然れども此等諸子と一堂に會して放言縱談、詩を論じ文を闘し、應酬馳驅せし狀は南郭文集、金華稿刪、懷仙樓集(雲夢の遺稿)猗園臺集、護園餘稿等の諸書によりて明なり。大垣に移りて後も此等數子との交情は舊に異らざりき。

寶曆四年三月蛾眉病を得、未だ數日ならずして奄々疾極りて食はず。而も甚しき患苦なく、一に窮老の病狀の如くにして、神氣昏からず、言笑常の如し。自ら天壽の起つべからざるを知り、百方藥を進むるも肯て服せず。遂に三月二十五日を以て終る。年六十有二。南郭の吊詩に云ふ。

莫、逆、稀、二、相、見。天、涯、哭。子、桑。故、人、誰、健、在。之、子、忽、變、亡。臨、月、侍、同、世。江、山、竟、異、鄉。賞、音、獨、在、耳。往、事、一、茫、茫。

大垣城西北岡山安樂寺に葬る。配石川氏(同藩石川公忠の女)二男一女を生む。長元泰(東陽)服部南郭に就きて學ぶ。好學俊逸、皆謂ふ「守屋氏子あり」と。次公泰(通稱繁右衛門)同藩栗田氏を繼ぐ。女は同藩河井政休(後政養と改む)に適く。元泰遺命により、墓誌を南郭に請ひ、碑裏に刻す。碑面題して峨眉山先生墓といふ。碑は現に岡山安樂寺塋域に在り。左に其詞藻の一斑を示すべし。

懷仙閣小集得三深字一

壯會真難得。高談睨古今。陽春無和曲。流水有知音。玉斗瓊醴滿。瑤室仙閣深。雄風聊可賦。此處好披襟。

癡 覺 溪

天工斧跡入三崔嵬。

發匣九皋鸞鶴唳。

遷家七世孫哀。

牀山月逐三朝雲一落。

覆石春迎三榆柳一來。

久客探奇麻飯遠。

釣磯獨醉紫霞杯。

三了江留三別際君美一

水鄉夜飲斗牛橫。

客邸筵開坐三月明。

瞻對三芙蓉。含三雪色。

檻當三滄海。抱三潮聲。

萬家榆柳傳三新火。

千里鶯花背三舊程。

君向三天涯。同回首望。

白雲盡處是垣城。

烏 夜 啼

雲如鬢髮月如眉。

起拂三秦箏。寄三相思。

枝上樓烏啼不盡。

佳人一夜奈三牛懸。

守屋東陽

守屋東陽、名は元泰、字は伯亨、東陽は其の號、峨眉の長子にして、享保十七年七月を以て大垣に生る。五歳初めて書を讀む。學を好みて懈らず。年十三、父に従つて東都の邸に赴き、爾後毎に従つて往還す。寶曆四年歳二十三にして父を喪ひ、家を嗣ぐ。秩二百石、猶醫を以て仕ふ。是歲藩主戸田氏長侯の命を以て東都に遊學し、服部南郭に師事すること凡そ七年、好學俊逸を以て稱せられき。明和元年韓使來聘し、道大垣を過ぐ。藩侯命を受けて迎接す。東陽、侯に従つて韓使に桃源山全昌寺に會し、詩及び筆談を以て鋒を交へ之を屈伏す。同六年、歳三十八、命を受けて嗣君氏教侯の侍講となる。安永五年將軍日光廟に詣し、侯、命を受けて警衛す。東陽復之に従ふ。翌年秩三十石を加増せらる。爾後常に君側に奉仕し、復醫を業とせず。侯の燕居するや、召して從容經義を問ひ、古今の治要を議し以て常となせりと云ふ。居ること二年、眼疾を患へ、年を踰えて殆ど明を失す。然れども侯猶侍講、詩を論せしめき。

(近世叢語、日本詩選、三野風雅、樂城會詩、墓誌)

天明二年壬寅四月十四日疾を以て歿す。壽五十一、岡山安樂寺先塋に葬る。諡して澄源院譚圓伯亨居士と云ふ。碑は現に同寺に存せり。著す所東陽集五卷あり。兪樾の東瀛詩選に曰く五卷中亦多可采者。蓋東陽生三於享保中。與三服南郭、高東里(關亭)同時。物氏之矩未燻未遠也。また以て其の詩の價值を知るに足らむ。左に其の二三を抄すべし。

秋日寄三題千屋儀柳頤志亭一

咫尺岡巒畫不彫。高低參錯掌中生。金埒霜飛黃葉冷。

銀壑天散素秋清。

欄前名勝多風景。

坐上交遊皆弟兄。

吳門客舍寄三題三又江杉玄白一

君自神仙才最奇。吾生老去特相思。意氣猶存腰下劍。

歲年偏憶鬢邊絲。

杏林書宿今何處。

萱社風流此一時。

早起 涉レ園

涼天早起望微茫。

設透三園中一曙色香。

冷露猶知惜搖落。

秋闈多處未爲霜。

青樓十二與雲齊。

公子王孫駐三馬路。

長夜宴遊猶未半。

月華深照畫欄西。

室深澤氏、一男(庶出)あり。名は元慶、通稱柳太郎、年尙幼なるを以て、姉婿河合政養の仲子元萬を以て嗣となせり。元萬の養嗣隨齋(もと戸澤氏、山鹿流の兵學を以て聞え、兼て書及彫刻を能くせり)隨齋の養嗣元能(もと藤江氏、側役より郡奉行となり、明治の後不破郡宰たり)を経て、當代基三郎氏に至れり。

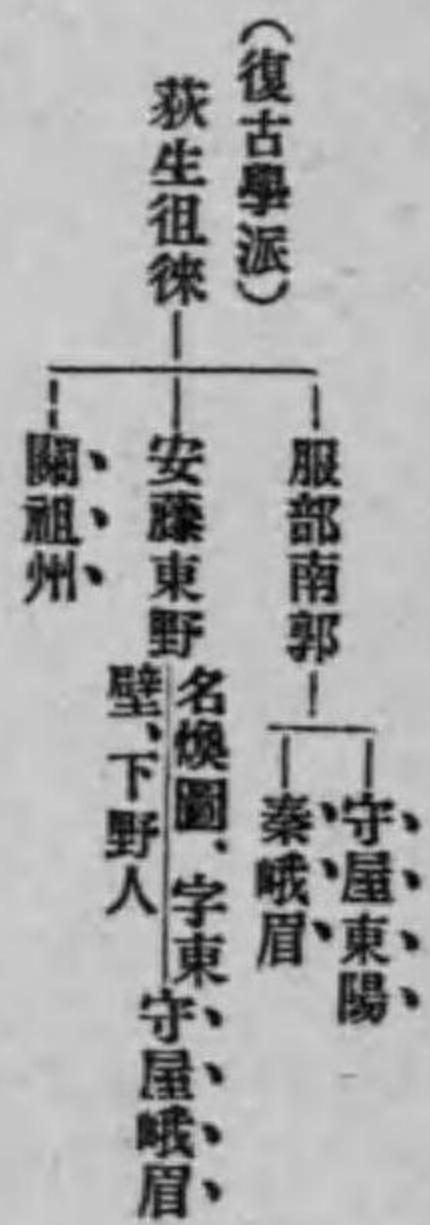
(東陽集、三野風雅、東瀛詩選、服元立撰、東陽墓碑銘、藥城會誌)

關祖洲

關祖洲、名は弘、字は子光、通稱安之進、大垣の人なり。遠祖勝興、戸田氏に鳥原の役に從ひて功あり。子孫世々大垣に仕ふ、父を勝智と云ふ。祖洲人と爲り質直、阿諛を好まず。常に戸を閉ぢて書を讀む。壯に及び、四方に遊ぶ志あり。乃ち母弟を以て嗣となし、東遊して物徂徠に從學す。後又去りて京に入り、力學して家園を窺はざること十年、寛保二年、初めて尾張に行きて學を講ず。門人日に増し、名一時に高し。乃ち命を受け、藩學に登りて講説すること累歲、安永二年八月歿す。年七十五、城南天寧寺に葬る。子元洲、名は嘉、また業を繼ぎ、明倫堂教授となれり。(日本教育史資料、名古屋史要)

秦峨眉

當時畿園の流を汲めるものに秦峨眉あり。便宜此に附記すべし。峨眉名は原丕、字は子恭、美濃の人(未だ郷貫を詳にせず)弱冠東遊して業を服部南郭に受け、又書を細井廣澤に學ぶ。業成りて後尾張に來り塾を開く。從學者多し。天明二年出で、參州刈谷侯に客たり。寛政三年九月子滄浪(名は鼎、尾藩明倫堂典籍となり、後教授に進む)の家に歿す。年七十六。(尾張名家誌、名古屋史要)



高須藩

4. 高須藩 其他

高須藩にては享保年間始めて學校を建て、日新堂と稱す。惜むべし文書散佚して當時の狀況を知るに由なし。然れども後年川合春川を出し、稍後れて川内當當を出せるより見れば、必ず文教の見るべきものありしなるべし。(當當に就きては第三章に記すべし)

川合春川

川合春川、名は孝衡(修して衡とも云ふ)字は襄平、通稱丈平、本姓源、佐竹氏、出で、川合氏(川合を修して川と云ふ)を冒す、下石津郡高須の人、寛延三年(皇紀二四一〇年)を以て生る。明和元年(歳十五)郷を辭して彦根及び京師に遊び、業を龍草廬に受け、特に文章を以て名を知られ、傍ら書に巧なり。後諸州に遊歴す。安永六年丁酉春郷里高須に歸り、賦して云ふ。

丁酉春歸三高須紳堂、喜三千賀籠郷至。

十載辭家客三帝郡。

羈愁幾度哭窮途。

故園今日歸來興。

無恙高陽兩酒徒。

以て當時の面目を窺ふべし。

安永八年己亥、歳三十、紀州侯に筮仕して儒官となる。天明二年壬寅、春川詩草四卷を上梓す。此の

歳また高須の草堂に歸り賦して云ふ。

壬寅春歸高須草堂

書劍辭家已十春。

今朝歸臥渭水濱。

艸堂燕雀猶知我。

來賀風流舊主人。

天明四年其の父に寄する詩あり。曰く。

奉寄三家殿君

初余總角辭鄉。遊學于彦根于西京。後遊歷諸州。時々雖歸郷。定省曠日者。動閱歲矣。今也客寓紀府。者六二年于茲。離膝下于千里。音問日疎。而家君今茲六十有九。大婦人五十有二。可謂老矣。孔子曰父母之年不可不知也。一則以喜。一則以懼。又曰父母在則不遠遊。余也雖膝下于千里。不能奉養代勞。以爲父母之憂。則其罪孰甚焉。中夜熱腸爲之不能安寢。乃賦一律奉寄呈。以謝過云。

陸咄咄望音冥問。

自悼辭親久不還。

黃耳問安千里字。

白頭入夢半宵願。

逝波日夜驚年速。

疲馬盤桓畏路艱。

海岳感恩功就晚。

憂心知撓淚潸々。

以て其經歷の一端と、如何に其孝心の深かりしかを知るに足らん。

文化二年乙丑(歳五十六)、命あり、紀州領松阪學問所に掌教となる。(五山堂詩話に云ふ「丙寅歲掌教松阪學院」云、丙寅は文化三年なり、恐らくは是れ一年の誤あるべし)越えて文政七年九月二十五日病を得て歿す。年七十五。

春川交道頗る廣し。龍草廬、江村北海を初とし、大江玄圃(字稚圭)、芥川丹印(彦章)、松平君山、岡田新川(挺之)、伊藤冠峰(吉甫)、頼春水、宮田嘯臺、山田芝岡等一時の文人概ね交を訂せざるなく、唱和の作妙からず。一生著作頗る富む。特に深く三禮を研究し、之を以て一家の説をなす。著す所、二禮説統、周禮圖解考工記(考工記圖解とも云ふ。寛政二年林述齋の序、同八年紀平洲、山本惟恭等の序あり)圖官質疑、儀禮釋、

宮圖解、五禮類纂、讀韓文法、國朝詩韻、作文圖箋、勢遊草、梅花月百絶、帝王承統譜、鶴樓文集及春川詩草(四卷、天明二年版行、龍草廬、岡崎屋門の序及兒玉寄雄の跋あり)等あり。

左に其の養老泉の詩を擧ぐべし。(序中謂ふ所の丙辰之歳は寛政八年なり)

温之西南一帶山峰連絡七十餘里。距伊勢界。古稱之多度。白石山麓有二瀑布。曰養老。旁有二涌泉。國史所載也。丙辰之歳。我公自東武歸三雨紀。便道觀于此。一俾陪駕之士作詩。臣川衡賦一篇一以上。

關山南折越之多度。	六六奇峰峙水滄。	白石之山何崔嵬。	雲烟深處掛瀑布。	水柱抽雲明月宮。
吳斧經營到瓊瑤。	風潭日映吐彩虹。	翠屏半截支豹霧。	千珠萬珠撲巖壑。	俄疑振集群龍。
沫飛三細雨。無一晴陰。	三冬不。收雷震怒。	信問何年銀漢水。	掛向三層屋。半天注。	壯觀對此信奇哉。
凌斗仙槎直可沃。	憶昔山中孝男兒。	日夕采樵失歸路。	班荆荆頭暫流憩。	一掬神瀉似甘露。
汲去歸舍獻其親。	霜髮還黑愈沉痼。	聖明天子好神仙。	蓬瀛大藥徒久慕。	何知此泉能延壽。
大守上言詳其故。	爲促三黨興。幸此纒。	應瑞政元保二年祥。	養老泉兮養老泉。	永錫三之美。垂竹葉。
爾來一千有餘年。	何人游躡追三謝傳。	我公述職歸三南州。	便道遊獵中山兔。	泉石幽賞探奇蹤。
按。傳偶駐驂騎步。	山靈相迎應接動。	兩師記禮風伯驚。	列缺光流石扇開。	雲裡仙人引相識。
高牙大纛影縹緲。	虎纓春映三花樹。	周王八駿何足言。	從行千騎宴支圖。	我本山下。一布衣。
承恩僱員辱三眷顧。	不才妄欲頌三清遊。	詞篇希得江山助。	林壑爲我生光輝。	唯盼甘泉乏。獻賦。

以て其詩才の富贍を知るに足らん。寛政十年粟笠(養老郡笠郷村)の人佐藤宣衡此の詩を石に刻して建つ。今現に養老神社境内に存せり。

此の他今尾には一時中西淡淵の來りて塾を開けるあり。然れども未だ藩校の創設を見るに至らざりき。(淡淵につきては當時の古註學派の條に於て述ぶる所あるべし)



### 三、當時の古註學派及敬義學派

前編述ふる所の如く、程朱學が諸藩の儒學を風靡せるに對し、主として民間に傳播せるを古註學及敬義學とす。以下當時の二學派に附きて述ぶる所あるべし。

古註學派

#### 1. 古註學派

當時我が美濃にありては宇野明霞の門に武田梅龍及其弟士岐霞亭あり。高須の川合春川(既出)及び加納の宮田嘯臺は明霞の門人龍草廬より出づ。又中西淡淵は曾て來りて今尾に講説す。其の門に笠松の伊藤冠峰あり。岩村の須藤水昌は淡淵の門人南宮大湫より出づ。岡龍洲の門には岐阜の加島圓齋あり。岡田新川の門には神戸の林乾城あり。當時の古註學派、其の人に乏しからずと謂ふべし。(宮田嘯臺に付きては項を改めて記する所あるべし)

武田梅龍

武田梅龍、名は欽、字は聖謨、梅龍と號す。初名は維嶽、字は峻卿、中ころは名を亮、字を士明といへり。本姓は武田氏、修して單に武氏といふ。其の先三河の篠田村に居る、因て篠田を氏とす。梅龍初め襲て之を稱す。明霞遺稿中篠士明と稱するもの是なり。後舊姓に復せり。祖某三河より美濃多藝郡下笠に移る。因て美濃の人となる。父雅好京師に官事し、享保元年八月七日梅龍を生む。故に梅龍京師に成長す。年十六七、始めて學に志し、伊藤東涯に師事す。東涯爲に維嶽、字は峻卿、説を作り、以て之を勗めしむ。年二十一、東涯下世す。乃ち祭文あり。是に於て宇野明霞に従學す。居ること十年、明霞亦世を異にす。乃ち哭詩あり。此の時學既に大成す。終に召されて妙法院親王の侍讀たり。公退の餘暇生徒に

教授す。遠邇益を請ふもの多し。

其の學經史に本き、經濟を以て其の志とす。嘗て曰く「學に向ひ道に入るべき心術を述ぶるものは唯管子の心術内業の諸篇のみ」と。故に管子を校して世に梓行す。又心術の諸篇を表章し、命じて心學古源と曰ふ。赤松國鸞同門に出て、其の學亦一時に領袖たり。而して甚だ梅龍を重んず。其の梅龍に與ふる書に曰く「鴻(國鸞の名)少時平安に遊び、字(明霞)先生に従ふ歳餘、藩命限あり、未だ益を請ふを盡さずして歸る。幾くもなく先生逝く。後數歳藩命を以て東武に之く。道平安を過り、即ち林生を訪ひ、相與に先生の墓に謁し、感泣已む能はざる也。林生乃ち不佞に謂ふ。「子何ぞ一たび武兄を見て交を定めざる。其の人才學富贍、且、宇先生の教を奉ずる年あり。」と。鴻不佞、遂に林生を介して足下に見ゆ。則ち唯に典型の存するのみならず。其の言の夫子に似たる、人をして感喜交併せしむ。」と。梅龍又兼て武事に名あり。其の憶昔歌に曰く。

東山年少抱雄圖。學弓走馬讀孫吳。腰間龍劍金轡。時三峯雲常鳥呼。

飄然折節改前途。自見當年君子儒。

と。又宇明霞贈詩に曰ふ、「閉關憐我久。説劍愛君深。」と。又墓碣記に云ふ、「少時習武技。講明孫吳之書。」と。居常曰く、「絳灌文無く、隨陸武なし、全士と稱すべからず。」と。是を以て士を誨導するや必ず文武を稱ふ。明和三年十月十六日歿す。墓は妙心寺中聖澤院に在り。年五十一、私諡して文靖と曰ふ。著心學古源。感諭。唐詩合解。滄溟文選。滄溟尺牘解。梅龍遺稿及明文選あり。左に其の詞藻の一端を示さん。

夜 過三逢 阪一

逢關山夾阪。一路月光明。人影過松影。葉聲訝雨聲。天香淡海澗。雲吐朔鴻橫。夜色秋無限。西風羈客情。

冬 夜

書窗月忽暗。風杳松聲寒。前山應是雪。半夜上樓看。

遊 仙 曲

金瓊曉擁百花清。月落珠林一鶴驚。應是真人朝帝處。五雲舍起玉堂聲。

(先哲叢談、日本詩選、續近世叢語、事實文編、平安墓所一覽)

土岐霞亭

土岐霞亭、名は欽尹、字は聖耕、元信と稱す。武田梅龍の弟、故ありて土岐の姓を冒す。兄と同じく宇野明霞の門に學びて、平安に講説す。詩文に巧にして、書も亦佳なり。著す所余州對選、霞亭詩稿等あり。寛政五年三月十二日歿す。年六十一。墓は京都下寺町蓮光寺に在り。(續諸家人物誌、鑒定便覽、平安墓所一覽)

中西淡淵

中西淡淵、名は維寧、字は文邦、淡淵と號す。通稱會七郎、三河の人、父を福尾莊右衛門と曰ふ。奥平氏を娶り、淡淵を三河の舉母に生む。後、尾藩に仕へ、中軍の騎士となり、竹腰氏の麾下に隸す。其の家宰中西曾兵衛なるもの淡淵を養ひて嗣子と爲さんことを請ふ。是に於て淡淵就て贅し中西氏を冒し、竹腰氏の邑今尾に移居す、食祿二百石。中西氏は原と三河の秋元氏の庶族なり。故に修して元と爲し、文事に於ては元を稱せりといふ。

淡淵若冠にして學に志し、暗室に坐するを好む。白晝と雖も戸を閉ぢて僅に客光に照し書を讀む。夜は燈檠に對し、毎に鷄鳴に至りて隠几坐睡す。以て平生となし。竟に寢に就かず。家人皆之を異とす。

資性溫和、動止慎重なり。尾藩の文學木下實間(名希聲、號蘭亭)稱して云ふ、「亮節威望、以て天下の鄙を教ふるに足る。」と。

淡淵始め今尾に在りて生徒に教授す。歳三十に至り、弟子日に進み、門に遊ぶもの數十百人。幾も無く又尾府に來る。寛延三年春其君竹腰氏に従ひて江戸に出で、其の邸(赤坂門外に在り)の官舎に寓す。來て業を請ふもの絶えず。遂に命を受けて費銀を賜與せられ、講堂を芝の三島街に卜築し、叢桂社と曰ふ。竹腰氏事有れば則ち有司をして就きて諮問せしむ。恩遇甚だ厚し。四方の士風を望んで輻湊し、名聲大に聞ゆといふ。

淡淵の學授受する所無し。其の經を講するや、漢宋に拘せず、新古を別たす。人の求むる所に從ふ。或は漢唐の傳疏を用ひ、或は宋明の註解を用ふ。蓋し仁齋祖徠が漢宋に指摘し、其間に取舍し先儒を謗議するを以て己が量を知らざる者となす也。常に謂て曰く、「聖人の道は學問の深淺に在らず、全く徳を成し、才を育し、其の器用を盡すに在る耳。」と。常に名節を以て人を勵ます。其の涵濡の化自然に門人に及ぶ。其の才を育て徳を養ふ、其の言ふ所に慙ぢず。細井平洲、南宮大湫、伊藤冠峰等、皆得易からざるの士なり。

淡淵痰飲を病み、病篤きに至り尙講を輟めず。將に起たざるを知り、筆する所のもの數本を擧げて悉く之を焼かしむ。弟子皆之を惜む。乃ち曰く「未定の書なり。恐らくは後世を誤らん。」と。僅に文集十三卷を以て、之を細井平洲に屬す。(惜しい哉、今其の所在を失せり)遂に寶曆二年七月十五日を以て三嶋街の寓に歿す。年四十四。三緣山中瑞華院に葬る。弟子多く心喪に服す。竹腰氏深く之を悼み、有司をして其

の葬車を護送せしめ、又厚く子弟の塾に寓するものを撫し、數々金帛の賜ありと云ふ。(子孫今名古屋に在り今尾には旁系の子孫住せり。)(先哲叢談後編、續近世叢語)

## 伊藤冠峰

伊藤冠峰、名は一元、字は吉甫、通稱も一元、伊勢の人なり。家世々巨商、絹紬を賣るを以て業と爲す。少にして質素を尚び儀操を修めず。日夜書を讀む。極て勢利に淡く、簿書計算の煩を厭ひ、家を弟に委ね、名古屋に遊學し、業を中西淡淵に受く。又醫事を好み、自ら處方を驗す。名古屋に在ること五年、後諸州に遊歴し、經史詩文を練る。晚年美濃の笠松の里に隱居し、徒を教ふ。

冠峰の尾府に在る時南宮大湫と情交最密なり。淡淵東行の後、其の門人、經義に従事するものは半は大湫を推し、歌詩を操練する者は半ば冠峰を推す。醫玄澤なるもの府下に名あり。家資富豪、頗る學を好む。厚く冠峰の才を愛し、妹を以て之に妻し、益其業を修めしむ。其の意蓋し其の歌詩を以て大湫を壓倒するに在り。冠峰其の意を知り、眼疾ありと稱し、講業を休み、其門人をして大湫に従學せしめ、遂に辭して歸郷し、諸州に漫遊す。人皆其の虛退なるを稱せり。

冠峰笠松の里に移居し、田數頃を購ひて自ら養ひ、山水の際に徜徉して以て娛樂となす。然れ共猶書を讀み業を講じ、子弟に教授す。好で禮義を以て維持し、郷里皆之が爲に慕悦貴重せり。笠松の里、名古屋を去る數里、冠峰大湫と、襟情紆意、舊よりも益暱し。明和六年大湫桑名より江戸に移る。其の妻子を名古屋の族人に託す。約するに一年を過さば人をして必ず迎へしめんことを以てす。然れ共大湫後火災に遭ひ、盡く資を失ひ、經過二年餘にして之を迎ふる能はず、冠峰妻子の意を感憐し、之をして俄に行装を治めしむ。蓋し名古屋より江戸に至る驛程十數日、資錢一人五十繕有るに非ざれば旅費を充たすに足らず、況や婦兒三四人家を擧て行に就くに於てをや。冠峰家固より貧窮、田宅を具當し、家財を賣却し、金拾五兩を得て之を與へ、江戸に護送せしむ。大湫懇到を謝し、其の金をかへす。冠峰辭して受けざりき。

冠峰天資謙虛、才學頗る富む。大湫屢々江戸に出でんことを勸むれども肯かず。又細井平州尾府の儒員に薦むれども、又應せず。辭して曰く、「抗顏儒者と稱するは吾が能く及ぶ所に非ざる也」と。常に謂ふ「居は以て膝を容るゝに足り、衣は以て體を覆ふに足り、食は以て腹を満たすに足り、樂は以て憂を忘るゝに足る。我日々に安し、豈其餘を願はんや」と。天明中歿す。年七十餘。著す所、自放編三卷、冠峰文集五卷、綠竹園詩集五卷あり。江村北海綠竹園詩に序して曰ふ、「冠峰をして身都下に在て藝苑に馳聘せしめば、乃ち其の歌詩の名方今の赤羽(服部南郭)護州(高野蘭亭)の諸子に譲らず。」と。(此の書今幸に米澤市の圖書館に藏せらるる云ふ。)

(先哲叢談後編、諸家人物志)

## 須藤水昌

須藤水昌、名は元昞、字は仲虎、通稱文三郎(又文三に作る)水昌山人と稱す。美濃岩村の人。邑に水昌山あり。水昌の號蓋し此に基くなるべし。須藤又は首藤に作り、修して藤、又は藤と言ふ。幼にして孤、年十七、師友を京攝に求め、遂に桑名に至り、南宮大湫に學ぶ。明和戊子の年大湫江戸に移る。水昌之に従て時名あり。安永元年大湫之が爲に居宅を深川松井街に買ひ、之に移居せしめ、教授を以て業とす。間も無く其の居火災にかゝり、又大湫の家に寄寓す。平生酒を飲む。遂に疾を致し、安永元年八月廿二日歿す。年三十三(一に三十五に作る)平生意を進仕に絶す、講說益密なり。頗る其の師大湫の人と爲りに類す。惜むべし、未だ抱負を展ぶるに至らずして歿せり。著す所、日本名家詩選、赤穂四十六士論、唐話

小説、水昌山人遺稿。歲華記、麗廣集あり。(先哲叢話、儒學源流)

讀二書 文 哉一

我在二東部二君帝郷。 各天愁思正茫茫。 偶臨二雨國橋邊水。 憶得四條河畔涼。

加島圓齋

加島圓齋、(又加藤に作る。先哲叢談、近世叢語並に加島とす)名は矩直、字は宗叔、圓齋と號す(或は泉齋に作る)、通稱宗右衛門、(又莊右衛門に作る)美濃の岐阜の人、京師に徙り、業を岡白駒に受く。白駒號は龍洲、性褊急にして、其の使命を受くるもの毎に堪へざらんとす。獨り宗叔能く龍洲の意を得。龍洲亦能く己を折つて宗叔が言を用ふ。是を以て家人動もすれば宗叔に詣つて請ふと云ふ。

家産原と富む。後稍衰敗し、遂に窘迫を致す、然れども以て憂と爲さざる也。恒に酒を嗜み、動もすれば輒ち狂態を爲す。心に感ずるあれば、則ち涕泣す。激論するに及びては則ち席を撃つて高談す。四隣爲に驚く。而して平居母に事へて甚だ孝、其の欲する所に從ひ、貧乏を知らしめざりき。後浪華に於て講説す。深く時習の詩文を厭ひ、終身詩の贈答をなさず。専ら經義を以て任とす。經を説く毎に注解己が意に愜ふ有れば則ち號んで曰く「朱子大明神」「徂徠大菩薩。」と。如し意に合はざる有れば則ち口を極めて罵詈せりと云ふ。天明中歿す、年五十餘。

著、周禮說筴、儀禮解義、禮記鄭注補正、孝經鄭注疏釋、論語大疏集成、雜考等あり。

(先哲叢談、近世叢語、續諸家人物志)

林乾城

林乾城、姓は源、名は希逸、字は子壽、乾城は其號、後凡城と號す。美濃神戸の人、業を尾藩の岡田新川(名は宜生、字は挺之、號は新川)に受く。又、恩田蕙樓(名は維周、字仲任、蕙樓は其號、又庵園、白山と號す、新川の弟)と交り益

を受く。最も詩に巧なり。後林冀北に從つて醫を學ぶ。文化中卒す。著有斐然集あり。

寄蕙樓先生

伊昔榮孤志。破レ産客二四方。勇銳不レ曾撓。自比百煉剛。顧己無二倫匹。情性托二文章。志業易二蹉跌。其如二節物忙。頭顱未二六十。蚤已得二秋霜。明鏡從レ是掩。形影欲二相忘。何人憐二不遇。唯有二蕙翁詳。山中一晦跡。閑事甘二疎狂。杖藜堪二散步。松風礪道長。頑石試相叱。不レ敢起成二羊。寐

輾轉更深交。健難。百年榮辱集二眉端。守レ燈燈既愁何極。衰朽今傷癩旅事。風流昔記擅揚糠。非二徒此夕魂搖蕩。明日猶增二磊塊看。

以て其の詞藻の一斑を知るべし。(三野風雅)

同時に神戸に林伯英あり。便宜此に附記すべし。

林伯英、名は世興、大進と稱す。伯英は其の號、十歲能く文を屬す。神童の稱あり。年少江戸に遊び、才學を以て知らる。惜むべし、寛政八年丙辰(一に享和元年に作る)年僅に十九にして歿せり。著伯英遺稿(高橋休編、寛政十一年己未宮川龍の序、同十二年恩田忠任の跋、翌享和元年源希逸の序、僧普敬の跋あり)二卷あり。(漢學者著述目錄、三野風雅、國書解題)

登二園 嶺一

幽山遙上白雲頭。 西望中原萬里秋。 落日千峰風色遠。 不知何處是瀘州。

古註學派傳統

武田梅龍、名鼎、字士新、初師二向井三、土岐震亭、龍草廬、名公美、字子明、又君玉、宮田嘯臺、山城人、仕二彦根侯一、川合春川

林伯英

中、西、溪、淵、——南宮、大、秋、——須藤、水、昌、

伊藤冠峰

龍洲、名、白、駒、字、千、里、稱、三、太、仲、——加、島、圓、齋、

加島圓齋

四〇

松平君山、名、秀、雲、字、子、龍、三、

岡田新川、名、宜、生、字、挺、之、

林、乾、城、

別號、幡、圖、尾、張、人、

恩田、蕙、樓、名、宜、充、字、仲、任、本、姓、岡、田、宜、生、之、弟、

## 2. 敬義學派

我美濃に始めて開齋の學を傳へたるは垂井の樸原、哲齋なり。哲齋は久米訂齋の門より出で、其郷に學舎を建て、徒に授く。歿後、同門合田恒齋後を受けしが、間もなく恒齋去りて其傳を失せり。當時別に此流派を汲むものに岡田寒泉あり。寒泉は三宅尙齋の門人村士淡齋より出づ。此れより次期の近藤活齋出づる迄、杳として消息を聞かず。(近藤活齋に就きは次期の部に於て記す所あるべし)

樸原、哲、齋、名、は、篤、好、通、稱、主、佐、又、修、助、と、い、ふ。哲、齋、は、其、號、な、り。不、破、郡、垂、井、の、人、本、姓、栗、田、其、先、大、和、の、樸、原、よ、り、出、づ、る、を、以、て、改、め、て、樸、原、と、い、ふ。家、世、々、驛、長、た、り。酒、造、を、業、と、し、資、産、裕、な、り。哲、齋、性、篤、孝、幼、よ、り、讀、書、に、親、し、む。年、壯、に、し、て、學、に、志、し、寶、曆、中、家、を、子、文、吉、(字、順、固、號、牧、齋)に、讓、り、累、を、避、け、て、京、に、赴、き、久、米、訂、齋、の、門、に、入、り、潛、心、修、學、す、る、こ、と、數、年、其、の、業、大、に、進、む。門、弟、中、第、一、た、り。明、和、八、年、訂、齋、よ、り、孔、子、の、聖、像、(德、川、五、代、將、軍、綱、吉、の、時、支、那、よ、り、贈、れ、る、三、幅、の、一、に、し、て、一、は、幕、府、聖、堂、に、奉、祀、し、一、は、長、崎、聖、堂、に、奉、祀、す。一、は、阿、部、豐、後、守、備、臣、三、宅、尙、齋、拜、領、し、門、人、久、米、訂、齋、に、傳、ふ、と、い、ふ)の、讓、を、受、け、郷、に、歸、り、て、聖、堂、を、建、て、之、を、奉、祀、し、學、舎、明、倫、堂、學、校、を、營、立、し、後、名、を、泗、水、庵、と、改、め、生、徒、に、教、授、す。當、時、訂、齋、が、哲、齋、に、贈、り、て、泗、水、庵、の、落、成、を、祝、せ、る、書、に、曰、く

樸原哲齋

(上略)泗水庵落成に付、何ぞ進申度候へ共、無三心當一候に付、此小學、先考尙齋を斥す、細齋先生へ講書持し候て、亡兄(尙齋の子重德)に渡り、拙者今年迄讀申候本に候に付、致進入候。朱書は先考筆、墨書亡兄筆に候。永く御傳可被成候。

泗水庵は彼の歌枕に名高き垂井の清水(南宮神社鳥居を入りて約二町右側、大樹の下)の傍に在りき。哲齋此に先聖孔子を祀り、又合せて顔子、曾子、子思、孟子の四配と、朱子の像を配祀し、朝夕此の學堂に起臥して、恭敬謹嚴以て之に奉侍し、日々聖賢の書を講説せり。左に其の壁間掲げし所の「泗水庵條制」五條を示さん。

- 一 學堂は德義を修め行實を習ふの地なり。故に此堂に來る人、恭敬を旨として、升降出入禮義に依り、假りにも雜談戲笑すべからず。
  - 一 先聖先師安置の堂中へ、臭穢の物、不淨の躰にて入る事を慎むべし。
  - 一 此堂に於いて日用倫理を講究するの外、詩章雜學の書を講ずべからず。是師傅の定制なり。
  - 一 講會の席次、講習の徒は先門を以て次第をなす。其外の聽衆は此例にあらず。是師門の一格也。
  - 一 釋儒は道異に、學も亦別なり。故に僧法師の衆は講會を斷り申事。是又師傅の規則也。
- 又以て哲齋が教育の要旨と、峻嚴なる開齋派の學風を想見すべし。

哲齋學堂に在りては恭敬謹嚴、進止苟もせざるものありしと雖、また風雅の樂なきにあらず。安永四年春泗水庵の南(今、專精寺鐘樓附近)に白根塚を作りて、芭蕉が「葱白く洗ひ上げたる寒さかな」の句碑を建て、傍に五峰庵(俗に芭蕉庵)を構へて、俳友をつとひ、雅會を催して興をやる。哲齋が自筆の小篇「白根塚を築くの序」一篇あり。以て其の文才を見るべし。

哲齋講學三十餘年、寛政十二年正月二日歿す。享年七十八。壽像あり。贊に曰く、

岩手北村尹志書「其威整齊栗田先生之像。曰先生年已過古稀。予嘗欲下表其陰德。以勉中之其子孫。及我亦老。素意忙迫。敢密使之也。屬其同門合田武明一贊之。爲作詞曰

信三此德一而知下可三以據一之方。存三此仁一而識下不三以違一之術。非三先王之法行一不三之敢執。非三先王之法言一不三之敢道。遐慕孔孟程朱之風。建廟之舉切々焉。以給三道統千古之秘蘊。迺受三尙訂二論之學。立祠之務汲々乎。以繫三正脈極之危。索三觀於此者。余以爲三東山之世豪。人孰有下以負三斯言一者乎哉。後來君子其實悼三乎斯文將喪之心。同三于此先生者其誰也哉。寛政丙辰季夏之朔謹書。

學堂は同門合田恒齋承けて教授の任に在り。文化十二年十二月廿九日夜西町の大火あり。學堂亦半燒す。恒齋遂に江州に去り、爲に五十年にして私立の學堂廢せり。聖像及び尙齋獄中に幽せられて作述する所の白雀錄、狼毫錄を始め、其他の圖書栗田家に傳藏す。然るに安政三年八月十日再び火災に罹り、書函七十個を燒失す。かくて明治十年前後僅かに書籍百二十四部を存せりといふ。此頃栗田家は整齋の曾孫文吾(裕齋、字義明)の代にして維新の大變動に會し、家運日に傾きければ、其の子眞一氏聖像書籍等を他に賣却せり。白雀錄、狼毫錄等は名古屋の某氏に渡り、聖像は今轉じて兵庫縣尼崎町高橋爲久氏の所藏に歸せり。其の添書に、聖像は明末の永曆三年(我が慶安二年)に永明王の筆に成りしものにて、常獻公(綱吉)の所望により支那より贈り來たるものを尙齋拜領せし由を記せりといふ。文吾氏未亡人りう子氏の語る所に據れば、葵紋章を織り出せる帛にて表装しあり、中頃一度修復せしも前の如し。特に京都にて葵章の帛を織らしめて表装せりといふ。孔子及び四配朱子等の肖像は何れも副本あり。其他多少遺物の存せざるに非ざれども、主要なる物の散逸せしは惜しみても餘あることごとし也。

(日本教育史資料、及阿部榮之助氏「垂井の聖堂酒水庵」に據る)

合田恒齋

合田恒齋、名は武明、通稱力五郎、本姓越智、恒齋と號す。京師の儒者にして、如玉(名は温、通稱榮次、仕三阿波藩)の第五子なり。久米訂齋に學び、才學出群、名一時に高し。(日本教育史資料、整齋門人とするが、整齋と同じく、訂齋に學べるなり)寛政中垂井に來り、整齋を助けて教授せるが如し。且其の間又大垣に出張して講授せり。菱田毅齋等就きて學ぶ。(菱田毅齋碑文)整齋歿後、其の後を受けて教授せしが、文化中去りて近江の坂田郡樋口村に移る。(日本教育史資料)文政元年七月四日歿す。享年四十六。(平安墓所集、大日本人名辭書に據る)岡田寒泉、名は恕、字は子強、一に強卿、通稱清介、寒泉は其號、又春齋と號す。揖斐の領主岡田家の族、江戸に貫し幕府に仕ふ。少にして業を山崎派の村士淡齋に受く。(一説淺見綱齋に學ぶと云ふ)後程朱學を攻む。人と爲り明敏俊邁、旁醫理に通じ、又和歌を能くす。經を説く爽快、聞く者悚服す。服部栗齋と善し。寛政の初、幕府以て教官となし、柴野栗山と昌平齋の學政を料理せしむ。尾藤二州、古賀精里に至るに及び、寒泉出で、代官職となり、數萬石の邑を治む。頗る政績あり、下民悦服す。後老病を以て官を辭す。邑人之を聞き、幕相吉田邸に至り留任を乞ふ。幕府乃ち寒泉の請を許さず。居る事數年、乃ち退くを得。文化十四年八月歿す。(儒學源流、先哲叢談年表に據る。又文化四年に作る)年七十一。著、寒泉文集あり。

(儒學源流、續近世叢語、續諸家人物誌)

(敬義學派傳統)



岡田寒泉

### 四、山田鼎石と金龍道人並に當時の詞家

岐阜の地華山藍水の勝あり。淑清の氣鍾る所、自ら偉人を産せざるべからず。曩昔島田忠臣の鶴渭を詠じてより、室町の世愚中及雲外の出づるあり。爾後寥々聞く所なかりしが、明和安永の際より、英才彬々として輩出せり。而して此が先鞭を着けしものは山田鼎石其人にして、此が羽翼たりしものを金龍道人となす。是に於てか其風を望んで起つもの、左合龍山、山田芝岡、堀田石室、野田風川等比々皆數ふべし。延きて加納、關に及び、宮田嘯臺、森東門、三宅牛洞(加納)、山田桐谷、後藤虎邱、司馬阿柯亭(關)等、多士濟々、鬱として藝文の藪となる。亦盛ならずや。

山田鼎石

山田鼎石、名は瑛、字は子成、通稱大藏、鼎石(又真石とも書く)と號す。蓋し其の居岐阜の鼎石街(釜石町)に在るを以て採りて號と爲せる也。家素と豪富、父正伸、常省と稱し、寶曆十年(七十九歳)を以て終る。鼎石は其三男なり。享保五年(五月十九日)を以て生る。鼎石幼にして聰慧、學を好む。弱冠京に上り、業を江村北海に受く。(北海の弟清田僧史にも師事せるが如し)。又廣く當時の諸名家芥川丹邱、大江玄圃、清田龍川、伊藤君嶺等と交る。秋日作に、

憶惜少壯、帝城隔。  
爲客頻年混酒徒。

と云へるもの蓋し實事なるべし。

而して其の最も好む所は詩にして、日に吟哦を事とし、殆んど心肝を吐くに至る。後采薪の憂に罹り、之を廢すること十五年、更に又吟哦を事とし、孜孜として業を廢するなし。業成りて詩名遠近に鳴り、郷

隣皆推して巨匠となす。北海嘗て其の集に序して、

弱齡學詩於余。於今四十年。孜孜無廢業。業成詩名炳煥于遐邇。而鄉隣皆推巨匠。

と云へるもの是なり。乃ち詩社を岐下に結び、號して鳳鳴詩社といひ、自ら其の主盟たり。左合龍山、宮田嘯臺を初め當時の諸家多く其の指導を仰げり。

北海の郡上藩の客師となるや、比年京都より郡上に往來し、途必ず岐阜を経て、鼎石の宅に信宿し、山水の奇を賞し、且又他の二三子に邂逅して、藝文を評議し以て娛樂となす。概ね虚歳なし。

又金龍道人の晩年美濃に隱栖するや、鼎石之と往來し、相携へて門下の諸子と共に傍近の山水を探り、詩酒徵逐、各歡を盡してやむ。文明の化遂に闔國に普及するに至る。實に鼎石與りて力ありと謂ふべし。

所著鼎石詩集五卷(安永八年上梓)あり、其詩諸體兼ね備はり、最も律絶に所長を見る。金龍道人、序して曰く、

余頃閱其鼎石集者。古詩今體賅而存焉。到于中晚之佳境。也有餘。而又欲入於盛時之域。矣。

又、龍草廬は叙して曰く、

厥言和平、理趣不凡。灑々然、落落然、不陷三晚唐之綺靡。誠是風流溫藉之徒之氣象也。

と。以て其詩の眞價を知るべし。左に其の近體二三を示すべし。

岐山懷古三首、錄一

占斷瀟陽第一峰。  
中興將略竟無蹤。  
江頭曾歷三千弩。  
淵底今聽百八鐘。  
天定三星文一消、劍氣一。  
山留三雲影、捲三軍容。  
太息風河龍戰地。  
凄風處處入三澗松。

丁酉秋上三岐山二有レ感作、調馬埒、射鴨場在三山上。

登臨山上古城樓。

霸氣當年黯澹休。

調馬埒寒黃葉曉。

射鴨場冷白雲秋。

依稀整井無人汲。

零落屢廊看三鹿遊。

往事蒼茫多少恨。

長河如帶入眸流。

哭三梅花道人

白雲深鎖隱淪家。

春去人空一徑斜。

日暮江天何處逐。

無端吹送落花。

新

洞庭秋色雁聲疎。

兩岸蒹葭露下初。

天冷澹雲薄如帛。

香閣幾寫一行書。

涼州曲

轅門月冷笛聲高。

無限秋風吹戰袍。

十萬天兵膽如斗。

橫戈同醉綠葡萄。

金龍道人

寬政十二年庚申正月十二日歿す。享年八十有一。中大桑町淨安寺先塋の次に葬る。墓碑は現に淨安寺内に山田氏歴代の碑と並び存せり。(過般津田天游、三浦百拙諸氏の盡力により修理せらる)(鼎石詩集、三野風雅、及墓碑に據る) 金龍道人、名は敬雄、字は詔鳳、武藏の人なり。正徳三年を以て生る。項に瘤あり。氣象磊落、胸襟濶達、細行に拘らず。幼にして比叡山に登り、天臺の宗要を究め、壯にして東都に遊び、淺草の金龍山に寓し、當時の文人と交遊して、頗る聲譽あり。時人稱して金龍師と云ふ。遂にとりて號となせり。寬延の初常陸より日光山に適き、居ること五年。寶曆二年(時に年四十)下總淨安寺の法席を領す。幾もなく輪王寺宮公啓法親王の懇請により、武藏足立の吉祥寺に遷る。居ること十七年、明和六年辭し去りて四方に遊び、平安、浪華、崎陽に巡錫し、足迹殆ど天下に徧し。遂に美濃安八郡神戸の善學院に隱栖して學徒を督勵す。

金龍の神戸に在るや、屢々岐阜に往來して、鼎石を初め他の二三子と唱和應酬し、又時に相携へて傍近の勝を探討す。又嘗て織田塚に碑を立て、雲外禪師の偈を勒せり。織田塚は上加納に在り。もと塚ありて碑なし。傳へ云ふ、織田信長、齋藤道三と雄を争ふの時、戦死者を茲に合葬するや、遊魂變を爲し、濕雲陰雨の際播間毎に戦争の聲あり。里民驚いて雲外禪師に告ぐ、禪師乃ち一偈を作りて薦拔し、其怪長く絶ゆと。(禪師の偈は本編第一章に録せり)安永六年の春、金龍、之を圓徳寺に葬り、且禪師偈誦の奇絶を揄揚し、其の功德の廣大を顯明せんとし、碑を立て、之を勒せり。(此碑は現に圓徳寺内に存せり)

金龍性山水を好み、最も詩文を嗜む。交遊頗る廣く、撰述亦多し。所著天臺霞標三卷、金剛經助覽、老子玄覽、雨新庵詩集、道樂庵夜話各二卷、祇林詩材、祇林聯芳各一卷あり。其書皆な天下に行はる。恒に自ら言ふ、『風煙山水憂を忘るゝに足り、妙思深禪愉樂を充たすに足る。老の將に至らんとするを知らざる也。』と。風標瀟灑にして絶えて香火の氣なし。人呼んで大古佛となす。嘗て南無三寶の印を佩ぶ。故に南無三寶師と稱す。又頸に瘤あるを以て、時に自ら瘤道人と書せり。其の宗とする所を問へば乃ち釋迦宗なりと答ふ。以て其の爲人を知るべし。

安永九年秋其門人等古稀の壽を祝せんとし、豫め前年に於て其壽藏を營み、碑を立て題して金龍道人塔と曰ふ。前大納言藤原公繩請を受けて其の碑に銘す。碑は現に神戸善學院内に在り。天明元年冬微疾あり。飲食稍減じ耳目明ならず。然れども群籍の義を問ふものあれば、即ち之に答へ、縷述明晰なり。翌年正月上旬豫め死期の至らんとするを知り、侍者をして淨土變相の圖を掛けしめ、跏趺合掌して懺悔念佛す。聞者感嘆せざるなし。乃ち辭世の偈を書して曰く。



人道ヲ死如ニ絶割シ甲。吾知解レ薦復レ葉時。願 蓮實發レ芽久。必生ニ八功德水池。  
と。已に書し畢りて念佛示寂す。實に天明二年寅正月八日なりき。(金龍道人壽藏碑、三野風雅、佛教大辭典)

登二飛 雲閣一

飛閣層層壯。雲梯曩二碧空二。平臨星斗上。下見帝城中。回レ郭千山合。抱レ都二水通。春風倚レ欄夕。坐覺入二天宮。

留 客

煙霞如レ是好。前山薇亦肥。請君且安坐。儘今沽レ酒歸。

寄二贈張州木蘭草一 (註曰、木下實聞、字公達、號蘭草、徂徠門人)

城頭咫尺接二蓬萊一。琪樹春花帶レ雨開。

何日與レ君携レ手去。

五雲深處探レ芝來。

蜂 屋 柿

剥レ皮膚曝レ日影參差。肌上滿霜味熱時。

自是茶家高品物。

嶺南休レ誇産二茗雙一。

同時に笙州和尚あり。又詩を能くす。便宜此に附載すべし。

笙州和尚

笙州和尚、名は凍滴、號は豹隱、笙州は其別號なり。美濃の人、業を龍草廬(名は公美、字は君玉、伏見の人業、を平安に唱ふ、彦根侯に仕ふ)に受け、詩に巧なり。同門の川合春川(既出)と共に幽蘭社十才子に數へらる。京都の東山に栖み、また彦根の江國寺に住す。屢東武に往來し、途次美濃を過りて鼎石、嘯臺等と唱和訂盟せり。然れども末だ其の傳を詳にせず。(先哲叢談、日本詩選)

湖中四時晚景

江上高亭夕照斜。遙看鴻雁落三平沙。扣レ鐘幽岳關レ雲寺。曝レ網荒村近レ水家。  
渡口寒風人立馬。橋邊烟浪客停槎。回頭北望猶堪レ畫。石鹿山林雪著レ花。

宮田嘯臺

此を外にして、當時美濃の詞家中、出色のものを宮田嘯臺とす。

宮田嘯臺、名は維禎、字は士祥、通稱平作、又秉策に作る。嘯臺は其號なり。美濃加納の人、延享四年を以て生る。少より學に志し、業を龍草廬に受け、又詩を江村北海に學ぶ。人と爲り清簡寡欲、德行を以て稱せらる。辭才巧妙。兼ねて臨池の技を能くせり。草廬曾て曰く、

宮田士祥從三遊子之門下者久之。亦不世之奇才也。予居恒呼三之子一以爲三弊門之千里駒一也。

と、北海の郡上に往來するや、屢嘯臺の家に宿して唱和應酬す、北海又其の慧心秀口を稱せり、以て其の尋常才子に非ざるを知るべし。

文化十三年、嘯臺年七十、藩主永井侯其の詩を徵す。乃ち詩三百篇を録して上る。侯嘉賞して特に鳩杖を賜ふ。蓋し異數と謂ふべし。後年村瀬藤城、嘯臺を訪ひ、一律を寄す。其の前半に云ふ。

濃國風流不三索然一。

題壇有二個嘯翁賢一。

名馳二鄉譽二六十載一。

詩入三聖評二三百篇一。

と、以て如何に當時の詞壇に重んぜられしかを知るべし。嘯臺齡古稀を過ぎて猶矍鑠たり。(其の後半世は次期に跨れり)當時鼎石、金龍既に下世し、同時の諸家亦多く凋落して、獨り嘯翁あり。其の詞壇の耆宿として重んぜられしこと故なきに非ず。著看雲栖稿十二卷あり。天保五年甲二月十三日歿す。享年八十八。法號を釋維禎居士といふ。墓は現に加納墓地に存せり。(加納、宮田吉三郎氏は其の子孫なり)

夏日草堂即興

乾坤容レ我寬。何爲厭二小堂一。南軒能受レ風。北欄還二三元陽一。廓然北又南。三伏此得レ涼。曲肱假眠後。琴書在二半牀一。  
身是養葛民。物我共相忘。借問栖者。有二斯幽意長一。

養老 瀑布

老山、布落、青天、  
宸遊遙記尋、仙液、

不、識、靈、源、阿、那、邊、  
孝、感、猶、傳、化、醴、泉、

一、道、虹、霓、垂、飲、澗、  
曾、有、三、改、元、恩、教、詔、

規、

聽、得、分、明、第、二、聲、

欲、聽、三、聲、欲、飲、久、

松、窓、斜、月、照、殘、更、

以て其の詞藻の一斑を知るべし。(三野風雅、聖代春唱、及墓碑に據る)

同時に岐阜には左合龍山(名は元鳳、字は九成、詩を能くし、又書に妙なり、著龍山遺稿あり)、山田芝岡(名は處和、字は子龍、通稱元長)、堀田石室(本姓紀氏、名は廣和、又單に廣といふ、字は公淵)、野田鳳川(名は彦龍、字は子淵、長十郎と稱す、寛政八年歿、年三十八)等あり。加納には森東門(名は球、字は求玉、通稱震助、後孫一と稱す。性沈默自淑、寛政十一年歿す。著桂花樓集五卷あり)、三宅牛洞(名は暢、字は季休、通稱孫六、金龍道人に從學す)等あり。關には山田桐谷(名は鑑、字は君明)後藤虎邱(名は有顯、字は子効、又子顯)、司馬阿柯亭(名は元貞、字は子紀、詩を能くし、又俳諧に巧なり)。藤世式(名は軌、字は世式、通稱定六)等あり。下有知には後藤藍川(名は高伴、字は以章、左門と稱す。醫を業とす。文政三年歿す、年六十一)父子あり。常に往來して詩酒徵逐せり。

白銀村賣酒店即事

巖邊路轉水邊那、

且、醉、田、家、老、瓦、盆、

山、雨、欲、來、風、更、急、

左、合、龍、山

送金龍道人還京

西天歸路迤、

關、若、赤、城、陰、

華、山、繞、三、寶、地、

山、田、芝、岡

少、年、行

五、陵、年、少、戴、三、豪、華、

玉、勒、金、鞍、白、鼻、駒、

十、二、街、中、春、欲、暮、

碧、蹄、今、去、向、誰、家、

秋日作

搖、落、蕭、條、野、色、清、

茅、堂、兀、坐、少、蓬、迎、

白、雲、萬、里、孤、鴻、影、

森、東、門

事、業、無、成、秋、復、老、

吟、哦、不、睡、月、方、傾、

由、來、樽、散、應、三、吾、事、

紅、樹、一、村、雙、杵、聲、

城、東、幽、徑、客、過、稀、

渺、々、長、流、送、翠、微、

散、步、揭、裳、臨、斷、岸、

好、向、西、阜、一、學、耦、耕、

懸、巖、蒼、鶴、穿、天、去、

遠、浩、輕、帆、破、浪、飛、

滿、目、風、光、奇、絕、地、

閑、吟、倚、杖、立、斜、暉、

題蓬頭石

應、三、司、馬、生、需、

美、君、能、得、三、神、仙、術、

黃、昏、好、伴、釣、人、歸、

碧玉盆中勻水寒

誰、言、蓬、嶼、可、求、難、

離、背、三、山、掌、上、看、

山、田、桐、谷

松蘿箱集得四支

書、堂、夜、靜、漏、聲、遲、

庭、際、猶、留、秋、後、色、

後、藤、虎、邱

三保松原

滄、溟、日、落、暮、潮、回、

煙、中、一、曲、漁、郎、笛、

司、馬、阿、柯、亭

秋日同諸君一登三白華大悲閣

隨、緣、探、勝、此、登、臨、

瀾、靜、飛、泉、懸、三、葉、練、

不、知、山、水、有、三、清、音、

慈雲長擁諸天座

覺、路、相、通、七、寶、林、

却、笑、城、中、絃、管、盛、

秋、深、落、葉、布、三、黃、金、

當時赤坂には矢橋赤山あり

赤、山、名、は、徹、

字、は、美、甫、

通、稱、勝、三、郎、

能くす。天明中歿す

同、時、に、矢、橋、赤、水、

名、は、龍、

字、は、子、淵、

赤水遺稿あり

矢、橋、丹、陽、

名、は、遠、

字、は、伯、遠、

矢橋赤山

又、子、文、

別、號、醉、月、樓、

矢、橋、の、宗、家、

匹馬詩三東府

歸、心、振、箠、驚、

漸、論、三、鳥、居、峰、

深、入、三、靈、叢、路、

經二岐

岨、

岨、川、如、練、搖、

棧、道、架、虹、渡、

戰々臨澗行

騰、落、步、欲、讓、

藤○雲○聚○二○危○巖○。樹○抄○懸○二○濕○布○。鳥○驚○征○客○語○。洞○隱○樵○夫○呼○。老○槍○鬱○森○。晝○日○繁○三○零○露○。龍○鍾○飄○旅○衣○。身○疲○行○且○駐○。

候○忽○迅○騰○起○。膝○膝○天○欲○暮○。支○猿○叫○三○幽○壑○。猛○虎○嘯○三○陰○霧○。當○三○此○艱○難○時○。中○情○將○三○焉○訴○。鄉○國○不○三○夏○遠○。無○三○那○切○三○思○慕○。

突○兀○星○閣○。同○三○北○海○先○生○諸○子○等○一○登○明○星○閣○一○得○三○僧○字○。山○紫○暮○烟○凝○。林○表○爭○三○棲○鳥○。溪○邊○歸○三○院○僧○。澹○然○幽○意○愜○。爲○下○伴○三○謝○公○一○登○上○。

蛾○眉○勸○酒○聲○三○君○歡○。長○袖○羅○裙○妬○三○舞○鸞○。霜○翠○樓○頭○誰○不○醉○。春○風○十○二○玉○欄○干○。

十○年○遊○學○在○三○長○安○。夜○雨○燈○前○思○萬○端○。帝○里○管○絃○愁○裡○聽○。故○園○關○菊○夢○中○看○。

官○途○自○耻○潘○生○拙○。交○道○誰○憐○范○叔○寒○。孤○客○逢○三○秋○增○三○感○惻○。千○家○砧○杵○客○衣○單○。

朝○來○雨○歇○陽○天○。鴨○綠○添○三○流○春○水○鮮○。凝○霧○頑○雲○未○三○全○霽○。近○山○如○三○喚○遠○山○眠○。

飄○然○文○旆○指○三○西○天○。風○雪○前○程○興○又○憐○。杯○酒○何○愁○暫○離○別○。慰○勉○再○會○得○三○明○年○。

雨○散○村○村○秋○氣○新○。漸○看○暮○色○逼○三○溪○濱○。柳○陰○暗○處○聞○三○言○語○。知○是○夜○漁○撒○三○網○人○。

### 第三章 興隆期

#### 一、林述齋及佐藤一齋

化政以後、天保を経て、嘉安に至る數十年間は我が美濃文教の最盛期となす。而して唯に當時の美濃文教史上に止まらず、日本儒學史上に不朽の名を留めたるものを林述齋及び佐藤一齋の二碩儒とす。述齋は林家を中興し、昌平黌の制を更張して天下の學府たらしめ、一齋は此が羽翼となりて、林家中興の實を挙げしむ、而して二人共に美濃東遍の岩村藩より出で、又略其の出處進退を同じうす。一奇と云ふべき也。

蓋し岩村藩は我が美濃に於て最も早く文化の開けたる地にして、前期既に佐藤周軒、福島松江及佐藤文永等の出づるあり。此の期に至り、述齋及一齋の二人を出せる、亦偶然に非ざるなり。

林述齋、名は衡、字は叔統、一字は公鑑、述齋は其號、別に蕉軒(蕉隱)天瀑と號す。幼字は熊藏、叙爵せられて大學頭と稱し、晩に大内記と改む。岩村城主大給松平の支族能登守乘、濫の三子なり。明和五年六月廿三日江戸鍛冶橋の邸に生る。伯兄乘國、仲兄乘遠、皆塲す。述齋宜しく嗣を承くべし。而して幼より善病、因て福知山侯の第二子乗保を養ひて嗣となす。述齋家に在り。十餘歳に至つて強健、性、文を好み、成童書を讀むこと等身、父爲に老儒大鹽齋渚、服部仲山を招いて之が師となす。十七八に迫り漢古今の書通覽せざるなし。詞藻亦纒然觀るべし。既にして二老相尋いで物故す。自後獨學して師なし。

佐藤一齋、述齋より少きこと四歳、藩の子弟を以て、幼より伴友たり。既に長じ、日夜側に在り、相

俱に書を讀むこと約三四年、既にして述齋一旦自ら悔いて謂ふ「我久しく漢唐の學を攻む。訓詁瑣屑厭ふべし。今將に宋説を取捨して別に一家の言を成さんとす。」と、乃ち朱子の撰著を合併し、號して八書訓となす。又齊魯韓三家の詩説を折中して詩考補を作り、又經義叢說若干卷を編す。當時述齋英氣勃勃肯て人に屈下せず。獨、澁井太室、林家の高足と稱す。述齋一見して心服し、遂に贊を執つて之に師事し、又太室の友細井平洲に就きて講説を聽く。又泛く布衣の交をなし、詞藝を以て相往來する者無慮數十人なり。

寛政の初、幕府政を新にし大に賢良を求むるや、述齋の名上達し將に用ひられんとす。會々祭酒林簡順(名は信敬、寛政四年卒、年二十六)卒して嗣なし。官特に述齋を抽いて後を承けしむ。事不意に出づるや、述齋狀を上つて懇辭すること再三にして允されず。是に於て幡然として起つ。時に年二十六。

述齋の出づるや首として上言して、國學を勸建し、文教を崇び、造士の法を立て、三年業を試み、其俊雋を擧げて、國家の用に充てむことを請うて允さる。此より前、昌平坂の一區は林氏の別邸たり。聖廟ありと雖私家に屬す。此に至りて述齋地と廟とを並せて之を納れ、因つて旨を承けて區域を開拓し、改めて聖廟を營み、費館寮を建て、上下を區し、以て官私の生員を増益し、司業を抄選し屬吏を置く。規模弘大、制度森嚴、學制こゝに於てか擧り、以て後世に至るまで替ることなし。述齋時に謂へらく、「公學を掌るもの、教亦た公ならざるを得ず。其の道德を一にし趨向を同じうする概ね常に宋學を以て唱となすべし。一家の私説は必ずしも嘔々せず」と、盡く舊撰を斥けて復た用ひず。

文化八年辛未韓使來聘す。例は使者を江戸に延く。而して今は則ち旨あり。聘を對馬に受く。是に於て

新儀を創爲するの事多く述齋の議によりて定まる。述齋乃ち其の行に與り、事を竣へて復命す。是の際將軍の眷顧益々厚く、臺閣諸老亦た唯だ之と國家の大計を詢る。而して述齋夙夜密勿、奏疏劄子、手筆を停めず。その献替翊賛せし所以のもの蓋し少からず。事寛政文化の間に在り。既にして諸老遞謝して賢否一ならず。文政以後は漸く昔日の如くならず。然れども大事の決し難きあれば、議必ず及ぶ、猶前日の如し。大小侯國に至りては其の主若しくは老臣贊見を請ひ、就いて國事を謀るもの翹だ什佰のみならず。岩村藩の如きは細大の治務を擧げて與り聞く。且遠近より來りて門籍に登るもの千有餘人、其の間處士業を成し各國に筮仕する者數十人を下らす。則ち述齋の德澤藩國に普及せしこと亦知るべし。

述齋人と爲り度量恢豁、能く物を容れ施與を好み、事に臨みて明決、留滯なく、其の謀議する所率ね人の意表に出づ。又膽氣あり。天下の大計に當れば直言讜論、敢て權要と抗し、第だ誠を推して人の腹中に入る。故に怨對を來さず。最も漢鑑を善くし、人才を愛し、又能く緩急に赴き紛糾を解く。是を以て人益々依頼す。述齋と交を締し、稱して知己となす者は皆一世の人豪、而して最も白河侯樂翁(定信)堀田侯水月(正敷)と相膠漆、殆んど四十年一日の如し。

述齋平生林泉を好む。身仕途に在りて意の如くなるを得ず。因つて隣地を拓いて園となし、姑らく雅尙を寄す。又別墅を築く。其の谷中に在るものを賜春園と云ひ、礫川に在る者を錫秋園と曰ふ。其餘同族子弟の園内に就いて亦各遊適の所あり。小暇ごとに輒ち駕を命じ、欣然として羈絆の身に在るを忘る。その草樹に於けるや最も芭蕉を愛し、少時自ら蕉隱と呼び、後、軒に名づくる亦此を以てす。又恒に管絃を嗜み、佳節令辰ごとに必ず友侶子弟を會して合奏し、因て其居る所を名づけて陶寫軒といふ。絲

竹陶寫の語に取る也。病篤きに至り猶子弟に命じ、壁を隔て、合奏せしめて之を聴く、其襟度概ね此の如し。

撰著に至りては官撰諸書最も意を致すものたり。曰く實記、曰く朝野舊聞、曰く史料、曰く武家名目、曰く地誌、合せて凡そ數千百卷、其の纂述の赫裁、起例、發凡、眞偽取捨皆其の獨裁に出づ。編纂に至りては人の所長を選びて之に分屬す。又嘗て漢土の佚書我に存する者十七種を蒐集し、活字刷印、名づけて佚存叢書といふ、後漢土に傳播せり。

述齋幼より詩を善くす。十八の時、一夜を限りて百律を作る。長じて詩人木口、皞齋と訂交唱和し、晩年渾化益々超妙自ら一家を成す。然れども此を以て長を擅にするを愧づ。故に應酬の文字率ね稿を留めず。存する所僅々十數卷。一時の遊戯に出づる者、零星小著、或は子弟門人の録する所を遺すのみ。家園漫吟、谷口樵唱、遷上漁謠、西郊牧笛、和歌隅田川二百首の如きは是なり。嘗て曰く「大丈夫心事宜しく明白爽快なるべし、官に居らば宜しく公正の二字を失する勿るべし、學問の道他なし、之を誠意に本きて以て其の體を立て、之を事業に推して、以て其の用を宏くす。夫の文藝詞翰の如きは殊に其餘業のみ。」と、是に由て其の終身の期待する所、特に區々たる文儒に在らざるを知る。

天保九年戊戌年七十一、老病を以て兩殿侍講、及び學事を解き、嗣子榿字をして之に代らしめんことを乞ふ。幕府其乞を聴く。但機務に參與すること故の如し。居ること三年、宿痼纏綿強ひて事を視る。夏に入つて水症劇發、季夏に至り益劇しく、自ら其の起たざるを知り、念一日に至り一齋を召して後事を遺託し、爾後數日、榿字を召し、遺命各數條、又疏劄諸稿を取つて悉く之を焚き、又一齋に謂つて曰く「聞

く幕政一新、黜陟皆當ると、寛政の舊復すべし。吾未だ瞑せざるに及びて之を聞く、復た遺恨なし。我に七兒あり、晝夜看護左右を離れず。これ亦人生の福、今唯だ澄慮息念、以て斃るゝを俟たんののみ。」と、七月十四日陶寫軒に歿す。享年七十四、其の在る時快烈を以て自ら擬せしに因り、之を諡して快烈府君と曰ふ。

述齋職を奉すること凡そ四十九年、其の寵異を被る終始渝らず。家秩も千五百石、述齋に至り前後秩を増して三千五百石となり、歳給合せて一千二百金、特旨班を進め、本城留守に亞ぐ。將軍その病革まるを聞くと、内臣をして簡問せしむ。誠に末路の榮たり。蓋し述齋の入つて繼ぎしより、班秩廻に家祖數世の上に出づ。稱して中興と曰ふ。男女子を得る各九、長子光、次子輝、先づ歿す。第三子誠、號は榿字、嗣たり、内外孫曾を合せて凡そ一百六十五人。

佐藤一齋の言志晩錄別存、すべて述齋の事を叙し、參校に資すべきもの多し。述齋嘗て曰く、「爲漢學者、呼三朱註爲新註。不知上朱註雖後出、其旨復古也。漢唐、時代雖古、而於孔子旨則未達。却是不可。」  
又曰く

宋儒於經各、有二發明、不相讓也。但經註立之於學館、以爲令申、則不得不一。以三科試之故也。彼土爲學士講官者、皆遵三奉令申、而尙存私撰、不必禁。今吾承三司成、培三養人材。嘗廣以三宋學、統三率之、不問持論精微之小異、又、不阻三人各、有私撰、不然而能培三養人材。

と、一齋特にその識量の大き且公なるに服すといふ。其の門人好んで漢唐の説を攻むるものあり。乃ち曰く。

濂洛復古、與漢唐殊異。然漢唐註疏、京兆博士、家傳已久矣。今不<sub>二</sub>必<sub>一</sub>。但<sub>二</sub>儒<sub>一</sub>之學。神祖特崇<sub>三</sub>信<sub>一</sub>、爲<sub>三</sub>三臣<sub>一</sub>子<sub>一</sub>者、所<sub>レ</sub>宜<sub>二</sub>依<sub>一</sub>。漢唐舊說姑存<sub>レ</sub>之可也。

其の崇尚此の如し、一齋の王學を標置せず、宋儒の成説をとつて子弟に授くるもの、亦述齋の心を體せしのみ。述齋惺窩を尊ぶこと篤し。數ば言之に及ぶ。嘗て曰く

藤公生<sub>二</sub>於戰國<sub>一</sub>、獨唱<sub>三</sub>此學<sub>一</sub>。以開<sub>二</sub>太平<sub>一</sub>。數<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>講後水尾帝<sub>一</sub>、若蒙<sub>二</sub>睿感<sub>一</sub>、神祖齋廟數<sub>レ</sub>引見、因<sub>レ</sub>擢<sub>二</sub>我祖於草莽<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>其爲<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>也。及<sub>レ</sub>後黃門西山源公校<sub>二</sub>其遺集<sub>一</sub>、後光明帝賜<sub>二</sub>御製序<sub>一</sub>。此邦儒學之宗、莫<sub>二</sub>能尙<sub>一</sub>焉。後之爲<sub>レ</sub>儒者、皆當<sub>二</sub>以<sub>三</sub>三藤公<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>標的<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>二違<sub>一</sub>也。

と、述齋の宋學に對する、その見の公平穩妥なること概ね此の如し。その處世の道德に就きて言ふ所亦頗る觀るべきものあり。篤學の士は言志晚錄別存に就きてみらるべし。(佐藤坦撰嚴師述齋林公墓碑銘、並序、言志晚錄別存、續近世先哲叢談上)

佐藤一齋

佐藤一齋、名は坦、字は大道、通稱は捨藏、一齋は其號なり。又愛日樓と號し、又老吾軒と號す。初名信行、幾久歳と稱す。後今の名に改む。父名は信由、文永と號す。通稱は勘平、岩村侯の家老となり、國政を執ること凡そ三十餘年、蒔田氏を娶り、二男二女を生む。長は鷹之助、天す。次は即ち一齋なり。安永元年十月を以て江戸濱町の藩邸に生る。時に父信由年四十五。是より先既に小菅氏の子治助を養うて嗣となし、長女を以て之に配す。一齋生るゝに及び、治助又一齋を以て義子となせり。(第二章岩村藩、佐藤周軒の條参照)

一齋幼にして讀書を好み、又臨池の技を善くし、射騎刀槍の術學ばざる所なし。北條氏の兵、小笠原氏の流、亦皆之を修む。書は則ち七歳三井親和の門に入り、篆隸諸跡を學び擘窠字を作る。十二三歳の比ほひ、殆んど成人の如し。成童に至り嶄然頭角を見はし、天下第一等の事を以て其名を成さんと欲す。乃ち聖賢の學に従事し、立志甚だ堅し。

寛政二年、一齋年十九、始めて岩村藩の仕籍に登り、近侍の列に入る。此時に當り祭酒述齋未だ林氏を嗣がず、藩の公子を以て濱町の藩邸に在り。述齋、一齋より長ずる四歳、往來學を講じ、概ね虛日なし。又井上四明、鷹見星阜の門に出入し、其講論を聴く。當時學者概ね護園の餘臭に染む。乃ち辨道羅燕二卷を著して之を駁し、又孝經解意補義一卷を作る。此の頃官醫杉本樗園なるものあり、一齋と同年にして志操略々相同じ。乃ち交を結んで親善し、豪放を以て自ら任す。三年八月故ありて職を免せらる。因りて仕籍を脱せんことを懇請す。十月を以て許さる。乃ち詩を賦して曰く

瀟<sub>二</sub>三足溪流<sub>一</sub>、仰看<sub>レ</sub>山。唯山與<sub>レ</sub>水意偏閑。投<sub>レ</sub>管心境無<sub>二</sub>餘事<sub>一</sub>。夢<sub>二</sub>在<sub>三</sub>臨關猿約<sub>一</sub>間。

寛政四年二月述齋の徳憑により浪華に遊ぶ。行に臨みて述齋遊學の資若干を給し、詩を贈りて曰く

三尺凝霜識<sub>レ</sub>者稀。終教<sub>二</sub>紫氣斗邊<sub>一</sub>微。風雨何時開<sub>レ</sub>匣去。延<sub>二</sub>平津<sub>一</sub>時化<sub>レ</sub>龍飛。

一齋乃ち間大業(名は重富、長湍と號し、晩に耕雷主人と號す)の家に寓す。大業曆數に精しく藻鑑あり、一見舊知の如し。爲に介して中井竹山に學ばしむ。一齋日夜切劘、經義を討論し、或は夜半に至る。竹山以て厭ふべしとなさず、反りて其反問を喜べり。竹山の長子曾弘、詞才絶倫、麗澤相質して學大に進む。又京師に遊び皆川淇園に見ゆ。六月家に歸る。竹山乃ち詩を贈りて曰く。(續近世先哲叢談、述齋の詩となせり)

聞君客迹自<sub>二</sub>三瀟瀟<sub>一</sub>。目擊俱欣吾道存。果<sub>レ</sub>旬未<sub>レ</sub>極新知樂。歸<sub>レ</sub>路俄驚<sub>レ</sub>遠別魂。世<sub>レ</sub>故易<sub>レ</sub>擡<sub>レ</sub>白眼。詞<sub>レ</sub>場且<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>一青樽。妙<sub>レ</sub>年將<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>賞。何<sub>レ</sub>日遊踪再<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>門。

又一行の大字を書して與ふ。其語に曰く「困而後寢、仆而復興。」と、一齋其出處を問ふ。答へて曰く「仆而復興」は王文成の語なり。首句は則ち今筆に臨んで之を加ふるのみと。此の王文成の一語、一齋をして眼を姚江派に轉せしむる楔子たりしや疑なし。

寛政五年二月林簡順の門に入り、其の邸内に寓し、始めて儒を以て業となす。四月簡順歿して嗣なし。官乃ち特に命じて述齋を以て林氏の後を繼がしむ。是に於て始めて師弟の名を正くし、終身述齋の門人と稱す。然れども日夜同學、猶は舊時の如し。一齋専ら心を六經に潜め、旁ら文辭を學ぶ、其交る所のもの松崎慊堂、清水赤城、市野隼卿の徒、皆一時の俊秀たり。或は有名の儒流を歴訪し、討論難詰以て理義を攻む。時に僧蕉中なるものあり、名は顯常、字は大興、近江の人、能文を以て世に鳴る。其の江戸に来るや、一齋常に作る所の文を示して雌黄を求め、よりて得る所極めて多し。近代の儒宗、文に長ずるもの安井息軒に如くはなし。而して息軒前人の文をいへば必ず一齋と慊堂を挙げたり。一齋獨り其の學のみならず、文を以て又天下に獨行せり。

寛政八年二月父文永に陪して京畿大和伊勢及び攝播に遊び、名區勝蹟探訪せざるなし。其の間風雨霜露、逆旅の艱苦一ならず。然れども杖屨を捧持し、親の歡心を極む、既にして名聲漸く起り、門人日に進む。大小侯伯の斯文に志ある者、延聘講説を請ふ、虛日あることなし。其塾を號して百之寮と云ひ、又風自寮といふ。

寛政十二年平戸松浦靜山侯特に命あり、路資を給して以て延聘す。因て便路長崎に到り、吳客に接し以て聞見を博くせんことを請ふ。侯之を許す。乃ち四月を以て出發す。其行を榮として送りて品川驛に至る者數十人、皆有名の士なり。世稱して以て盛事となす。遂に攝を越え、中國を経て肥前に至り、長崎に於ける平戸侯の邸に寓し、清客沈敬瞻、劉雲臺、錢宇文、周慶書の徒と文酒の交をなす。其中雲臺、宇文共に學植あり。因りて得る所亦多し。遂に平戸に至り、經を維新館に講す。聽く者三百餘人、歸路京に入り、路を岐蘇に取り、九月家に歸る。

享和二年十月望門人齋藤斌を携へ錦屏海(武藏の本牧に在り)に遊び、追蘇遊録を作る、文化元年新に愛日樓を作り、春より夏に至りて落成す、其の間同姓信義の家に僑居し、僑居日記を作る。

文化二年十月、林氏の塾長となり、其の門生を監督す。是より門人益進み、從遊の士甚だ多く、寮舎之を容るゝ能はざるに至る。而も耳提面命、講習倦まず。夜を以て日を繼ぐ。講經の日に當りては聽者堂に滿つ。述齋の嗣子榿字を始めとし師事するもの少しとせず。門人其業を遂げ、家を成するもの數十人、就中安積良齋、竹村悔齋、河田藻海等最も其翹々たるものなり。

文化八年韓國の聘使對島に至る。幕府臣僚に命じ蒞みて以て之を受けしむ。時に述齋と與に行く。一齋親老いて、羈紲を執る能はざるを以て、瞻望及ばず、河梁感深し、陟岵日録を作る。十一年七月、怙を喪ひ、十三年十月又恃を喪ふ。哀毀殊に甚しく哀敬篇三卷を作る。嘗て東叡山法親王の知を辱うし、時々侍講し、詩歌の筵ある毎に陪侍せざるなし。文政元年九月法親王に陪し、日光神廟に詣り、日光山記を著す。(載せて愛日樓文詩の卷末にあり)

文政四年七月江戸を發して美濃に至り、鉈尾山祖先の城墟を弔ひ、其墳墓に謁して賦して曰く

北濃上有知鉈尾山一名藤 係三吾八世祖保寧君 佐藤六左衛門 七世祖伯以安君 諱秀方故墟 山下清泰寺有二墳 雲余風拜之餘

不勝三追感之切。乃成三長句。

藤城山下掃三先登。二百餘年長三棘荆。

夜襲三鷹巢三監三精兵。英名久震紅黃隊。

廢溝幾處沈三折戟。殘燬有時拾三敗裝。

感激百端淚縱橫。雲昆仍裔同一氣。

至竟無三人共三此情。

之れより琵琶湖を航して、湖西小川村に藤樹書院を訪ひ、賦して曰く。

碩人已矣幾星霜。景墓今頽德本堂。

月正露時風亦光。尙見士民敦三禮讓。

入三疆不三問識三君鄉。

相攝三德本堂三大字。遺愛藤樹荒益古。

孤標松幹老逾蒼。氣常和處春長煥。

遂に京都に遊び、日野大納言南洞公に謁し、歸途岩村を過り、天瀑山に登り、九月を以て家に歸る。南

洞公文辭を好み、最も韻事を善くす、是を以て一齋の至るや一見舊の如し。爾後公の勅を奉じて江戸に

來るや、一齋必ず其の旅館に至りて起居を候ひ、公東征、道路得る所の篇什を賜ふを以て例とせり。

一齋の岩村に於ける、已に仕を辭するの後職事あるなし。唯文學を以て世子(乘美)を輔導するのみ。文

政九年世子國を承け、一齋を擢んで、老臣の列と爲し、以て國事を議せしむ。是時に當りて名聲藉甚、

天下の士苟も道に志し文を學ぶもの、贊を其の門に執らざるなし。塾徒は肥薩奥羽の人を併せて、同窓

切嗣、其の質一ならずと雖、皆篤く一齋を信じ、聲音笑貌に至るまで、亦學ばざるなし。吉村秋陽、山

田方谷、若山勿堂の輩名聲尤も著る。

天保十二年齡古稀に躋るを以て、慶事を謝絶し以て餘年を養はんと欲し、岩村侯の矢藏の下邸に就き、

數百歩の地を借り、新に書室を築き、名づけて靜修所と曰ふ。又一樓を築き、名づけて東暖樓と曰ふ。園には蕉桂を植えて隱棲の所とし、往來宴息す。同七月述齋物故す。是を以て悽然無聊、益々意を人世に絶つ。而も此の年幕府庶政を一新し、賢良を晉む。十一月擢んでられて儒員となり、昌平黌の官舎に住せしむ。是に於てか幡然として亦作る。即ち三律を賦して曰く。

畢竟虛名無二一長。譯承三微命二入三朝堂。

殘軀重著帽袍裝。深慚垂釣磻叟淺。久居三人後一材如三櫟。

近築三幽樓一壘水涯。豈圖今日赴三公車。大書靈揚報三龍光。

怡同枯卉再生三芽。老吾願使三書香繼。傳三二經三餘傳三一家。

七十無三車廂用三懸。抵三今挽做日三強年。鷺鷥儘遣三成新綴。

動三於無妄三物皆然。世間多少營營者。知否此翁真可三憐。

七十強仕、子弟戒飭の任に膺る、雄なりと云ふべし。

天保十三年舊居を以て、女婿河田藻海に與へ、自ら居を官舎に移し、黽勉從事、後進を誘掖し、經義を講説し、敢て頽老を以て之を人に委せず。是に於て天下の人目して以て山斗となし、景仰せざるなし。侯伯以下迎聘講を請ふもの前後數十家、或は駕を官舎に枉ぐるものあり。凡そ士民の門に入るもの無慮三千人。四月特旨を以て易を幕殿に講ず、辨説詳晰、賞命あり。爾後國家漸く多事なるに従ひ、或は林祭酒を助けて外交の書を作り、或は閣老の需に應じて海防策、時務策を作り、國政上にも頗る裨補する所あり。幕府も亦一齋を優遇し、屢々銀錠時服を賜ひて之を賞す。一齋の光榮餘ありと謂ふべし。

安政六年六月感冒を患ふ。八月に至り少しく癒ゆ。強ひて塾徒の爲に論語を講ず。爲に再び二豎を挑

六三



發し、九月に入りて痰喘劇發し、在葛起たす、二十四日昌平巽の官舎に歿す。享年八十八、麻布深廣寺に葬る、釋號惟一院成譽、大道居士と曰ふ。

一齋始め片岡氏を娶る、先ちて歿す。繼配坂本氏は離婚し、更に中根氏を娶る。三男十女あり、長子名は混、坂本氏の出、家を承けず、出で、田口氏を冒し、先ちて卒す。次子其次、夭折す。三男梶、號は立軒、新九郎と稱す。家を承けて儒員となり、明治維新の後權少史となる。並に中根氏の出、内外男女孫曾、凡そ三十九人なりと云ふ。

一齋天資高邁、精力人に絶す、夙に經綸の大材を抱き、而も文儒を以て自ら居り之を事業に施さず、舉世之を惜む。其の身を持する嚴毅方正、言笑苟もせず、之に就けば温然として親しむべし。幼にして慧黠才あり。老いて志行超邁、渾然たる道學先生たり。故に其の行檢を喜ばざるものは目して偽善家となせり。一齋亦家を治むるに法あり。飲食衣服より財貨の出入に至る迄、盡く常律ありて之に則る、一家三十餘口、一違言なしと云ふ。平生精力餘あり、公侯迎聘講を聽くもの、日給するに暇あらず、率ね日に數家に到り、或は夜に及ぶも勞となさず。其著述の如きは大抵夜中成す所、毎夜明燭煌々、襟を正しうして端坐、鉛槧を事とす。時に五更に徹す。此の如きもの六十年、故に著稿等身、後學を資すること大なり。

一齋門人頗る多く、其中著名なるもの、安積良齋、佐久間象山、吉村秋陽、山田方谷、奥宮懔齋、竹村梅齋、林鶴梁、金子得所、大橋訥庵、池田草庵、中島操存齋、柳澤芝陵、河田藻海、若山勿堂等あり。其の學始め朱學を主とすと雖、後陽明學に傾きしは事實にして、如上門人中、良齋の如きは昌平巽の

儒員に列せしを以て朱學を標榜せしも、象山、秋陽、方谷等は王學者としての面目を發揮せり。蓋し一齋の夙志は朱玉の融會に在れども、門人此の意を躰せず、岐れて二途に出でしものならむ。

一齋、經に於ては最も周易に精し。周易欄外書十卷、啓蒙欄外書一卷、圖考一卷を著す。嘗て謂ふ、「仰觀俯察、作易の本と爲す、然るに後世多く天文を説きて地理に及ばず」と。因て河圖に原づき地躰圖を作り、以て前人未發の理を發す。此他著述中主要なるものは古本大學旁釋補二卷、傳習錄欄外書三卷、愛日樓文詩四卷、言志錄四卷(以上刊本)大學摘說一卷、中庸欄外書一卷、論語欄外書二卷、孟子欄外書二卷、小學欄外書一卷、近思錄欄外書三卷(以上寫本)等なり。

一齋壯歲にして言志錄二卷を著し、耳順を踰えて言志後錄一卷を著し、七十にして言志晚錄を著し、八十にして言志蓋錄一卷を著す。合して四卷あり。世之を言志四錄といふ。此の書本と語録にして、思想の斷片を記すに過ぎざれども、亦以て其の造詣を窺ふに足る。邦人語録中に於て白眉と稱すべきものなり。晚錄に曰く、

惺窩藤公答三林羅山一書曰、「陸文安(象山)天資高明、措辭渾浩、自然之妙亦不可掩焉」。又曰、「紫陽(朱熹)篤實而遠密、金溪(陸象山)高明而簡易、人見三其異、不見三其同。一旦貫通、同歎異歎、必自知、然後已」。余謂我邦首唱濂洛之學者、爲三藤公。而早已並三取朱陸一如此。羅山亦出於其門。余曾祖周軒受三學於後藤松軒、而松軒之學亦出自三藤公。余歛三墓藤公一淵源所自、則有乎爾。

以て其の惺窩を欽仰せる事厚きを見るべし。蓋し惺窩の學、朱子學を宗とすれども、必ずしも陸子を斥けず、即ち朱陸を併せ取れり、朱陸を取るは朱王を取るに異ならざればなり。又曰く、

朱陸同宗、伊洛一而見解稍異。二子並稱三賢儒、非如蜀湖之與洛爲三各黨。朱子嘗曰、南渡以來、理三會著、實工夫二者、惟某與三子靜

二人。陸子亦謂、建安無二朱元晦、青田無二陸子靜。蓋其互相許如此。當時門人亦有二兩家相通者。不爲各持二師說一相爭。至二明儒一如二白沙、篁墩、餘姚、增城、並兼二取兩家。我邦性高、公蓋亦如此。

是れ一齋が自ら惺窩と同一轍に出づと信する所以なり。述齋の崇尚また朱子學に在れども、必ずしも自由討究を禁せず。一齋の王學を標榜せざるもの、人或は以て陽朱陰王之譏をなせども、必ずしも物議を避けんが爲に非ず。その人物の平緩にして推移的なる、自ら朱王の特長を認識し、打して一丸となす底の規畫ありしものに非ざるか。又後録に曰く

濂洛復古之學、實爲孔孟之宗。承之者紫陽、金谿、及張、呂、雖有異同、而其實皆純全道學。決非二俗儒之流。於元則靜修、魯齋、明則崇仁、河東、餘姚、增城、是其選也。亦雖二各有異、皆一代之賢儒。其淵源濂洛一則也。上下千載、落落唯有此數君子而已。吾取而存之於心樂焉。

此の如くなれば、これを朱學といふも當らず、又之を王學といとも當らざるに似たり。これ一齋の一齋たる所以か、其の學說に至りては日本陽明學派の哲學及び大日本倫理思想發達史に略々之を盡したれば今また贅せず。(佐藤楓撰皇考故儒員佐藤府君行狀、惟一佐藤先生墓碣銘、言志四錄、愛日樓文詩、近世先哲叢談)

大正三年十一月十日、聖上陛下御即位式に際し、二人の學界に於ける功績を思召され、各從四位を追贈せさせらる。身後の光榮之に過ぐるなしと云ふべし。

### 二、頼山陽の來遊と其門下

(村瀬藤城、同 太乙、神田柳溪、後藤松陰、牧百峰、江馬細香)

美濃文教の上に多大の貢獻をなせるもの、之を前にしては江村北海とし、之を後にしては頼山陽を最となす。文化十年山陽の美濃に來遊してより、其門に入るもの頗る多く、其の學風は其の書風と共に一時美濃の學界を風靡せり。然らば其の來遊は文教史上頗る意義あるべきを覺ゆ。故に其の門下諸家を記するに先だち、聊か岐路に渉るの嫌なきに非ざれど、其の來遊につきて記する所あらんとす。

山陽が「閑身自笑似孤鶴。每見秋風輒愛飛」の一絶を賦し、京都の假寓を出で、飄然美濃に來遊せるは文化十年(出京の翌々年)の秋、紅葉の節とす。關ヶ原を過りて高田屋に憩ひ、醉餘壁に題して曰く、

村村有酒是誰恩。池邊擔旗亭醉半午喧。不知血戈汗馬處。竹輿昇夢過關原。

赤坂の勝山に東照公の營を觀、賦して曰く。

原田每每繞高岡。想見觀師備三輶。行覺芒鞋無著處。滿山草棘纏甘棠。

それより岐阜を経て北濃に遊び、上有知(美濃町)に村瀬藤城を訪ひて暫らく其家に寓し、それより更に藤城及西部萬年(名白珍、字瓊叟、通稱金兵衛、別號靈天、當代金兵衛氏の祖父)を東道主人とし、共に郡上に遊ぶ。途上の作に曰く。

奚囊尋勝百峰間。落日回頭不破關。不知北行深幾里。林端忽得賀州山。

秋溪水落見溪身。老柏高楓映石皴。兩個渡航小於葉。前舟繼轍後舟人。

又萬年に示す詩に曰く。

萬木梢邊一路橫。水隨脚底沒還明。學墩厓畔攀頭石。終日倪迂畫裡行。

藤城も亦賦して曰く。

遠上郡城澗壑間。松崖楓迥幾灣々。樓閣沒欄人可倚。斜照眼明看白山。

一川風景自停車。

紅樹青山沿水厓。

粉本煩君他日畫。

孤烟處處記儂家。

夫より長良川沿岸の勝を探りて郡上に入る。山陽の詩に曰く、

食勝深尋三野州。

岐城路折浜三溪流。

民田壘石常防鹿。

官道停輿頻避牛。

巧築三市廊一依絕壑。

平分尋樵一種高晴。

北風時送白山雪。

雪散晴空一來二屋頭。

八幡より再び上有知に至り、藤城と共に善應寺の禪智和尚を訪ひて詩酒の交をなす。禪智は號を晦崑といひ、永平寺五十世中興開山玄透禪師の徒弟にして、文雅の道に淺からず。(藤城少時より就きて學ぶ) 禪智時に端溪硯、程君房墨、古帖黃庭を出して之を示す。並に佳品たり。山陽乃ち賦して曰く。

端研呵水試玉質。程家寶墨不滯筆。探囊寫詩與君看。燈明方丈夜促膝。出京三句無此娛。夕夕仙境夢蓮々。明朝上舟前灘去。回首霜林聞二粥魚。

端研呵水試玉質。

程家寶墨不滯筆。

探囊寫詩與君看。

燈明方丈夜促膝。

出京三句無此娛。

夕夕仙境夢蓮々。

(藤城次韻の作あり。後藤松陰も後亦此に遊びて次韻せり、並に之を畧す)

夫より三人更に端程黃の三字を分ちて韻となし詩を賦す、藤城端字を得て曰く、

禪房評古一作坐團樂。

霜月當窓覺夜寒。

歸艇憐君犯晨去。

風傳灘響一到三藤端。

(山陽及び禪智唱和の作散佚して今傳はらず惜しむべし)

翌朝藤城等に見送られ、舟を僝うて上有知を發し、藍川を下りて岐阜に赴く。舟中の作に曰く、

解纜離舟帶醉乘。

急灘忽過石千層。

匡頭送我人如豆。

舉笠招呼互響。

積薪缺處恰容人。

來時重關度三嶺崎。

歸就三舟程一岐阜津。

短繡機頭蓬一尺。

蓬窓依約藤城雪。

送到藍溪第幾灣。

藤城別を送つて曰く。

津頭恨別曉風寒。

柔柳聲殘岸樹間。

蓬窓依約藤城雪。

送到藍溪第幾灣。

別後、藤城の藍川即目に曰く、

半川蘆葉冷三殘暉。

憶昨扁舟此送歸。

晚渡無人天欲雪。

寒林枯木亂鴉飛。

かくて山陽は岐阜に上陸し、それより尾州清洲の早川藤陰を訪ひ、更に美濃に入りて大垣に至り、江馬蘭齋の家に滞留すること約一月、蘭齋の請に應じて其の女細香に詩文を教授す。其間又久瀬川に菱田毅齋翁を訪ふ。時に後藤松陰其の塾長たり。翁松陰をして山陽に従學せしむ。歳暮山陽、諸子に送られ、高橋にて舟に乗り、大垣を發して、木蘇川を下り桑名に赴く。

蘇水遙遙入海流。

樓聲雁語帶三鄉愁。

獨在天涯一年欲暮。

一篷風雪下三瀨州。

當時山陽年三十四、未だ一介の窮措大に過ぎざりしが、此の行新に松陰、細香の二子を得、後更に神田柳溪、牧百峰等の從遊するあり。是より文名大に揚り、又其書風を喜ぶもの頗る多く、偽書を作るものさへ出づるに至れり。當時美濃の讀書子に山陽風の書を作るもの多き、以て如何に其の感化の大なりしかを知るべし。以下項を別ちて門下の諸子に就きて記す所あるべし。

(四部金兵衛氏所藏詩卷、村瀨家文書、藤城詩文集、山陽詩鈔、同遺稿、坂本箕山著頼山陽)

村瀨藤城

村瀨藤城、姓は源、名は裝、字は士錦、通稱敬治、初め平助と稱し、後家を繼ぎて平次郎と改む。藤城は其の號なり。別に庸齋と號す。武儀郡上有知(今の美濃町)の人なり。邑に藤城山(一名古城山)あり。藤城の號蓋し是に基く。家世々豪富、家號を十一屋と云ひ、代々平次郎と稱し、郷正となりて、尾州藩より苗字帶刀を許さる。

其の先は具平親王に出づ。親王の後十世を赤松季則とす。季則の後十三世を村瀨重爲とす。重爲、播州揖保郡村瀨郷に出づ、因て之を氏とすと云ふ。後近江を経て參尾に轉じ、更に濃州に徙る。其裔に

松丸なるものあり。織田右府に仕へ、森蘭丸と並に寵あり。又左馬なるものあり。長湫役後徳川氏に歸して世臣となる、子孫濃州に土着して著姓となれり。

慶長五年關ヶ原役後、徳川家康、上有知を以て金森長近に與ふ。長近城櫓及閭閻を修築し、以て養老の地となす。時に藤城八世の祖華岳、田部を以て與つて力あり。華岳三世にして微なり。伯某家を嗣ぎ、叔永川、別に家を起す。永川名は宗純、通稱平次郎、之を初代平次郎とす。奮勵産を治め、賑恤を好み、道途を平にし、橋梁を修築す。配山田氏また賢淑、是に於て家道復興す。一女を擧ぐ、平田氏の子淳岩(名は義篤、第二代平次郎)を養ひ配して嗣となす。亦一女を生む。立田氏の子永岳(名は利安、第三代平次郎)を養ひ配して嗣となす。永川以下、忠純にして善を積む。壽皆八九十にして歿す。永岳子宗久を生む。宗久名は敬忠(第四代平次郎)性學を好み、特に俳句を好くす。郷正となりて力を民政に致し、堤塘を修め灌漑をよくし、特に心學を鼓吹して、郷黨を感化し、或は窮民を賑はし、或は病者を勞り、孝子節婦は官に請ひて之を旌表し、里民紛紜あれば之を和解す。官特に苗字帶刀を許し、且御目見を許せり。加茂郡蜂屋村堀部氏の女を娶り、三子を生む。長は藤城にして次は立齋(儒にして醫を兼れ尾州番典醫たり)季は秋水(書畫を以て聞ゆ、近世南宗畫の大家たり)三子各皆よく其の名を成せるもの、蓋し庭訓の然らしむる處とす。

永川宗純、初代平次郎、淳岩義篤、二代平次郎、平田氏二男、永岳利安、三代平次郎、立田氏三男、宗久敬忠、四代平次郎、藤城、五代平次郎、敬治、平次郎、文平、蜂屋村堀部氏二男、立齋、名有本、字原泉、又泉卿、妻は秋水長女、民子、秋水、名清、後激、字世猷、通稱太六、雪峽、名武、字君尊、通稱東作、天保元年歿す。

藤城寛政三年を以て生る。少にして穎敏、郷先生につきて句讀を受く。時に邑の善應寺に禪智和尚あり。號を晦巖と云ひ、永平寺第五十世中興開祖玄透禪師(寛政八年勅を以て特に洞宗安振禪師の名を賜ふ、老後善應寺に退隱す、文化三年遷化、行年七十九)の徒弟にして、禪學の外經史に通じ、詩文を善くし、尤も書法に巧なり。藤城乃ち就きて經學詩文を學び、業大に進む。

文化八年辛未(時に年廿二)春二月、出で、浪華に遊び、留まること五旬、晦巖の紹介を以て高岡靜古老人を訪ひ、又篠條三島翁及び其の子小竹に見ゆ。會、頼山陽も亦浪華に出て小竹の家によりて又山陽に晤し、束脩を行ひて弟子となる。藤城詩文集初稿載する所、靜古老人並に三島、小竹、山陽、諸先生に上る詩數首あり。是當時の作に係る。後數日にして郷に歸る。山陽も亦去りて京に出で、やがて私塾を開きて徒に授く。藤城乃ち又寄懷の一律あり、後屢、郵筒往復、經史を訪ひ、詩文の批正を請ふ。翌文化九年孟冬山陽に贈れる書牘に曰く。

(前畧)向偶寓三浪華。始得、選三返先生。行三束脩於客次。數日瞻三仰風標。奉三其醫咳。以謂當今領袖捨三先生。其誰歟。既歸。屢呈三書及詩。以乞三是正。先生辱不三鄙棄。誨函詳復。不三啻三耳提。云々(二家對策)

是なり。文化十年八月京に遊びて山陽の塾を叩き、重陽の日山陽に陪從して、糺林に遊び、唱和の作あり。幾もなく郷に歸る。此の歲晚秋紅葉の節、山陽京寓を出で、美濃に來遊し、大垣、岐阜を経て、上有知に藤城を訪ひ、暫く其家に寓し、更に藤城等と郡上に遊び、還りて再び上有知に至り、晦巖を訪ひて詩酒唱和、一日の歡を盡す。明朝山陽上有知を辭し、藍川を下りて岐阜に赴く。山陽藤城唱酬の作既に記する所の如し。

是より後、藤城、比年京に赴きて山陽の指導を受け、業益々進む。山陽詩鈔中屢々士錦の名の散見せるを見る。文政四年辛巳には「疊韻舊遊美濃詩」示村瀬士錦の作あり。同六年癸未には「士錦至、用進退韻」の作あり。翌七年甲申には「三日同士錦賦。余因病久禁飲是日始醉」と見ゆ。又八年乙酉には「仲春士錦、實甫(神田柳溪)遠來見訪。遂同觀梅伏水(此日上午)と見ゆ。越えて文政十年丁亥には、梁川星巖と共に入京し、山陽の三樹巷鳴厓水亭に寓して、留まること數月、此の間三樹柳陰稿の著あり。「次韻山陽先生見跡」及び「三條橋歌、與山陽先生、牧信侯(宮子淵)同賦」の詩、是れ當時の作なり。以て其の從學の久しかりしを知るべし。

山陽の門下俊才尠しとせず。然れども就中藤城最も山陽に敬愛せられ、特に史學と文章とを以て塾中に鳴り、頼門の高弟として其名漸く江湖に喧傳するに至れり。而して山陽の藤城を愛せるは、單に其文藻の富贍なるに止らず。慷慨氣節を尙び、國を憂ひ時を傷むの志に於て、師弟其の揆を同じくせるもの有りしに因る。山陽が熱烈なる尊王思想の鼓吹者として、一代の心血を注げる千古の大史筆、日本外史を首とし、其他諸史を編述するに當りては、藤城常に其の業に參與し、進言する所少なからず。山陽の藤城を見る、亦尋常の弟子を以てせざるは、藤城が胸中一片耿々の志、師山陽と肝膽相照すものありしを知るべく、又以て藤城が單なる章句の徒に非ざりしを見るに足らむ。曾て山陽が藤城に示せる。

回頭五歲是飛丸。機汝重遊解我顏。葉色藏花春已老。溪聲帶雨夜方閑。一燈燈下昏明理。千古文章得失間。休下向三眼前一爭。尺寸丈夫唯有二晚成(山陽詩鈔卷七)

の一詩は能く此の間の消息を語るものと謂ふべし。又曾て山陽が藤城に贈れる書簡に曰く、

外史一筆寫御卒業御拙御差越。扱々刮目。年來之宿志相遂。長く座右置、宜相親突一候意にて、相樂申候。令尊御正も意外口口此一部は私に被下候由、誠に忝き事に候、夫故態を御挨拶がましき事は不仕候。原本近便に可二差上候。暫御待可被下候。餘期三其節一候。草々頓首

孟冬既望

士錦雅契

囊

蓋し日本外史の改削全く成りしは文政九年丙戌にして、其間藤城等が其の事に與りて力ありしを察すべし。

藤城の山陽に於ける單に文章氣節を以て相許すのみに非ず、山陽が財政の窮乏を訴へたる時は、藤城屢々之を救ひたるが如し。田能村竹田の畫に山陽が賛をなせる、彼の天下の逸品として有名なる一樂帖及山陽の愛用せる風字硯が永く村瀬家に傳來せるものは、山陽が藤城の此の好意を謝せんが爲に特に寄贈せるものなりと稱せらる。

文政四年辛巳七月、佐藤一齋京攝の行あり。八月便道上有知を過り、藤城山下の先笠に展す。藤城乃ち迎へて之に晤す。既にして送つて藍川に至り、分手に忍びず、遂に與に養老山に遊び瀑布の偉觀を賞し、やがて其東行、巖邑に赴くを餞す。此際「遊多度山觀瀑記」一篇あり。越えて天保三年夏適々事を以て(曾代用水事件)江都に下るや、一齋の愛日樓に寓し留ること數月、暇ある毎に親炙其教を受け、又時に祭酒林述齋及其子林榿宇に謁して、林家の學を窺ひ、且若山勿堂等諸子と交遊し、益を得る少なからざりき。「上佐藤一齋先生書」及び「與若山勿堂書」等は此の際に成れるものなり。當時著す所東行日記あり。以て此の間の消息を詳にするを得べし。

是より先、文政八年乙酉某月、其郷上有知の藤城山に私塾を開き、名付けて藤城山居と云ひ、又梅花三千樹を栽る、茅舎を其中に結ひて、梅花村舎と云ひ、徒を聚めて教授す。(今の美濃町小學校は其の遺跡なり) 門に入るもの數十百人、傍近諸藩の子弟亦多く來遊す。或は遠く數百里の他國より笈を負ひて來遊するものあり。其間(天保末年)又郡上藩に聘せられ、屢々往きて藩校潜龍館に於て經史を講じ、又藩中有志の士に詩文を教授せり。

天保十三年犬山成瀬侯、新に學館(敬道館と稱す)を創建するや、藤城命を受けて館中に經史を講す。(弘化元年門人村瀨太乙を罵めて己に代らしむ)當時郡上及び犬山に往復して教授に従事すること其の南北起講曆に詳なり。此の間又屢々尾州藩太田陣屋及び上有知郡代官舎に赴きて經書を講述せり。門人數百人、大垣、郡上、岩村、加納、高須、彦根等諸藩子弟の來りて門に入るものまた多し。宋詩合璧例言に曰く。

余已以三閩師一自任。 請レ經者經。 請レ史者史。 旁及二詩文書法二 亦唯所レ請云々。

以て其の意を見るべし。由來學ある者、才ある者は皆祿仕に急にして、學を賦畝に傳ふるに意あるもの尠し。藤城の學と識とを以てして、名利を顧みず、生涯閩師を以て自ら甘ず、其の志欽すべきに非ずや。門下の四天王とも呼ばれしは岩村藩儒田邊恕亭、郡上藩儒入山謙受、加納儒者三宅樞臺、犬山藩儒村瀨太乙なりき。若し夫れ教育の内容方法に至りては、後年著せる所梅花村舎課業次第一卷あり。就きて見るべし。

文政中同志と相謀りて白鷗社を創設し、梁川星巖、神田柳溪、柴山老山、江馬細香、金森匏庵、柏淵蛙亭、服部笙岳、日比野草川等と毎月一次大垣傳馬町の實相寺に相會して、詩酒追逐せり。當時著す所

白鷗社遊稿あり。前後二十餘年美濃文壇の重鎮たりき。

藤城性頗る遊歴を好み、到る處江山の明媚に逢へば、詩を賦し、文を屬せざるなく、每遊必ず記遊の篇什あり。文化十一年甲戌仲夏には郡上に遊び、遂に加賀の白山に登りて白山遊稿の著あり。文政二年巳卯初夏には養老に遊び、江州を経て京に出で、更に但馬の城崎湯島に遊びて留ること數旬、姫路より讃岐に航し、屋島に古を吊ひ、京を過りて歸る、此間巳卯汗漫稿詩文若干篇あり。越えて天保六年乙未仲夏には、家を携へて郷を發し、舟を江の長濱に買ひ、湖北に航して今津に赴き、若狹を経て宮津に航し、天橋の勝を探り、城崎温泉に浴し、九月京に出で、後藤松陰を訪ひ、山陽の墓に展せり。此行浴遊稿の著あり。嘉永元年戊申また但馬の城崎に遊び、往還の途、諸名勝を探り、戊申遊稿の著あり。同四年辛亥七月には弟秋水及姪雪峽門人三宅樞臺等を伴ひて、藍川を下り、江州に出で、松峯及び叡山に登り、京に入りて長樂寺に山陽の墓を吊ひ、貫名海屋、中島棕隱、梁川星巖、牧齋齋、宮原節庵、頼鴨涯等を三樹の坡水亭に招きて詩酒の宴を開き、越えて八月郷に歸れり。

藤城は單なる章句の儒者に非ずして、頗る經世の才を有し、慷慨氣節を尙ぶの士たり。其の政治的手腕を有せしは、上有知を初め、舊尾州領内五十三ヶ村の總庄屋たりしにても知らるべし。其の最も手腕を顯せるは有名なる曾代用水事件なり。時は天保元年八月、曾代用水の水利權に關して、上有邑民と笠松郡代との間に紛紜を生じ、連年決せず。遂に幕府の法庭に於て黑白を争ふに至れり。天保三年壬辰三月藤城は上有知邑民を代表して、河村内郷(名は忠左衛門、本居春庭門下の國學者)と共に江戸に赴く。越えて九月、下有知村代表者と對決せしめられ、天下の御白洲に於て事の理非を論ず。議論堂々恰も快刀斷麻

の概あり。やがて筆を走らせて、咄嗟の間に覺書を書し、之を幕吏の前に提出す。幕吏其の態度と辯論と文章に喫驚せりと云ふ。かくて訴訟は邑民の勝に歸し、遂に十一月凱歌を擧げて郷に歸るを得たり。時に年四十三。佐藤一齋の送別の詩に曰く。

村瀨藤城訟事既釋、將歸漫賦贈之(二首錄一)時天保三年冬日也  
蓋我無物似瓊英。唯把一言一儘此此行。了事當存盤帶戒。歸郷莫折錦衣裳。

(愛日樓全集)

嘉永三年秋八月洪水氾濫して到る處、其の害を被る。而して牧谷地方尤も慘烈を極む。其冬土民八百蜂起し來りて上有知を侵さんとする。藤城乃ち往き、諭して之を散じ去らしめ、更に官に請うて倉粟を發し、窮民を賑恤す。一郷終に事なきを得たり。事門人三宅樞臺の詩に詳なり、左に之を録せんか。

三寸說破八百黨。我師之功高草莽。是歲我邊無秋實。牧溪一方尤慘烈。村村飢民中夜盟。自爲三餓孽。寧風竊。決意相率入我郷。郷人荷擔起股慄。三寸幸有我師隊。彼我共得有今日。非是信義達三州里。一麾焉克息蜂起。既散二彼徒。更請官。發倉賑窮又何美。諸君各爲賦三篇。便是我師大功民。(樞臺詩鈔)

以て藤城の人物と、又其のいかに郷黨に重せられしかを知るべし。

藤城更に自家の倉粟を發して窮民に施與し、且舟行高須を経て桑名に赴き、海帶(昆布)數船を買ひて、之を郷里に致し以て飢民を救へり。當時高須舟中の作に「一笑山人小經濟。且甘奔命致微涓。」の句あり。以て其の志を見るべし。やがて修堤の諸官、關東より來り、臘より春に及び、大に土木を起す。

藤城郡下の總老を以て嚮導となり、門を過らざること殆ど十句、晝夜奔走寢食を廢するに至る。翌嘉永四年新正の作に「東風徒認梅花信。門外胼胝欲十旬。」の句あり。其の勤苦察すべきに非ずや。此の歲十一月官其の行事を奇特とし、特に弟秋水に對し、苗字帶刀を許され、(藤城は夙に之を許さる)翌五年十一

月更に姪雪峽に對し同じく苗字帶刀を許さる。辭令書に云ふ。

濃州武備郡上有知村 村瀨平次郎

凶年打擾、一統難進の時節、窮民共に多分の施物等いたし候趣相聞、奇特の事候。右は弟太六(秋水)家事引受居、専ら取計候儀も相聞候に付、太六身分に付、苗字帶刀差二免之。

十一月

蓋し藤城の郷正となるや、廉辨慈祥、上下依頼して其の恩義に服す。是を以て官勞せずして一郷よく治まり、片言よく姦慝數百人を却くるに至る。是此の恩賞ある所以なり。當時の例庶民にして氏を署し刀を佩ふるを許さず。而して藤城兄弟伯姪三人並に此の恩典を蒙る。一門の光榮何物か之に過ぎん。

嘉永六年但馬の城崎温泉に遊び、病を得て遂に起たず。九月三日易簀せり。享年六十三。乃ち柩を郷に輿送す。山陽の子頼三樹姪雪峽等護して至る、行列頗る嚴なりしと云ふ。以安寺山圓通寺先塋の次に葬る。會葬するもの無慮數千人、諡して藤城宗一居士と云ふ。配後藤氏一男一女を生む。並に夭折す。乃ち弟秋水の長女民子を養うて子とし、蜂屋村堀部忠兵衛の二男文平を養ひて之に配せり。

藤城、學經史に淵源し、博く百家に涉り、夙に頼門の高足を以て推さる。曾て山陽の門に在るや、武元登々庵評して曰く、「士錦才學富贍。卓越流輩。琢磨積功。其所成不可測也。」と。當時著す所山陽二家對策二卷(嘉永五年上木、後藤松陰の序あり)あり。就きて見れば、藤城が學殖の如何に豊富なりしかを窺ふべし。ついで文化十五年戊寅春(時に年二十八)宋詩合璧の選あり。蓋し其の意、漁洋の神韻、隨園の性靈を併せ取り、二家の長を融化せんとするものにして、以て其の識見の凡ならざりしを知るべし。

藤城年少より詞才醇美、蓋し天分なり。其の詩文、關鈕を山陽より傳受すと雖、また必ずしも山陽と

相似す。其の遠神遠意の處、別に一家の風格をなせり。一生作る所篇什頗る富む。輯して藤城詩文集（初稿、白山遊稿、己卯汗漫稿、白鷗社遊稿、三樹柳陰稿、庸齋初稿、同二稿、同三稿、東行稿、浴遊稿、梅花前稿、戊申遊稿、梅下後稿）といふ。詩は最も近體に巧にして、古體之に次ぎ、文また琅々誦すべきもの多し。藤城また傍ら書道に通じ、臨池の技に巧なり。初め王羲之の蘭亭を學び、既にして遍く晉唐の古法帖を愛し、凡そ古名家の墨蹟概ね通觀せざるなし。其の校刻にかゝる漢溪書法通解卷首載する所の序は以て藤城が書道に對する識見を窺ふに足らん。

編著する所、前記の藤城詩文集。二家對策。宋詩合璧續及雜續。漢溪書法通解。を初とし、節義追風錄。蘇黃尺牘。梅花村舍課業書目。竹雲題跋校本。温公詩文集抄本。谷音集校本等あり。

左に其の詞藻の一斑を示さん。

田園書事

阿翁頓健在。駕言命巾車。挈我往陌上。懸勳說苗畝。功名非我願。慎勿誇彼祖。先人散塵在。可三以首丘墟。汨々水田潤。碧畦亞三桑。糞夢年不儉。又及三掃秧。南風遍三隴。糞登事紛如。思三此稼穡。秋實豈無餘。十日兼二奴。何日不安居。得三蘇三僧石儲。饒汝買三琴書。十月十八日同藤子厚家子玉、及埋雲知常二師一遊三天王山。山主太信爲置酒。秋氣促我作三山遊。洞門步上錦綉樓。淺深紅染楓萬樹。繁爛滿地張三帷。一行願呼且答。直倚三欄干。覆三詩闕。好事山衲送酒來。野蕪雜然富三瓊。羞。寄語紆青拖紫客。學生能知三此歡。不。雨。屋宇鳴三春雨。盆池解三臘水。齋居殊不俗。兀坐經三於僧。無三醜燈花落。有三蕭香篆升。明朝又應三露。心賞在三鳥籟。

寄三題綠竹門

露葉煙梢畫掩門。嘯吟無三客伴三琴樽。三春睡過蕭蕭雨。又識龍孫添三幾根。名府客舍雜詩。客窓夢醒畫蕭々。臥見香烟上三竹梢。病背三杏桃一仍止酒。滿城風雨過三花朝。

村瀨立齋

藤城の弟立齋、名は有本、字は原泉、立齋（又龍齋に作る）と號す。醫を業とし、兼ねて詩文を好くせり。出で、名古屋下長者町一丁目に住し、後尾州侯侍醫となる。豆洲詩鈔の著あり。嘉永四年辛亥十一月八日歿す。子孫今尚名古屋に存せり。（三野風雅、圓通寺内墓碑）

村瀨秋水

其の季弟秋水、初名は清、後澂と改む。字は世猷、通稱眞吾、後太六と改む、又平三郎と稱す。初め韓江と號し、後秋水と改む。晩年或は秋翁と號す。年甫めて十三、名古屋に到り張月樵の門に入り、繪畫を學ぶ。年三十、紀伊に到り、野呂介石の門に入る。後（天保八年？）更に長崎に遊び、沙門鐵翁に就きて畫法を質し、豊筑二肥を経て歸る。秋水素より書に巧に且詩を能くせり。然も都城に出で、名を鬻ぐを欲せず。身美濃の山中に住して、よく畫界に重きをなし、近世南宗畫派の源泉となる。亦偉ならずや。子雪峽亦能く箕裘を襲げり。著、南遊墨戲、五牒字彙、南畫問答、畫傳錄等あり。明治九年丙子七月廿九日歿す。年八十三。（三野風雅、中京畫談、及圓通寺墓碑）

村瀨太乙

村瀨太乙、名は青黎（單に黎とも云ふ）、字は泰乙、外太郎又は泰一と稱す。初晦園と號し、後太乙（泰乙とも書す）を以て號とせり。藤城及び秋水の一族にして、文化元年上有知に生る。兄、美成、字は文遠、通稱周助、獨有又着古齋と號し、亦文雅の士たり。太乙稍長じて笈を負ひ、京都に出で、頼山陽に學ぶ。塾



に居ること三年、山陽歿後歸りて、名古屋に出で、帷を長島町に下して徒に授く。天保末年犬山侯成瀨正住、藤城を聘せんと欲す。藤城固辭し、太乙を薦めて己に代らしむ。侯乃ち太乙を聘す。時に弘化元年なり。爾來犬山藩名古屋邸の學舎に教授す。明治三年犬山に移り、藩學を督すること故の如し。在勤殆ど三十餘年に及ぶ。

太乙、平素人を教へて諄々倦まず、經史詩文を説く敢て字句に拘泥せず、大義に通じ活眼を開くを主とし、往々俚言諧謔を交へ、聽者をして願を解かしむることありきと云ふ。性温厚木訥にして、高鑑明識、遺世の風あり。敢て聞達を求めず。文墨を弄び、後進を誘導するを以て娛樂とす。書は之を山陽に學んで最も巧なり。又時に戯に山水人物を畫く、氣韻飄逸塵外の趣あり。

著す所、幼學詩選(弘化丁未自序、嘉永戊申藤城の跋あり)及び太乙堂詩鈔等あり。明治十四年七月三日犬山に歿す。享年七十九。犬山德授寺に葬る。墓碑は現に美濃町圓道寺にあり。(三野風雅、中京書談、墓碑)

題自畫山水

胸中丘壑有誰攀、  
氣韻高然溢作山。  
畫手爭誇筆墨間、  
自誇此是讀餘山。  
雲煙取態有無間、  
澗溪求分遠近顏。  
雲煙真寫我胸間、  
畫手爭誇不飲攀。  
一勺水開爲大海、  
君看疊石便成山。

神田柳溪

當時西濃にありて遙に藤城と對壘せるものを神田柳溪とす。

神田柳溪、名は充、字は實甫、柳溪は其の號なり。不破郡岩手の人、竹中丹後守の臣、神田孟察の子なり。其の先はもと大垣城主加藤氏の世臣なりしが、天和二年加藤氏の男、岩手城主竹中氏の養嗣子と

なるに當り、一家從屬して岩手に移り以て孟察に至る。孟察二子あり。長は孟明(故元老院議員、學士會員、男爵神田孝平翁の父)にして、次は即ち柳溪なり。寛政八年丙辰を以て岩手に生る。

柳溪人と爲り一目眇たり。學を好み、最も詩を好くす。醫を本業とし、西洋法を宗とせり。年少(十五歳?)は蓋し文化文政の交なるべし。文政七年遠郷の作に曰く。

高秋八月、  
西風吹崇原、  
鷹獵萬木葉。  
零落歸二本根、  
悠悠遠遊客。  
何處不銷魂、  
世途已云窮。  
亦知還故園、  
塵網久誤我、  
豈復忍重論、  
農務非所慣、  
多恐不堪艱。  
賴有二三後方、  
實樂向山村。  
刀圭代二組重、  
此計姑省煩、  
慚愧東家史、  
未嘗出三門、  
結髮事四方、  
長歸二鄉里、  
漂泊十五年、  
顛倒失素履、  
學業久荒蕪、  
世路轉傾否、  
留住無所依、  
決策戒行李、  
拜親無面目、  
十步一悸瘳、  
父母不忍嘆、  
見兒欣然喜、  
慈顏溫見接、  
百端方得弛、  
只恨昔伯氏、  
一官阻雲水、  
何當共侍側、  
朝夕具甘旨、  
疑兒已九歲、  
行走健如駒、  
嬌女纔學語、  
病妻配拙夫、  
隱操自不孤、  
推髻携兒女、  
始得見舅姑、  
歡然弄諸雛、  
兩手與三梨栗、  
笑聲溢二座隅、  
紅唇玉雪膚、  
繞膝且牽衣、  
爾汝互相呼、  
二親正忘老、  
從是誓不出、  
團聚守三香廬、  
親樂兒亦樂、  
蔬水意晏如、  
對此今日好、  
益思三時晷、  
從是誓不出、  
團聚守三香廬、

年少郷を出で、東西に漂泊すること十五年、一妻二兒を携へて歸來せる柳溪の感慨紙上に躍如たるものあり。時に年二十九。此より郷里岩手にありて、刀圭を業とし、傍ら私塾を開きて子弟を教授し、又、村瀨藤城、柴山老山、江馬細香、柏淵蛙亭等と詩酒の交を結べり。(文政九年梁川星巖の郷に歸るや、前記諸氏と蛙亭の爽氣樓に會して詩酒徵逐せること星巖集に見ゆ)。其居を南宮山房と稱す。(天保二年牧百峰撰、南宮山房記あり)

其の間屢、京に出で、山陽を訪ふ。山陽詩鈔及遺稿中實甫の名の散見するを見る、文政八年乙酉には「仲

春士錦、實甫遠來見訪、遂同觀「梅伏水」と見え、同十年丁酉には「神田實甫至」、及「同實甫、伯兔、遊「糺林」の詩あり。天保二年辛卯にも「實甫至」の詩あり。其の「待山陽翁宴」詩に曰く。

丈夫不能取三班超萬里侯。當臥三元龍百尺樓。先生抱道無所遇。仰望青天際九州。與世要納不相入。遊焉故當學三匹僂。嗟吾學書學劍無三長。自顧此身一如三浮漚。君謂孺子頗可教。郊寒島瘦勉呻吟。病馬服轅不知疲。敗船任波何處留。野史亭前秋水碧。落日沈沈山欲夕。與爾新詩橫街口。酒氣氣氤紅筆學。十年三陪文字飲。長安不識綺羅席。巨及摩天真快觀。何如清眸刺劍戟。

天保壬辰九月九日、梁川星巖、牧百峰等と鴨河の酒樓に會飲して、星巖の東上を送り、晚間山陽の病を問ふ。時に柳溪詩あり。曰く、

落落蕭蕭水急流。滿城風雨共登樓。長卿抱病常高臥。玉案依人欲遠遊。松菊園荒三運曉。關山雁度八州秋。酒醒愈覺吟腸冷。獨立蒼茫不耐愁。

自愧支離骨。猶存天地間。知誰避三差劇。煩汝度湖山。浪枕矢橋渡。風與蓬阪關。老夫唯有淚。相見未開顏。此の月廿三日山陽遂に下世す。柳溪即ち挽詩三律あり。哀々の情頗る切なるものあるを見る。

同年兄孟明歿し、嗣子孝平尚幼(時に三歳)なり。柳溪能く之を扶掖して成立に至らしむ。後年孝平が蘭學者として、又良二千石として遂に能く大名を擧ぐるに至れるもの、柳溪に負ふ所少しとせず。

天保四年(?)東遊して、富士山を觀ては富嶽歌の長篇を賦し、相州に古を吊うては懷古三律を賦し、江戸に入りて大窪詩佛、鹽田隨齋、岡本豐州等と詩酒の遊をなし、或は松崎慊堂の羽澤の間居を訪ひ、又同郷の梁川星巖、田邊恕亭等と邂逅せり。其の墨水竹枝に曰く、(原四首録二)

大橋橫跨二州間。榮戰森然往又還。兩岸紅塵遮不住。上流遙露筑波山。木母寺邊維纜過。王孫墓畔柏欄歌。可憐芳草萎々恨。惹得遊人一似個多。

かくて毛野を過り、碓氷嶺の險を逾えて、五古長篇を賦し、岐蘇路を過ぎて、岐岨雜詩十二首を賦し、夏六月郷に歸れり。後又或は勢州に、或は浪華に、或は京師に遊びて、當時の諸名流と詩酒の交を訂せり。

嘉永四年四月十一日病みて歿す。年五十六。岩手村字宮前、祥光寺に葬る。夫人數江氏、杵根の數江元丈の女、三男三女あり。長、惠明嗣ぐ。門下の名あるもの溪毛芥師(南條文雄博士の父)三上藤川等あり。

著南宮詩鈔二卷あり。(嘉永三年上梓、高橋杏村の南宮山房圖、梁川星巖の題南宮山房詩、牧百峰の南宮山房記、村瀬藤城の南宮詩鈔跋あり)詩一百七十首を鈔出せり。其の詩或は清高、或は渾厚、或は勁拔、或は秀雋、時に奇警を出し、五古よく陶詩に通り、七古よく老杜の壘を摩せり。而して律絶は最も其の長とする所。之を要するに柳溪は當時の美濃詩壇の重鎮にして、山陽星巖、松陰等が口を極めて賞賛せるもの故なきに非ず。前記の詩、元より其の一斑に過ぎざれど、以て其の全豹を窺ふに足らむか。外に蘭學實驗三卷(弘化版)の著あり。(山陽詩鈔及遺稿、南宮詩鈔、祥光寺内墓碑)

美濃の文教とは直接相關する所無きも、美濃出身にして、山陽門下の秀才として、當時名を京畿に馳せたるものを、後藤松陰及び牧百峰の二子とす。

後藤松陰、名は機、字は世張、通稱俊藏、又は春藏、松陰は其の號なり。初め鎌山人、又は兼山人と號す。蓋し鹿城北方鎌谷の名に取るなり。又別に春草と號せり。其の先は後藤基直より先づ。基直は五

後藤松陰

郎左衛門と稱し、尾州中島郡加賀野井村に住せしが、其の次男圖書來りて安八郡森部村に住す。其の子助右衛門は森部村後藤家の祖なり。後數傳して玄中に至る。玄中は松陰の父なり。名は邦基、字は德華、田園舎と號す。もと同族の子なりしが、寛政六年二十七歳にして後藤家の養嗣となり、醫を業とす。初め漢學を岡田新川に、醫術を淺井圖南、淺野良甫に學べり。文政三年五十五歳にして歿す。二男あり。長は省吾、名は德基、字は伯恭、豐齋と號す。家を繼ぐ。(省吾の子主一、孫宏一を経て、今の當主幹一氏に至る)、次は即ち松陰なり。寛政九年正月八日を以て生る。

松陰幼にして穎悟、神童を以て稱せらる。初め大垣の菱田毅齋に學び、其の塾長たり。文化十年山陽の來遊するや、主として毅齋を訪ふ。毅齋松陰に命じて城東に迎調せしむ。其の大垣を去りて桑名に赴かんとするや、松陰送りて高橋に至り別を告ぐ。松陰が彼の有名なる山陽の「一蓬風雪下濃州」の詩に附記して、「時機始謁先生。送至高橋奉別。今已二十年矣」と云へるもの是なり。やがて松陰京に上り、毅齋の紹介によりて山陽の門に入れり。時に文化十二年乙亥正月なり。(或は云ふ。松陰の初志は醫に在り、京師の醫後藤某(長山の子孫)の門に入り、後頼門に入る也)

文化十五年丁丑、山陽、「以舊藏紫石研贈世張」の詩あり。其の後半に云ふ。  
不知與汝比范縉。出入視之與吾齊。要見汝吐氣如三萬丈彩霓。化向筆底瀉一瀉。

松陰之に附記して曰く「機之日用唯一硯。曷止范縉。而不能瀉一瀉。以答先生。爲之慙。可謂硯之三災。」と、言は松陰其の師より紫石硯を得て、愛藏せること范縉の縉袍を得たるにも勝る。唯不敏にして玻瓈(美玉)の如き詩文を吐出する能はざるを恥づとの謂なり。以て師弟の情誼藹然掬すべきものあ

るを見るべき也。此れ松陰が入門後五年の事なり。

文政元年戊寅春二月、山陽が京を發して九州に遊ぶや、松陰之に従行す。時に年二十二歳、長崎に在る時會々飛報あり。「故郷の老母病みて危篤なり。」と、乃ち倉皇踵を回して東に還る。山陽時に賦して曰く、

津城剪燈火。細語夜把卮。千里相提挈。一日忽此離。雪蓬瀛水上。雨簷筑山陲。寓居杯更洗。旅館飯共炊。  
 從後時穿眼。追及復解頰。執杖誼已盡。陟岵情可思。促汝治行李。東首臨路歧。回顧會歷地。雲山何遽遊。  
 逡巡未爲發。念余獨留玆。吾恐涉暑路。毀三傷汝膚肌。慎勿食三程頰。舟輿從所宜。風指幾旬外。欣弄拜三堂帷。  
 過洛見三家室。平安煩三報知。余游亦已倦。季秋以爲期。握手鴨水上。當三共話三此時。

後、山陽、肥薩を経て、歸路豊前に到り、寄懷の詩を賦して松陰に致せり。詩に曰く、

瓊津分手未涼秋。孤旅無端已曠裘。藤館風燈燈路雪。每逢詩境一轉回頭。

松陰之に附記して曰く「是時僕方寸亂矣。不待已辭歸。母在牀瘦如腊。見僕到欣然。既而先生此詩至。孃與爺見之亦大喜。而病亦漸愈。蓋陳椒之賜也。」と、師の詩を得たる松陰一家の感喜想ふべく、又以て兩個の交態の尋常ならざりしを見るべし。

翌文政二年松陰再び京に出で更に浪華に赴く。爾後浪華に留りて私塾を開けるが如し。開塾の年月は不明なれども、此の年四月既に浪華に住し、山陽母子が京より、大阪を経て廣島に向へる際、其の寓舎に松陰の來訪を受けたりと云ふ。文政四年松陰京に入りて山陽を訪ふや、山陽は九州の會遊を回顧し、一律を賦して之に示せり。越えて文政七年山陽の母梅颯夫人の上洛せんとするや、山陽豫め大阪に出迎へ、松陰の宅に宿して款待を受く。山陽詩あり。曰く、

海雨寒鳴屋。江雲濕壓城。頼三君留客意。緩三我待親情。斗酒貯春醞。一燈同夜明。板輿來幾日。數起候三陰晴。  
 文政八年乙酉松陰年二十九歳にして、篠崎小竹の女町子と婚す。山陽の媒妁によるなり。小竹は三島の子にして、夙に帷を浪華に下し、山陽とは無二の親友なり。是より頼、篠崎、後藤の三家は一層の親懇を加へたるが如し。此の年五月、居を永代濱の海部堀(西區)に移す。庭に一大松樹あり。依て是より松陰と號せり。後年(天保十三年)移居の詩に「舊寓有松樹。所以號松陰。」と云へるもの是なり。天保三年壬辰八月山陽病む。松陰乃ち往きて之を問ふ。山陽大に喜び、賦して曰く、

喜二世張來問疾。時壬辰八月四日。炎嘆猶甚。而是夕得快雨。

溯江看我病。犯暑見君情。命浴洗炎垢。呼尊乘晚晴。雨聲環座到。電影照杯明。老子雖三醒眼。豪談共燭檠。  
 超わて九月二十三日山陽遂に歿す。其の葬儀に際し、遺族近親に次ぎ、門生中第一に焼香したるは松陰なりき。後藝州なる梅颯夫人が松陰に與へたる書簡に曰く、

山陽あまも、子ども皆幼少にて案じられ申候。この後の所、御心添られ下され候やう御たのみ申候。

と、松陰が梅颯夫人の依託を空しくせず、山陽遺族の保護に任じたるは、松陰が、山陽夫人梨影子の歿後其の碑文を撰し、其の文中に「余庚同君。悉君平生。」といへるを以ても之を知るべし。山陽門下多士濟々たるに、松陰が特に碑文の撰者となりしもの豈偶然ならんや。後年松陰また能く其の遺子三樹を教導して以て師恩を報せり。

山陽の著述を見るに、其の校訂者又は序跋者の中に松陰の名を見ること甚だ多し。此の點に於て松陰は山陽の功臣といふべく、而して山陽が著述を以て天下に立てたる偉功の一部には、松陰も亦與りて力ありと云ふも不可なかるべき也。

當時板倉甘雨侯(名は勝明、字は子赫、別號節山人、稱伊豫守、上州安中城主、甘雨亭叢書を刊行す)加番を以て大阪城に在り。松陰其の知遇を受け、岳父篠崎小竹等と共に屢々召に應じて之に赴き、盃酒文を論じて情布衣の交の如し。天保十年其の任滿ちて江都に歸るや、松陰送りて牧方驛に至り、詩を賦して之に贈る。後又屢、其の恩願を被れり。

弘化三年丙午初夏郷に歸りて先塋に展し、郷友柴山老山、江馬細香、小原鐵心等と詩酒の歡を罄せり。其の大垣を去らんとするや、舊師菱田毅齋を初め、松野晚翠、飯沼百藏等、送りて長松に至り、飯沼愨齋の平林莊に飲別す。松陰詩あり。

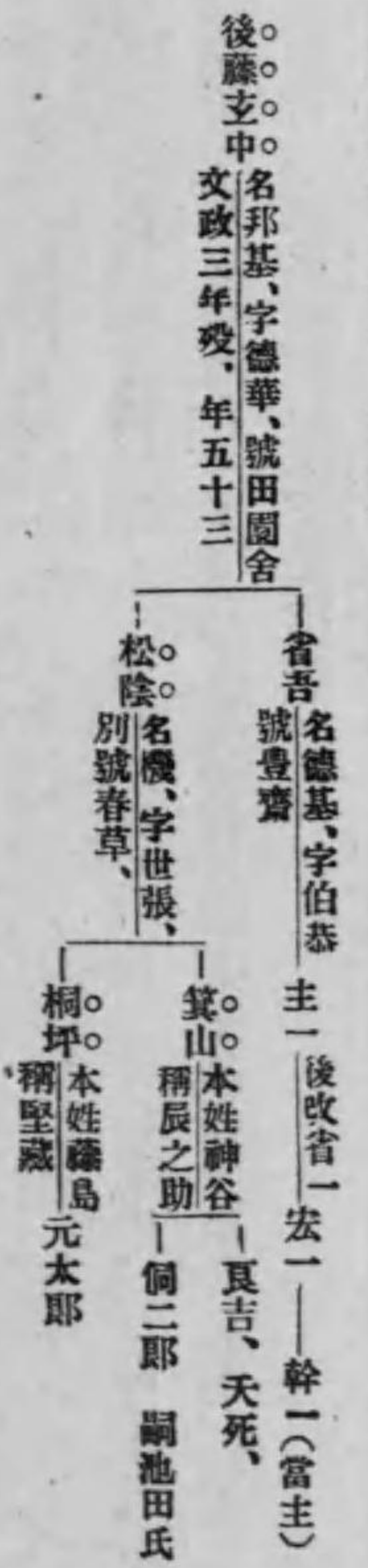
翠嵐綠樹藏三莊。青苔如席滿園香。多年部下編塵染。今日素衣欲化蒼。

弘化四年丁未八月居を柘木街に移す。岳父小竹之が資を助く。移居雜詠十二絶の作あり。是より、文久二年壬戌十月更に居を堂島濱四丁目に移すまで、十六年間此に住せり。當時浪華に在りては、篠崎小竹學海の耆宿として知られ、文に於ては松陰を推し、詩に於ては廣瀬旭莊を推せり。以て其の如何に世に重せられしかを知るべし。

著す所、春草詩鈔、好文字、松陰亭集、竹深荷淨書屋集、松陰詩稿、松陰文稿等あり。而して竹深荷淨書屋集の名は文政四年(松陰時に年二十五)刊行の三野風雅に見えれば、其の少時の作たるを知るべく、松陰亭集の名は天保九年。(松陰時に年四十三)刊行の天保三十六家絶句に見ゆれば、其の壯年時代の作たるを知るべし。松陰詩稿は九卷ありて、天保十年より元治元年までの詩を録せる自筆の稿本なり。今

大阪府立圖書館に貴重書として藏せらる。松陰文稿三冊は大阪の書家故寺西易堂氏（松陰門人、元名古屋の人、大正五年歿、年九十二）之を秘藏せりといふ。

元治元年甲子十月九日松陰病を以て歿す。享年六十八。大阪天満天徳寺に葬る。墓は現に同寺に在り。碑面題して「松陰後藤先生墓」といふ。配篠崎氏、子無し。小竹の門人神谷箕山（名古屋の人、名は元善、字は子長、通稱長之助）を養ひて嗣となす。箕山年十九にして江戸に赴き、大槻磐溪の門に遊ぶ。學才あり。業大に進む。不幸、安政六年正月、年三十にして父に先ちて歿す。因りて更に長府の人藤島桐坪（飯谷期庵門人、名は敬、字は子訥、別號雙梧、杏雨樓主人）を嗣とす、慶應三年四月病歿す。配小松氏、名は順子、子なし。順子の兄長橋寅助の子元太郎を嗣とす。明治二十一年元太郎病歿して後、遺族淪落して行方を知らずと云ふ。左に其の系譜を抄記すべし。



松陰一生作る所、詩文頗る多かりしならんも、未だ刊行に至らず、惜しむべし。唯、詩は天保三十六家絶句（松陰の絶句二十五首を収む）嘉永二十五家絶句（松陰の絶句五十五首あり）及び攝西六家詩鈔（卷四全部、松陰の詩にして、古今集約百三十首を収む）に載せたるもの、以て其の一斑を窺ふべし。（松陰詩稿は未定の稿本にしてなほ刪潤を要すべきが如し）左に其の數首を抄せんか。

烏鬼詩并序

一日倚欄酌酒、時有二鶴鵲一群、出沒前江、捕魚食之、忽憶三家江鳥鬼之盛、追錄往事、作三烏鬼詩、

岐阜山東長良、山水風曲如屏疊、中有三居人、數十家、近三使鳥鬼、作三生、葉、一、烏鬼何所捕、映中多香魚、

三月三至九月九、趁暗燃火照、嗚、已卯六月得三好侶、下流泛舟載三綠、遙見紅暈、轉山自上游、疑是水瀾、朝霞、

忽來圍我十艘炬、每艘一人使三十、十條柏繩執如組、松明徹水、勝三然、逐三驚、追三逃、俯三可、視、鷓將之手、何疾捷、

吐者投之、嗜者吐、左顧右盼、接忙、夔州黃魚何足數、須臾月出、觀亦止、紅底堆雪、萬鱗、大獸三公所、充三稅、租、

小賣三酒客、與三魚戶、脆笑入口、便欲消、醫藥鹽炙、唯所取、君不見、永祿元龜、織田右府、據三此山、南戰此、伐、無三寧、歲、

當時豈無三納涼船、當時恐未、有、三此觀、幸、然、吾、曹、耳、不、聞、三鼓、角、唯、答、三承、平、一、以、三歌、曼、一、夜、深、醉、醒、三、到、三、曉、兩、岸、蛙、聲、正、聞、關、

映中多蛙、其聲啾々、異常、相傳昔右府取三井堤玉川種一放之、是其遺、

題三澧州地圖一應之案

田野豁達川浹、雨僅三日堤已溢、樹抄到處懸三水髮、澧州是我父母鄉、東望每顧無三凶荒、誰能投三巫通三水道、

時無三我家、四門約、天長中、藤高房任三美濃介、與三水利、逐三妖巫、

校三山陽詩鈔一刻成題三其後

詩抄、鑄成人、已仙、焚、香、先、奠、玉、樓、魂、非、才、甘、受、陰、陶、暗、大、匠、何、須、字、句、論、筆、底、萬、珠、持、三世、道、

此翁風節誰能讀、同三首、京城三泪、眼、昏、先、師、有、下、身、留、三劍、答、三君、恩、一之、印、上、

圓龜還三下村一舟中

江北江南七十程、大舟快棹夜三更、柁樓醉擁波間月、身在三金龍背上、行、

崑城恭侯見訪、時余遊三城南、既歸、有、三留、題、賦、此、和、答、

松風設々滿三虛堂、借、三與、吟、朋、一入、三睡、鄉、應、三笑、主人、衝、熱、出、枉、三拋、三萬、斛、北、窓、涼、

（三野風雅、天保三十六家絶句、嘉永二十五家絶句、攝西六家詩鈔、山陽詩抄、同遺稿、松陰詩稿、大日本人名辭書、樂城會誌）

牧百峰、名は靦、字は信侯(又信吾に作る)、通稱善助(又善輔に作る)、自ら百峰山人と號し、又戀齋と號せり。本巢郡文珠村の人。京に出で、山陽に師事せり。(山陽遺稿卷一、文政九年丙戌信侯の歸郷を送る詩あり。信侯の名の見えたる此を初とす。蓋其の出京は文政の初なるべし。)

業成りて銅駝坊に帷を下し、徒に授く。其の居山陽と相近きを以て常に相往來せり。山陽遺稿を検するに、「夜訪信侯呼星巖又至」「信侯至自省郷」「九日同伯免、信侯輩登吉田山」「信侯至、同賦」「臘月廿六日訪信侯」「文政十一年戊子」「夜過信侯」「戀齋小飲」(天保二年辛卯)等の詩あり。其の信侯至自省郷の詩に曰く。

都門廿桂玉、忽然思鄉關。嗚惜鳥兔、爺孺已桑榆。就我決其計、理裝速上途。乃母謀歡脚、乃翁笑欲歸。每書說衰憊、謁見喜豐腴。掩留無多日、團樂樂有餘。鄰叟借漁具、行釣三舊溪魚。手調供三甘旨、齋半還贈余。所愧抗顏面、父師誼不殊。挑燈談歸況、一一想歡娛。吾亦存老母、欲省路太紆。前月得一信、不知今何如。以て其の交態を知るべし。

文政十二年山陽の日本樂府成る、百峰爲に之が註解を作り世に出せり。百峰最も詩に巧に、又よく文を屬せり。文は蒲生氏郷論最も名高し。左に其の詩二三を示さんか。

京寓遇下梁公圖自西遊歸見上過賦贈  
烟鎖春城籠暖香、小留且勿促歸裝。  
故園松竹陰長在、不似櫻花園落忙。  
秋夕喜神田實甫至  
十年世路度岐嶒、自愧強顏對舊朋。  
尙有鐘塵侵未了、木犀花底剪秋燈。  
東山遊春曲(原十二首)  
春彩風軟影婆娑、如此滿山綠肉何。  
誰爲香雪剝閑地、著落花多處看人多。

春煙一帶暮山蒼、流水絃聲隔翠楊。探遍殘花一歸尙早、第三橋上看斜陽。  
百峰又平家琵琶を好くし、輿に乗じて屢之を彈せり。山陽の詩に曰ふ。

茫茫鯨海葬櫻髻、到耳琵琶意淺深。赤馬紫溪曾歷處、四絃喚起十年心。  
弘化年間、學習所(後の學習院)の創設せらるゝや、百峰擧げられて儒師となる。地下の士、堂上の儒師となる、蓋し異數の事なりとす。著、戀齋漫稿あり。

文久三年癸亥二月十三日歿す。年六十三。子春彦嗣ぐ。墓は京都丸山長樂寺に在り。題して「牧戀齋先生之墓」といふ。(山陽詩鈔、同遺稿、天保三十六家絕句、墓碑)

江馬細香

最後に山陽門下の才媛として世に知られたる江馬細香を傳すべし。  
江馬細香、名は鼻、號は湘夢、細香は其字なり。又名を琦琦と云ひ、鼻鼻とも書せり。天明七年大垣城東藤江村に生る。父名は元恭、通稱春齡、蘭齋と號す。大垣藩の醫員たり。前野蘭化の門に遊び、杉田玄伯、宇田川槐園、大槻玄澤等と交り、蘭學を研習す。實に關西蘭學の嚆矢たり。其の儒書に於ける亦精苦、論語訓詁解二十卷の著あり。配小出氏、一男二女を生む。男天す。細香は其長女なり。(蘭齋小傳、禪桂寺内墓碑)

細香幼より畫を好む。初め京都永觀堂の僧玉溝和尚に従つて墨竹を學ぶ。偶山陽大垣に來遊す。乃ち就きて字を質し、詩を學ぶ。又浦上春琴に従つて六法を受け、且中村竹洞、山本梅逸に往來して其の名漸く高し。

細香嘗て父に請ふに、一生婚せず、筆硯自ら娛まむことを以てして許さる。傳へ云ふ。山陽、近江の人武藤某を遣し婚を蘭齋に請ふ。蘭齋思へらく、「曩に尾藩の家老大道寺玄蕃頭より婚を請へる時、彼生涯人に嫁せざるを以て辭となして、遂に肯はず、今又山陽の請を告ぐるも、彼は決して應せざるべし。」とて、未だ細香に謀らずして山陽の請を却くと。(頼醇門人薄井小蓮賦)然るに好事者又傳へ曰ふ、山陽人を以て婚を請ふ。細香常に以爲らく、「萬人に卓越する者に非ざれば醜せず」と、當時山陽の伎倆未だ著れず、故に竟に辭して應せず。後山陽の名世に顯るゝに及び、細香恥ぢ、之を悔いて生涯遂に他に嫁せずと。(古今雅俗石亭雅談)是れ細香を誣ふるの甚しきものなり。蓋文化十年山陽の來遊せし時、山陽は三十四歳、細香は二十七歳、當時の時勢に於て、生涯獨立の素志なくして、豈二十七歳の老嬢子に至るまで婚をなさざるの理あらんや。

文化十一年甲戌仲春京に上り、山陽及武元登、花を嵐山に賞す。山陽時に賦して曰く、

同二武景文、細香一遊二嵐山一宿二旗亭一  
 山色稍暝花尙明。綺羅分路各歸城。詩人故難落二人後。呼燭溪亭聽水聲。

甲戌仲春陪二山陽登茶雨先生二觀二花於嵐山一  
 微風晴定淑光和。小隊輕裝取次過。不恨看花三日早。滿枝開遍醉人多。

此の年玉濤老師歿す。輓詩に曰ふ。

飛鴻久不帶香來。筆硯何知埋積埃。遺墨如今藏在篋。每聞一編一覽哀。

超わて文政二年己卯九月又京に上り、山陽及雲華和尚と共に吉田山に登る。

己卯重陽陪二山陽先生、雲華師一遊二吉田山一紀事  
 吟步三四里。清伴五六人。峻危攢三平處。兼就二眺望新。飄酒甘三於密。醉顏背二斜日。入洛二旬餘。此遊是第一。

翌々文政四年山陽及秋巖、春琴と砂川に遊び、賦して曰く、

同二山陽先生及秋巖春琴二君一遊二砂川一  
 緇塵不復撲衣裳。織出二城門一意轉長。水高官肥牛塘綠。野蕪蕪放滿籬香。

越えて文政七年甲申九月又京に上り、山陽と砂川に遊び、又高尾に、栂尾に、通天橋に紅葉を賞す。砂川の飲、細香詩あり。

砂川飲賦呈二山陽先生一(原二)  
 好在東郊賣酒亭。秋殘疎雨撲三塵。市燈未點長堤暗。同傘歸來此際情。

文政十年丁亥二月には山陽と伏見に梅を觀て賦して曰く、

二月念日同二山陽先生及諸彦二觀二梅於伏水一(原二)  
 京城幾度趁二花開一。清賞參差未及梅。有問今春春事晚。恰看溪畔雪千堆。

三月十三日には頼杏坪及山陽と加茂に遊び、又平野に花を觀てかへる。

文政十三年(天保元年)三月又京に入り、山陽を訪ふ。山陽の詩に曰く、

將二欲看二花君怡來。相携明日即佳期。滿園香氣飄難著。起見春星帶風垂。

細香の詩に曰く、

三月念二日遊三近砂川生於山陽先生宅。時先生欲遊嵐山。

一時同意事。春遊。儂自三溫州。君淡州。明日共爲三看花伴。欲陪吟杖。醉溪頭。

翌日共に嵐山に遊ぶ。細香賦して曰く、

三月念三遊嵐山。有憶。依山陽先生韻。

櫻花萬樹白分明。憶趁三春風。曾出城。十五年前同醉地。一溪猶作三舊時聲。

かくて滯留數旬、一夜共に別を語る。山陽賦して曰く、

雨窓與細香一話別

離堂短燭且留歡。歸路新泥當待乾。隔岸峰巒雲纒歛。鄰樓絲肉夜將闌。今春有問客猶滯。

宿雨無情花已殘。此去溫州非三遠道。老來轉覺數逢離。

細香の詩に曰く、

次三韻藤井氏送別作

西莊過雨送三殘春。帶濕垂楊綠更新。曾愛幾々萬絲曼。今朝却作管三離人。

かくて細香は山陽及中島、砂川、鹽屋の三子に見送られ、唐崎にて別る。時に細香賦して曰く、

唐崎松下拜三別山陽先生

儂立三岸上。君在船。船岸相望別愁牽。人影漸入三湖煙。小。罵殺帆腹飽三風便。三踏松下去不得。

此別遂に永久の別となり。されど書翰は猶絶えず往復せるもの、如し。

細香の京師に寓して山陽に師事するや、山陽深く其志を憐み、懇に詩文を教授し、又當時の諸名流に

介して交を結ばしむ。文名遂に海内に著るゝに至る。嘗て清人江芸閣に介して詩友たらしむ、芸閣贈答詩一卷是なり。左に其一二を示さんか。

己卯又清和月、寄三贈細香女學士

能書能畫總文章。有女清貞號三細香。京洛風華游三藝學。此生不喜作三鶯。

江芸閣先生遠辱賜詩。莫以爲謝。漫寫三瘦筵數枝。且學三高韻。併題因三韻老師一却寄。聊表三芹忱。(原二)

寒閨萬里見三文章。寶鴨先焚一炷香。幾日柔荑耽三把翫。金針不復繡三鶯。

蓋し細香をして其名を成さしめしものは山陽の功多きに居る。山陽嘗て(文政三年)細香に與へたる書翰に曰ふ。

梅天より打續淫霖、瀧州は多三水災一處、今年如何御座候哉御案申候。貴稿大延引無三申譯一候。昨夕小石(小石支瑞)も見え、見せ申候。鶯鶯の詩は唐の小説中に置ても可然と申候。己自三土中一胎一節來」など云六ヶ數事よくいへる事、此方共が云、いつにても叱らるゝと申候。文章出来る人の詩は、詩の句に無理なきものにて、小石など文が出来候故、外の人とは違ひ申候。然處時々無理御座候。聞秀なみにては出来ぬ答故鶯申候、先は申留候。

文中の鶯鶯の詩とは、

拈三蓮子一打三鶯鶯一

雙浮雙浴綠波微。不解人間有三別離。戲取三蓮心一擲三池上。分飛要改暫相遠。

の一絶にして「己自三土中一胎一節來」は、

竹

幾箇修篁淇水隈。雨過新筍破三青苔。歲寒知得持三清操。己自三土中一胎一節來。

の結句なり。以て其の指導の懇篤なりしを知るべし。



山陽は又細香に詩集を上梓せんことを勸む。其書翰に曰く。

御互に御疎瀆打過候處、例の縁免併兼金の賜奈奉存候。兩度高稿、此度一同離黃、返璧候。乍、毎叙實の詩おもしろく御座候。今時、閑閑中、誰得三匹敵、御自愛可被成候。別て是送被全三清撰候事。無暇白玉、老夫も大慶の義候。それに付御勸申候義有之、此節江戸より詩佛新板隨園女弟子詩選、中もの贈越候。丁度貴處に有之、よろしきもの故呈上候。只今老夫女弟子有之候へども、莫、若、君者一は勿論に候。世間の女子と違ひ、何も外に御樂事申事有之まじく、御生涯の思出に、是迄の詩を選候て、上木被成候は、可、可、面白候。求、三於世にては、無之、自娛而已、老夫も相樂可申候。中に唐人贈答も有之、芸閣詩も挿入中間一候は、屹度面白詩集出來可申候。此義老大人に被仰、拙より御勸申候故、何卒早々可被思召立、名護屋にてよき板下御頼、永樂屋などに被仰付候は、早速出來可申候。老大人御老後の御一樂さも可相成一哉、選と序文評語など拙に御任せ可被成候。人の咲候様の事は不致候。不備

されど細香は女子にして詩集を公にするは僭なりとて之を辭せり。

天保三年九月山陽病歿す、細香慟哭、挽詩三律を賦せり。其一に曰く、

奉挽三山陽先生一

相約數期不隔年。暫離何事忽凄然。

寄詩曾憶逢離字。前盡今知永訣篇。

案壁燒香拜遺墨。

生獨置酒醉重泉。

嗚呼海内文宗久。

不獨吾情血淚漣。

當時京都に吉田袖蘭あり。又詩畫に巧なり。細香之と親交し、相携へて諸名勝に遊び、又藤井竹外、頼支峰等と相往來して唱和せり。嘗て袖蘭と共に竹外を訪ふ。竹外詩あり。

玉人佇立影成雙。

戶外無端有二吠。

堪、比、芳、蘭、與、美、竹。

相、優、禮、三、此、讀、書、窓。

然れ共、芳蘭は美竹に及ばず。一日共に澱江を下りて、浪華に赴く。後藤松陰導きて篠崎小竹翁に見わし

む。既にして辭し去るや、翁之を目送して曰く、

「真女史矣、袖蘭は則ち凡のみ。」

と。其の郷に在るや、梁川星巖、村瀬藤城、神田柳溪、柴山老山、柏淵蛙亭等の諸氏と白鷗社を結びて相唱和せり。後年又大垣に咬菜社を結び、小原鐵心、宇野南村、松倉瓦鷄等と唱和せり。鐵心細香を推して盟主となせり。嘗て一日(文政九年)星巖、藤城、老山、柳溪と蛙亭の西山爽氣樓に會す。星巖時に二絶句を細香に贈る。曰く、

暈碧裁紅篔異葩。

醉吟費破萬箋霞。

座間別有靈香進。

一采西天稱意花。

瀟洒風流賽二仲姬。

直竿放筆墨淋漓。

莫、教、三、吾、行、題、詩、句。

不、免、朱、絲、倒、好、婿。

見るべし。詩酒追逐の裡、男子に伍して遜色なかりしを。

細香、才藻筆力歳と共に愈進み、遠近詩畫を請ふもの陸續門に踵り、紙練室に滿たんとす。藩侯戸田采女正氏彬、及び老侯氏庸殊に眷遇し、屢城中に延きて畫を作らしめ、輒ち酒饌を賜ひ且章服を賜ふ。蓋し當時に在りては異數の事たり。

細香妙齡より粉華を事とせず。綺羅を用ゐず。人と爲り篤實溫雅にして卓識あり。藩老小原鐵心時に藩政に問へり。又意志強固にして頗る氣概に富む。曾て城下に遊廓を設くるの議あり。細香之聞き、封内の風俗を紊さんことを恐れ、建議して其の非を辯す。故に其の世を終る迄、其の議行はれざりしといふ。

文久元年九月病みて歿す。年七十五。藤江禪桂寺の蘭齋翁墓側に葬る。歿後十年(明治四年)侄孫春齡、

(名は元義、字は信成、笋莊と號す、細香の任清堂の子) 遺稿二卷を上木し、題して湘夢遺稿と云ふ。墓碑は今猶禪桂寺裏に儼存し、蘭齋翁の碑と並び立てり。題して「細香女史江馬氏之墓」と云ひ、後藤松陰の撰文を刻せり。又別に小原鐵心等城北岡山に瘞筆塚を築き、文を撰し碑に刻して之を建てたり。鐵心、女史を以て、蔡文姬、管仲姬の二姬に比す。洵に不可なしと云ふべし。(江馬家文書、山陽遺稿、湘夢遺稿、墓碑)

### 三、梁川星巖と白鷗社同人

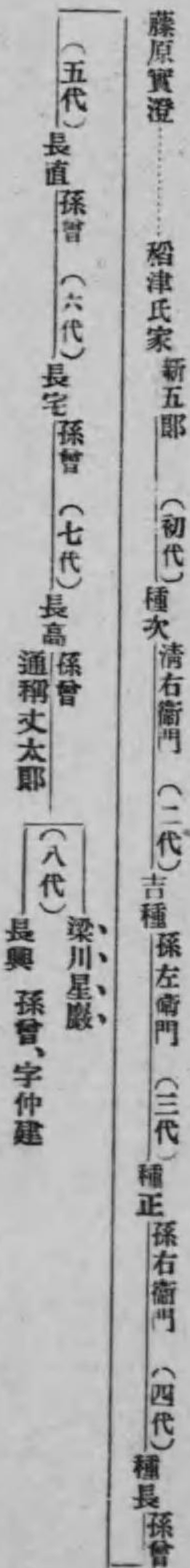
詩は元より雕蟲の小技なりと雖、其の我が邦士人の間に行はるゝ既に久しく、測る可からざる感化力を有して、世道人心を裨補せる頗る大なるものあり。然り而して我が邦一千有餘年來の詩人に於て、能く詩の眞髓を解し、卓として詩壇の正宗を以て目せられしもの、それ唯我が梁川星巖か。而かも星巖の傳ふべきは單に詩人として而已に非ず。更に心を道義の學に潜め、身を國家の事に捧げたるに在り。以下其の行事の概要を記すべし。

星巖本姓は稻津氏、幼名は善之丞、長澄、後姓を梁川と改め、名を卯、字を伯兔、通稱を新十郎と云ひ、詩禪と號す。後更に改めて名を孟緯、(單に緯と云ふ)字を公圖、又は無象と云ひ、星巖と號せり。別に三野逸民、天谷老人、百峰、老龍庵、涵三書院等の號あり。安八郡會根村(今中川村に屬す)の人、稻津丈太郎長高の子なり。

其の先は藤原氏より出づ。始祖藤原實澄(星巖集に大興公と云ふは是なり)三越を鎮し、越前に居る。子孫遂に越前稻津莊に住し、因て稻津を氏とす。十九世の裔新五郎氏天文中美濃に徙り、暫く池田郡に居り、

後會根村に移住す。永祿元年一男を擧ぐ。之を清右衛門種次(宗圓君是なり)となす。種次幼にして孤となり、外祖父邑長尾藤氏に養はれ、稻葉一鐵の近侍となり優遇受く。其子孫左衛門吉種關ヶ原の役、東軍に屬し赤阪の陣に赴く、子孫相繼ぎて孫會長高に至る。森氏を娶り二子を生む、長は星巖にして次は仲建なり。家世々富豪にして郷士たり。大垣藩主より名字帶刀を許され、藩の藏本役となり、五人扶持を受く。家庭極めて嚴肅なりしと云ふ。

(星巖家系)



星巖寛政元年巳六月十日を以て生る。幼にして沈毅、群兒と異り漫りに嬉戯せず。七歳の時郷の華溪寺の住僧大隨和尚に就きて章句を受け習字を學ぶ。資性穎悟、能く學を勉め、嶄然頭角を見はせり。其の家に在るや、父長高屢、忠臣義士の談をなす。星巖輒ち欣然傾聽して、能く其の大體を記憶し、夜深に至ることあるも毫も倦厭の色なし。父甚だ之を愛し、行々江戸に遊學せしめんと欲す。然も好事魔多く、寛政十二年正月、星巖十二歳の時、父偶病に罹りて歿し、同閏四月母亦病歿す、星巖悲哀慟哭、殆んど寢食を廢するに至れり。

文化四年丁卯年十九、慨然志を立て、家産を擧げて弟仲建に譲り、笈を負うて江戸に至る。是れ一は亡父の遺志に酬いんが爲なり。江戸に於て古賀精里、山本北山等を師とし、經史を講究し、傍ら詩文を

研鑽す。而して北山の門に寓する最も久しく、年少の身を以て所謂竹堤吟社の諸才子の間に周旋し、往々驚人の句を吐く。菊池五山、大窪詩佛の諸詩人も其の才を愛して後生畏るべしと稱せり。此の間、同門生の誘惑に陥り、北里に流連して還るを忘れし事あり。歳晚妓家の宿債を償ふ能はず、自ら髡して其罪を謝せり。五山堂詩話に曰く、

梁卯、字伯兒、美濃人、亦來參三竹堤社。青年好詩、才冠三等夷。嘗有烟火之疾。驟然改節。自髡以誓。號曰三詩禪。去入三京師。詩禪之名稱著。未二年而復東來云々。

と、是なり。江戸に留まること兩三年にして郷に歸り、更に京師に遊び、文化七年廿二歳にして再び江戸に赴く。斯くて留まること數年、其の間五山、詩佛並に柏木如亭、葛西因是等の諸名士と交り、得る所少からざりしが如し。然も事志と違ひ、企畫意の如くならず。落魄薄倖望郷の念に堪へず、屢詩を弟に寄せて其の懣軻不遇を嘆せり。

文化十一年(年二十六)江戸を出で、東武總野の間に薄遊し、翌十二年七月に至り、更に上野より信濃を歴遊す。碓氷嶺を踰え、淺間山を望み、河中島の古戰場を吊ひ、同十三年には參河に入り、遠州より駿州に出で更に遠州に入りて江山明媚の間に吟哦淹留し、十四年參の水を渡り、尾の野を過りて、秋九月郷里會根村に歸り。時に年二十九。

是より數年梨花村草舎に閑居して専ら詩學を攻め、傍ら少年子弟を聚めて句讀を授く。張氏紅蘭時に十四歳、亦絳帳に侍して詩法を受く。紅蘭、星巖の才を慕ひ、箕帚を奉せんことを父に乞うて許さる。紅蘭は同村稻津多内長好の女、母は川瀬氏、星巖と姻戚たり。文政三年十七歳にして星巖に嫁す。此の

間星巖屢出で、京畿勢尾駿遠の間に遊び、文人隱士を訪ひて唱和卷を成す。曾て頼山陽を鳴涯に訪ひ、意氣投合して斷金の盟を訂せり。

文政五年九月重陽の日、妻紅蘭を携へて西遊の途に上り、勢伊の間に吟咏して、翌年二月梅花を月ヶ瀬に觀、和州に入りて古都を弔ひ、浪華を経て舟路備後に抵り、菅茶山の黄葉夕陽村舎を訪ふ。夫より廣島に赴きて頼杏坪を訪ひ、淹留三月、杏坪等と往來して詩酒徵逐殆ど虛日なし。後三原に赴き、年を踰えて、二月三原郊北に梅花を賞す。彼の有名なる常磐抱孤圖に題したる、

雪灑三笠橋、風卷一袂。呱呱索乳若爲情。  
他年鐵榜峰頭喚。此三帖三軍一是此聲。

一絶及び絲崎に遊びて詠せる、

詩酒還成、二半日遊。

此生隨處送三悠悠。

他年夢裏問三陳述。

細雨春帆雙鷺洲。

の詩は此間に成れるもの也。七年五月廣島を發して鎮西に航す。壇浦に壽永の古を弔ひ、肥筑の諸名勝を探り、長崎に至りて清客江芸閣と詩酒の歡を盡す。此の間鄭成功詩、毘舍那詞及び瓊浦雜詠等の作あり。亦不朽に傳ふべし。長崎より諫早、竹崎、諸富を経、筑水を渡りて菊池氏の壯烈を歎じ、久留米を経て耶馬溪の奇勝を探り、十月下關に抵りて茲に歳を送る。八年正月下關を發して復廣島に赴き、杏坪等に歡待せられて淹留半歳を過ぎ、三原を経て玉浦(尾道)に抵る。偶々山陽が叔父春風の喪に奔り、將に京に還らんとするに會し、明春京師に再會せんことを約せり。十一月尾道を發し、途次再び菅茶山を訪ひ、海に航して讚岐に抵り、高松、丸龜を過りて、再び備中に還り、茲に歳を送り、九年春岡山を過ぎ、播州を経て浪華に至り、三月初旬澱江を廻りて京に入り、山陽夫妻と相携へて花を嵐山に觀る。星

巖の山陽に於ける、其の交風流文字に始まると雖、肺肝を披瀝して、歡然相得るに及んでは、談必ず國事に及び、王室の式微を慨し、幕府の專横を憤れり。夏四月京を發して湖上の風光を賞し、客遊五年にして郷里會根村の草堂に歸れり。

在郷一歲、其の間、柴山、老山、村瀬、藤城、神田、柳溪、柏淵、蛙亭、江馬、細香等白鷗社の諸詩人と交を訂し、互に相往來して詩酒唱酬せり。

文政十年三月郷を發して復京都に上り銅駝坊(條三)に寓す。時に年三十九。居ること三年、山陽と來往、詩酒平生の歡を盡くす。日野、大納言、資愛、公亦星巖の才を愛し、屢其の詩讎に延きて、顯謁最熟せり。文政十二年四月郷里に歸展し、秋七月祖先祭を行ふ。九月又出で、伊勢に遊び、翌天保元年京に入り、夫より彦根、京都の間に寄寓すること三年、天保三年秋意を決して江戸に下らんとす。會々山陽の病を聞き、九月彦根より京師に急行して之を訪ひ、遂に東下の途に就く。途中其の計を聞き、慟哭詩を賦して之を弔せり。

十月江戸に抵りて先輩卷、菱湖の宅に寓し、十二月望日宅を八丁堀に賃す。而して賣文の資動もすれば衣食の用に足らず。貧を歌ひ窮を哭する作甚だ多し。此の間藤田、東湖と交を訂し、文字以外相識るものりき。五年正月詩を賦して幕府の專横を憤る。二月江戸大火あり、星巖の寓居亦災に罹る。幸に東湖の好意に依り、暫く水戸藩邸に假寓するを得たり。時に華頂法親王、駕を駐めて増上寺眞乘院に在り。星巖及詩佛其の知遇を蒙り、屢謁を賜ひ詩賦を命せらる。亦當時文人の美望する所たり。

此の年十一月神田柳原の北隅阿玉ヶ池の傍に新居を營み、詩社を開きて玉池吟社と稱す。問詩の弟子

益々進む。會々佐久間、象山、江戸に出で、玉池に寓し、常に星巖と往來して大に國事を論ず。然も星巖は陽には詩を談するのみにして、敢て慷慨家たるの態度を示さず。爾後十餘年間門戸を張りて斯道を振作し、玉池吟社の名海内に鳴る。常に天下の名士と來往して唱和應酬し、暇あれば則ち出でて、常野、總房の間に遊び、品題殆ど遍し。

弘化二年四月俄に玉池吟社を閉ち、西歸の計を決す。人其の故を問へども答へず。強て之を叩けば則ち曰く、「江都人民輻輳、戸口五百萬、一人五合の米を食へば一月の間、其の用七十萬石を下らず。其の米多く海運の輸す所たり。近ごろ英夷猖獗、漫に覬覦を逞しくす。一朝我が品海を襲はゞ、海運の便忽ち絶せん。即ち五百萬の生靈飢餓眼前にあり。吾輩老羸、此の間に居る、必ずや溝壑に轉するの災を蒙らん。是を以て去て故園に歸らんのみ。」と、是れ胸中秘する所の大計ありて然るなり、象山別を送つて曰く、

知レ進而不レ知レ退。知レ存而不レ知レ亡。知レ得而不レ知レ喪者。天下皆是也。而公圖獨決然于此。易曰介于石。不レ終レ日。貞吉。公圖其殆庶幾焉。

(象山全集、別二梁公圖一序)

と、其行を賛せり。

星巖既に歸郷して茲に歳を送り、三年六月、勢、伊の間を歴遊して故舊を訪問し、歲晚京に入り、鴨川に臨みて宅を賃し、居ること二年、嘉永元年十二月居を華頂山の北に移し、黃葉山房と名づく。二年九月又鴨涯に移り、鴨沂小隱と稱し、安政五年戊午終焉の時に至る迄、此に栖息せり。此の間、閑を偷んで佛典を講究し、進んで道學の書を読み、特に王陽明の學を研鑽し、又深く劉念臺を信じ、復詩人を以て

自ら任せず。彼の香嚴集及び春雷餘響は此時に成りしなり。

嘉永六年米艦の浦賀に來りてより、海外の諸國競うて至り、通商貿易を請ふこと頻にして、人心恟々、物議騒然たり。而して幕府の所置機宜を失すること多し。星巖憂國の念禁じ難く、陰かに天下の名士と結托し、暮夜掌を示して時事を談じ、大に爲す所あらんとす。當時勤王諸士の京に入りて諸措紳に見えんと欲するもの必ず星巖に紹介を乞へりと云ふ。かの佐久間象山、吉田松陰の如きも星巖の手を経て策論を朝廷に上れり。然れども陽には是れ純然たる老詩人、香を焚き書を讀み、花に嘖し、月に嘯き、優游自適、世事の何物たるを知らざるが如し。其の國事を慨して作れる所の詩集りて編を成す。之を額天集と名づく、蓋し尙書の「無辜額天」の語に取りしなり。而かも生前には深く筐底に秘し、敢て他人に示さざりき。

安政五年幕府の條約調印を專決するや、星巖深く之を慨し、竊に同志の土梅田雲濱、賴三樹、池内陶所等と謀り、親王公卿の間に建言して之を動かし、遂に攘夷の別勅を水戸藩に降下せらるゝに至れり。秋八月閣老間部詮勝、幕命を奉じて京師に上り、尊王攘夷の論者を探へんとす。星巖慨然詩二十五首を賦して間部侯に上り、以て時弊を諷る。曰く

小籌大策漫紛々。  
一舉誰能掃海氛。  
 霜田開港已怪事。  
何況三部諸要津。  
 當年乃祖氣遼陵。  
叱咤風雲一卷地輿。  
爲レ臣豈得レ建私議。  
聖慮焦思無晝夜。  
只許三前條一不容後。  
今日不能除外憂。  
若弄空權一忘太本。  
徵夷二字是虛稱。  
內憂外患一時來。

莫レ援承久元弘例。

事體方今迥不同。

皇上只要レ威レ海怪。

未嘗一刻外關東。

既にして病に罹り、是の歲九月二日（一に九月三日とすは誤れり）遂に歿す、年七十。南禪寺内天授庵に葬る。墓碑は猶同院に儼存せり。

明治元年十二月、朝廷維新前の功勞を思召され、梁川家に左の辭令を賜ふ。

右舊幕府執政の頃より勤王の志厚く、鞠躬盡力の内病死致候。方今王政復古之時節至り候に付、生前の刻苦忠勤を追慕し、十五日於二靈山一靈魂を祭祀する者也。

紅蘭女史

越えて、明治二十四年四月八日、正四位を追贈られ、靖國神社に合祀せらる。死して餘榮ありと云ふべし。星巖の歿後三日、梅田雲濱、賴三樹等の志士盡く逮捕せらる。幕吏星巖を以て領袖に擬し、其の家に闖入すれば、星巖既に亡し。是に於てか其妻紅蘭を捕へ、且つ詰問して曰く「夫の密事汝之を知らん」と。紅蘭從容として答へて曰く「我が夫は男子なり、豈其の機密を區々婦女輩に漏すものならんや。縦し之を漏したりとするも、亡き星巖の妻として、夫の罪狀を白狀するに忍びざるなり。」と。幕吏之を如何ともする能はず。在獄殆ど半年、翌年二月赦されて青天白日の身となれり。

紅蘭、これより零丁孤苦、備に艱辛を嘗む。然れども貞操愈勵み、毅然自ら持して、其の志氣大丈夫に譲らず。世是を以て益々星巖の典型を稱せり。明治元年五月朝廷紅蘭が夫星巖の勤王を補佐せし功を賞し、左の辭令を賜ふ。

故梁川星巖妻

景

婉

故星巖舊幕府執政の頃より勤王の志厚く、畢生力を王事に盡し候處、景婉事承順補佐し、夫病死の後に至り、徳川氏役方の者の爲

に捕へられ、數月投獄、嚴酷の鞠責に逢ふと雖、節操撓む事なく、艱難を凌ぎ、終に方今 王政復古の時を待得、貞操節烈可賞事に候。依之星巖存生中の忠志旁へ對し、扶持米貳人分遣之候事。

此の一事以て紅蘭が如何に節操の高かりしかを知るに足るべし。明治十二年三月二十九日病歿す。年七十六。

星巖少壯時代の詩は其の師山本北山等に得る所多し。北山諷園一派の偽唐詩を摺撃して、宋詩を推稱し性靈體を鼓吹せり。雖然北山も亦宋詩の中毒により、格調聲律の淺俗に流るゝものあり。況んや其の末流をや。星巖其の門に出で、更に唐詩の長所を探りて、宋詩の短所を補ひ、徳川時代の作詩始めて中正を得たり。其の詩界に於ける功績亦大なりと云ふべし。

其の詩古雅清奇、渾成圓熟、高趣にして風骨あり。一詩一篇、咄囁終夕、輒ち筆を下す。險韻難題と雖、出すに平穩を以てし、愈鍊愈平、期するに雋永を以てす。而して字々皆剗切、一句一字備に淵源あり、譬喻寄托婉曲深淵にして、世道を補ひ、人心を裨くるもの多し。賴山陽一世を蔑視し、名聲を擅にす。而も詩に於ては則ち星巖を推す。星巖嘗て曰く、「余が名を成すものは子成(山陽)なり。子成が詩を成すものは余功なしとせず。」と、當時の詩人菅茶山、廣瀬淡窓、大窪天民、菊池五山の徒、其の名皆星巖の下に出づ。世呼んで日本の李白と云ひ、推して詩人の冠冕となす。實に偶然にあらざるなり。

妻紅蘭また吟を解す。其の詩命意窈窕、措辭渾厚、諷誦に堪へたるもの多し。又書を中林竹洞に學びて山水花卉を善くす。筆力堅勁、氣韻清高、絶えて匠氣なく、奇才麗筆、鬚眉男子をして後に瞠若たらしむ。人推して近世の女學士と稱せり。

星巖著す所、星巖集二十六卷、附紅蘭小集二卷、星巖絶句刪二卷、星巖遺稿前編九卷、後編五卷、春雷餘響十二卷、額天集一卷(以上刊本)及香巖集、自警篇(未刊本)等あり。

門下の詩人前後千餘人、就中有名なるは、小野湖山、大沼沈山、森春濤、岡本黄石、鈴木松塘、遠山雲如、江馬天江等にして、其の流風餘韻今日に至り、尙綿々として絶えず。我が美濃人士にして玉池吟社に名を列せるもの、柏淵蛙亭、宇野南村、菱田九潮、服部笙岳、箕浦富堂、中村水亭、柏淵旭窓、多賀鏡湖、百々笑堂等あり。彼の白鷗社の諸子の如き、亦皆唱和益を乞へり。(星巖に就きては余別に梁川星巖翁傳の著あり)(星巖集、同遺稿、春雷餘響、額天集、稻津家及梁川家文書、華溪寺過去帳及墓碑)

白鷗社

柴山老山

文政の初年、梁川星巖を初とし、柴山老山、村瀬藤城等相謀り、神田柳溪、金森匏庵、柏淵蛙亭、江馬細香等の同志を糾合して、詩社を創設し、名づけて白鷗社と云ひ、毎月大垣傳馬町實相寺に相會して、詩文を講究せること、既に略記せる所の如し。而して藤城、柳溪、細香の三氏に就きては、賴山陽門下の條に記したれば、以下老山、匏庵及び蛙亭の諸氏に就きて記述する所あるべし。

柴山老山、本姓は菅原、名は栗(琴)、字は氷清、一字は太古、老山は其號、又別に海棠園主と號し、柴山司と稱す。揖斐の人、世々旗本岡田(將監)家の老職たり。天明八年を以て生る。(星巖より長する一歳、藤城より長する三歳、細香より若きこと一歳)

弱冠(文化四年若くは文化五年なるべし)家を辭して江戸に遊び、山本北山の門に入りて、經史詩文を研鑽すること五年、偶々北山の易實に會ひ、やがて郷に歸りて私塾を開き、子弟を聚めて教授す。文化十四年丁丑歲暮、賦せる所の書懷の詩は其の經歷の一端を知るべし。曰く、

(上略)二十辭家去。東西不<sub>レ</sub>緩<sub>レ</sub>席。江戸得<sub>二</sub>先師<sub>一</sub>。投<sub>レ</sub>笈即親矣。五年纔受<sub>レ</sub>業。俄會<sub>二</sub>師易<sub>一</sub>。贊<sub>二</sub>三年心喪<sub>一</sub>。治<sub>レ</sub>任歸<sub>二</sub>窮僻<sub>一</sub>(下略)と、先師は即ち北山を指せるなり。文化十二年乙亥賦して曰く、

諸葛武侯出<sub>二</sub>神廬<sub>一</sub>之日。年二十有八。余亦今年二十八、猶未<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>一小儒<sub>一</sub>。因有<sub>レ</sub>感。作<sub>二</sub>此詩<sub>一</sub>。實文化乙亥冬十月二十一日也。幾箇英雄得<sub>レ</sub>息<sub>レ</sub>肩。 恩深二百太平年。 胸中<sub>レ</sub>略<sub>レ</sub>竟何用。 日暮<sub>レ</sub>閑<sub>レ</sub>窓<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>雨眠。

と、以て彼が胸中の雄志を抑へて、窮境の一寒儒に甘んじたる衷情を知るに足らん。

文政年間、星巖、藤城等と謀りて白鷗社を創設し、同社諸氏と互に相往來して唱和應酬せり。特に星巖とは通家の誼あるを以て、最も深く交を訂せり。

文政六年癸未晩秋(老山、年三十六)、細香其の新居を訪ひ、詩を賦して之に贈る。曰く、

贈<sub>二</sub>菅太古新卜居<sub>一</sub>

十年遊迹在<sub>二</sub>江都<sub>一</sub>。 却掃<sub>二</sub>編廬<sub>一</sub>新卜居。 交際似<sub>レ</sub>潮知<sub>二</sub>進退<sub>一</sub>。 世情如<sub>レ</sub>月察<sub>二</sub>盈虛<sub>一</sub>。 籬邊霜菊猶<sub>レ</sub>棲<sub>レ</sub>蝶。

竹裏寒泉可<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>魚。

不用生涯著<sub>二</sub>管絃<sub>一</sub>。 明窓尙<sub>レ</sub>友<sub>レ</sub>古人書。

(湘夢遺稿)

文政九年丙辰秋、老山、星巖を其の李花村草舎に訪や、星巖詩あり。曰く、

端居書懷示<sub>二</sub>菅太古<sub>一</sub>

絡緯聲乾菊已衰。 西風撼<sub>レ</sub>々入<sub>二</sub>窓帷<sub>一</sub>。

一絲髮<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>鬢<sub>レ</sub>知。

溪<sub>レ</sub>琴<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>酒<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>物。

蹇<sub>レ</sub>予<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>將<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>世。

嗟<sub>レ</sub>爾<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>才<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>時。

千<sub>レ</sub>樹<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>紅<sub>レ</sub>寒<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>見。

以て其交態を知るべし。

老山専ら經術を攻めて吟哦を事とせず。最も周易と春秋を愛して、研覈得る所少からず。其の書懷の詩の一節に云ふ。

周易類<sub>二</sub>玉痴<sub>一</sub>。

春秋有<sub>二</sub>杜癖<sub>一</sub>。

文學選<sub>二</sub>固法<sub>一</sub>。

詩墓陶<sub>二</sub>謝格<sub>一</sub>。

以て其の好尙を知るべし。其の學、蓋し北山に基きて、折衷學を唱へたるべけれど、文献の徵すべきもの無きは遺憾なり。詩は固より其の楮餘なれども、亦見るべきものなしとせず。左に其の二三を示さんか。

冬夜讀書

多謝<sub>二</sub>韓家<sub>一</sub>古短樂。

寒窓寒<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>照<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>明。

百年漸<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>涯<sub>レ</sub>業。

四海惟<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>名。

讀<sub>二</sub>三雅<sub>一</sub>楚辭<sub>二</sub>心尙<sub>レ</sub>感。

讀<sub>二</sub>三來<sub>一</sub>周易<sub>二</sub>意初<sub>レ</sub>平。

耿耿至<sub>レ</sub>曉<sub>レ</sub>眠<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>得。

又是隣<sub>レ</sub>鷄<sub>レ</sub>膺<sub>レ</sub>臍<sub>レ</sub>聲。

山行記事。二首 原稿十首

松間竹裡逕。

行盡地初寬。

畚田稻方熟。

料知近有<sub>レ</sub>村。

數家村原古。

獨木溪橋朽。

老翁眉如<sub>レ</sub>雪。

將<sub>レ</sub>孫<sub>レ</sub>饋<sub>二</sub>南<sub>レ</sub>畝<sub>一</sub>。

春 聞

不下把<sub>二</sub>菱花<sub>一</sub>一。 整<sub>レ</sub>翠<sub>レ</sub>蛾<sub>レ</sub>上。

懶<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>燕語<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>鶯歌<sub>一</sub>。

傍<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>事。

只道春來<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>睡<sub>レ</sub>多。

門人頗る多く、諸藩の子弟の從遊せるもの亦少からず。其の家塾に於ては、題を課して詩を賦せしめ、以て子弟を指導誘掖せり。故を以て門下子弟にして文雅を解し詩を能くするもの亦少からずりき。嘉永五年壬子七月十三日歿す、享年六十五、揖斐町大興寺先塋の次に葬る。墓碑は同寺に在り。室卜部氏子無し。星巖の侄、久太郎を養ひて嗣となせり。(三野風雅、墓碑及過去帳)

金英女史、老山の室、卜部氏、名は菊、字は女華、一字は長生、金英と號し、亦詩を能くし、且畫に巧なり。左に其の詩一二を示さん。

春 夜

微醉捲三簾幕。 春深畫檻東。 溶溶窺<sub>レ</sub>席月。 習習拂<sub>レ</sub>衣風。 閑立花香外。 徐行柳影中。

秋

懶從練<sub>二</sub>詩句<sub>一</sub>。 又欲<sub>レ</sub>廢<sub>二</sub>針紅<sub>一</sub>。 曉 眠醒更覺夜初長。 暎<sub>レ</sub>粧閑對紗窓下。 映出<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>籬秋海棠。

題

麗陽天氣野風溫。 芳艸堤邊滿<sub>二</sub>雨痕<sub>一</sub>。 收<sub>レ</sub>釣漁翁何處去。 酒帶<sub>二</sub>遙認綠楊村<sub>一</sub>。

金森匏庵

詞才の巧夫子に稱ふものあり。宜しく細香、紅蘭の二女史と併せて、濃州の三才女と稱すべし。

金森匏庵、名は樞、字は士機、匏庵は其の號、別に煙漁又は煙波漁人と號せり。大垣の人、寛政十年戊午を以て生る。(星巖より若きこ七歳なり) 匏庵人と爲り沈毅果決にして膽氣あり。業を貫名海屋に受け、詩及書を能くす。又頼山陽に従つて學び且星巖に就きて益を請ひ、經史を涉獵して、略通曉する所あり。山陽嘗て其の請に應じ、煙漁老屋の四字を揮毫して之に與ふ。特に星巖とは師友として交最も深く、星巖が各地に浪遊せる際にも、郵筒の往復終始絶えざりき。白鷗社の大垣に創設せらるゝや、又之に加はりて、同社諸氏と詩酒唱酬せり。嘗て藤城が贈れる書簡の一節のに云ふ。

一、貴詩大分よく成り、陸放翁の具合、佳處も腹へ入り申候様の時時々相見は、此段は大慶仕度。(中略)此の勢ひに今一ト張り込め御骨折被<sub>レ</sub>成、精密に出來候はゞ、適作家と存申候。云々

藤城とは交殊に厚く、屢々唱和益を請ひ、又其の弟秋水とも厚く交を訂せり。

天保十一年庚子、年四十三、研究益々勤めたるを以て眼を患ひ、遂に明を失するに至れり。然れども失明を以て業を廢せず、益其の學を精研し、古人の詩文を暗誦して、琅々口に上す。其の自ら作る所流暢にして風趣多し。左に其の落花十律を抄出すべし。

僕九年來患<sub>レ</sub>眼。一室蕭索。平日不<sub>レ</sub>復得<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>戶庭<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>以銷<sub>二</sub>日子<sub>一</sub>也。閑坐無聊。窓外春禽繞聞<sub>二</sub>三兩三聲<sub>一</sub>耳。今賦<sub>二</sub>得落花十首<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>眼目非<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>能看<sub>一</sub>。然亦思想之所<sub>レ</sub>感聊自遣<sub>レ</sub>興。蓋余今日落魄。略與<sub>二</sub>落花<sub>一</sub>相似。豈可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>歎乎。詩既成。適借<sub>レ</sub>人寫<sub>レ</sub>之。嗚<sub>レ</sub>不平於筆下。不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>獨自聽<sub>一</sub>耳。噫、時已酉(嘉永二年)暮春廿有六日也。(三錄)

滿<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>花<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>春。 一、朝零落<sub>一</sub>、朝塵。 擬<sub>レ</sub>留<sub>二</sub>並蒂<sub>一</sub>難<sub>二</sub>多駐<sub>一</sub>。 欲<sub>レ</sub>養<sub>二</sub>單葩<sub>一</sub>無<sub>二</sub>半句<sub>一</sub>。 悟<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>緜<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>妓。

知<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>隱<sub>レ</sub>淪<sub>レ</sub>人。 送<sub>レ</sub>春<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>添<sub>レ</sub>惆<sub>レ</sub>悵。 不<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>纏<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>身。 悟<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>緜<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>妓。

春<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>關<sub>レ</sub>珊<sub>レ</sub>轉<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>憐。 何<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>吟<sub>レ</sub>欄<sub>レ</sub>前。 冷<sub>レ</sub>朝<sub>レ</sub>飛<sub>レ</sub>絮<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>斤。 深<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>翻<sub>レ</sub>紅<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>川。 驚<sub>レ</sub>坐<sub>二</sub>綠<sub>レ</sub>陰<sub>一</sub>啼<sub>二</sub>水<sub>レ</sub>畫<sub>一</sub>。

翁<sub>レ</sub>眠<sub>二</sub>窓<sub>レ</sub>戶<sub>一</sub>遺<sub>二</sub>殘<sub>レ</sub>年<sub>一</sub>。 豈<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>昨<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>雨。 斷<sub>二</sub>送<sub>レ</sub>群<sub>レ</sub>芳<sub>一</sub>更<sub>レ</sub>惘<sub>レ</sub>然。 深<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>翻<sub>レ</sub>紅<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>川。

紅<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>綠<sub>レ</sub>肥<sub>レ</sub>禽<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>幽。 村<sub>レ</sub>村<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>前<sub>レ</sub>游<sub>一</sub>。 活<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>漂<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>蘋<sub>レ</sub>葉<sub>一</sub>。 郭<sub>レ</sub>索<sub>レ</sub>爬<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>回<sub>二</sub>三<sub>レ</sub>葦<sub>レ</sub>洲<sub>一</sub>。 今<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>春<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>成。

二<sub>レ</sub>毛<sub>レ</sub>添<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>二<sub>レ</sub>毛<sub>レ</sub>稠<sub>一</sub>。 明<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>賞<sub>レ</sub>花<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>笑。 花<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>嫩<sub>レ</sub>紅<sub>レ</sub>香<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>頭。

以て其の詞藻の一斑を知るべし。

嘉永五年壬子、年五十四、壽藏碑を大垣松濤寺に建て、藤城に囑して文を撰せしむ。碑は現に同寺に在り。文久二年八月歿す。享年六十五。諡して學譽致道居士と云ふ。子澹庵(通稱金四郎)家を嗣ぎ、當代毅庵氏に至れり。(遺稿、壽藏碑、金森家文書)

柏淵蛙亭、名は嘉一、字は純甫、脩齋、又は蛙亭と號す。通稱藤太夫、多藝郡(今の養老郡)高田の人、

柏淵蛙亭



祖、名は石門、擊劍を以て名あり。父名は時憲、字は聖卿、號は貫齋、才藏と稱す。先業を傳へ、射御刀槍に通ず。人と爲り恭謙、學を好み、少時、京に遊び、學を齋靜齋に受け、又書法を霞樵山人に受く、而して書は最楷隸に長せり。天明五年四月十七日を以て蛙亭を生む。(星巖より長する四歳、老山より長する三歳なり)

蛙亭人と爲り風流閑雅、性甚だ酒を嗜む。然れども能く家法を守りて、質素を尙び奢侈を戒め、事を勉めて懈ること無し。初め北山幽桂を師とし、後馬淵嵐山、秦滄浪に従ひて經史を修め、詩を賦し文を屬す。詩は古體を善くし、文は叙事に長ず。門に入りて教を受くるもの頗る多し。又國籍を小原君雄、鬼島廣陰に學びて歌文を作る。傍ら擊劍、蹴鞠、彈琴、謠曲の諸伎に涉れり。

文化十四年丁丑の夏、養老に遊び、溪間に蛙を捕へて之を園池に放ち、自ら蛙亭の記を作り、取りて以て號となせり。後又詩を作りて以て其事を記す。溪蛙歌是なり。曰く、

溪蛙歌

啼、花、鶯、吟、水、蛙、絶、妙、好、詩、古、嘗、詩、驚、則、其、調、高、以、巧、禽、中、何、物、更、有、加、蛙、也、何、爲、可、得、匹、  
聒、聒、音、常、厭、其、譯、驚、蛙、雖、稱、殊、可、怪、古、人、之、言、似、有、差、杖、策、偶、遊、老、泉、隄、忽、聽、溪、蛙、一、驚、三、舌、妙、  
坐、疑、羽、客、弄、仙、笙、或、似、幽、人、發、清、嘯、始、知、古、人、言、信、然、唯、爲、可、以、稱、同、調、一、捕、來、放、之、我、池、汀、  
清、風、朗、月、澄、耳、聽、孔、珪、之、後、誰、能、愛、東、方、只、有、一、蛙、亭、笑、以、三、田、蛙、一、當、三、鼓、吹、不、知、妙、韻、有、三、響、一、  
溪、蛙、田、蛙、種、不、別、何、由、其、聲、太、殊、絕、水、土、之、性、不、三、相、同、從、三、其、清、濁、一、見、三、優、劣、微、微、小、蟲、有、如、斯、  
伊、人、也、復、不、可、混、詞、人、苟、欲、三、其、言、高、處、已、必、要、居、三、清、潔、(三野風雅)

此間屢出で、京攝に遊び、頼山陽、貫名海屋、篠崎小竹等知名の文士に親交せり。梁川星巖とは同郷の故を以て夙に親交を訂し、又高須の川内老泉、今尾の渡邊橋堂と吟交を締べり。文政中、星巖を始め、藤城、老山、柳溪、細香等と社を結びて白鷗社と號し、毎に大垣に會し、或は互に相往來して詩文を講習せり。同九年、前記白鷗社諸同人、蛙亭の西山爽氣樓に會して詩酒徵逐せること、既に記する所の如し。(江馬細香の條參照) 柳溪嘗て其の爽氣樓に題して云ふ。

題柏純甫西山爽氣樓

純甫詩酒徒、天姿自蕭散、釀、酒、日、沈、醉、力、田、年、沃、灌、築、樓、面、西、山、一、  
峰、勢、曾、欲、裂、爽、氣、手、堪、玩、設、言、王、子、獻、風、流、晉、代、冠、空、憶、三、泉、石、思、一、  
豈、若、吾、純、甫、生、不、出、三、里、閉、恣、意、領、三、清、閑、晏、眠、不、知、旦、客、至、始、欠、伸、翻、被、三、響、笏、  
把、杯、霞、彩、來、落、筆、雲、錦、爛、試、問、文、字、飲、孰、三、與、簿、書、案、一、君、言、此、語、妙、散、帶、不、散、軒、  
出、處、固、殊、途、得、失、安、須、算、萬、事、付、三、醉、談、縹、盡、當、三、更、喚、一、好、在、此、西、山、欲、三、我、書、三、壁、畔、  
以、て、蛙、亭、の、爲、人、を、知、る、に、足、ら、ん、縹、盡、當、三、更、喚、一、好、在、此、西、山、吾、詩、真、可、堪、(南宮詩鈔)

天保三年壬辰秋暮、養老山中に遊びて病を養ひ、短古三編を賦して云ふ。

壬辰秋暮養老山中雜吟三首

飯、罷、試、三、行、藥、扶、第、步、遲、遲、淡、行、怯、三、水、冷、山、行、困、三、石、欹、病、來、乏、三、勝、具、一、  
老、木、低、欲、偃、嗟、我、考、所、陰、幽、石、古、生、三、苔、嗟、我、考、所、枕、溪、回、水、潺、潺、恐、被、三、山、靈、嘯、一、  
松、聲、耳、界、清、煙、霞、懶、三、幽、意、山、中、兩、日、遊、無、乃、三、豎、賜、一、此、去、歸、三、吾、廬、一、山、在、雲、濤、濤、  
依、前、多、三、塵、累、一、  
超、わ、て、天、保、六、年、乙、未、閏、七、月、二、十、五、日、歿、す。白、鷗、社、同、人、中、最、も、蚤、く、世、を、去、れ、り。諸、交、友、訃、を、聞、き、て、皆、之、を、悼

惜す。享年五十一。子樞園、名は重寧、字は士安、通稱靜夫、學問宏博、最も國典に通じ、名遠邇に著る。孫重則(通稱祐次郎)を経て、當代雷氏に至れり。(三野風雅、玉池吟社詩、及田中長秋氏の調査に據る)以上の外白鷗社に加盟せるものに服部笙岳、冢原篁圃、石原東堤、澤井樵歌、日比野草川等あり。服部笙岳、名は參、字は生萬、通稱庄六、多藝郡高田の人、星巖の玉池吟社に參し、後年星巖集を校訂せり。日比野草川、名は孔武、字は士力、通稱松二郎、同じく高田の人、畫家鶴翁の子なり。石原東堤、名は和、字は子周、安八郡下宿の人、父桂園、(名は亨、字は龍卿、文政中卒す)醫業を業とす、東堤繼ぎて醫業を守る、著す所、讀左氏便覽二卷、古今詩語粹十卷あり。澤井樵歌、名は慎、字は慎父、通稱儀左衛門、安八郡墨俣の人、當時知名の文人たり。冢原篁圃、名は温、字は如玉、また子温、別號青牛齋、武儀郡關の人、祖阜鶴(名は光和、字は子中)父汝水(名は雅章、字は士達)弟蘇堤(名は純、字は君粹)並に詩を好めり。當時村瀬藤城の作る所白鷗社集會圖記一篇あり。左に之を録せんか。

白鷗社集會圖記

馬(江馬)細香要ニ雲林山人、製ニ白鷗社集會圖。圖成。又徵レ余記レ之。蓋豎幅、森列十有一人。居レ右者六人。其服古朴。其貌温偉、左顧而言。如下有レ所ニ計畫一將上レ申ニ約束一者爲ニ菅太古(梁山老山)。風神瀟灑。肆然而坐、髮黑如漆。雙眸炯々。而如下與ニ太古一相應答上者爲ニ梁伯免(星巖)。長面而折、簡靜如無レ競者。爲ニ服生萬(笙岳)。頤而豐。在三人背後。如下有レ所ニ觀觀一者上且喜揚眉者、爲ニ冢士玉(篁圃)。疎眉明目、反レ臂高視、如雖ニ和同一而無中阿附者爲ニ石子周(東堤)。右ニ研墨。前ニ書冊。丰容太恭。如ニ詳詳而談一者爲ニ源士錦(村瀬藤城)與ニ士錦ニ對者三人。昂首而言。如ニ相詰問一者爲ニ澤慎父(樵歌)。左袖支、頤、右手與ニ左手一支持、立ニ摺扇于膝上。如ニ傾聽尋思一者爲ニ日士力(日比野草川)。開レ卷注レ目、拳手打レ膝、如レ有レ所ニ發悟一者、爲ニ柏純甫(蛙亭)。並ニ士錦ニ少遠而坐者兩女子。不レ裝ニ珠翠一、而有ニ天然丰韻一者、爲ニ梁氏室張月華(紅蘭)。爲ニ女學士馬細香一。而細香較清瘦矣。細香求ニ此圖一、要ニ極肖ニ其形一、而山人亦爲レ之苦レ思盡レ心。太古而下七人、皆袴摺短掛。唯子周不ニ袴摺一。伯免被ニ道衣一。亦各描ニ寫本色一也云々。(藤城詩文集)

以て同社諸子の面目を窺ふべし。(此の圖江馬家に傳來せしが往年の水災に流失せり。卷頭掲ぐるものは原圖の模本なり)文政の初、津藩の津坂拙修、流落して美濃に在り。因て同じく此の詩社に列して相唱酬せり。拙修、姓は菅原、名は邦達、字は有功。津藩の文學津坂東陽(名は孝緯、字は君裕、絶句類選、夜航詩話等の著者)の子、人と爲り豪邁不羈、少時四方に周遊し、詩を以て顯る。星巖會て之に詩を贈りて、「東阿學世稱詩虎」と云へり。拙修また廣く美濃の文人と交り、游交殆んど國に遍し。遂に講經讀史の暇を以て國內の詩を採輯し、編して十卷となし、名づけて三野風雅といふ。西川緯川(名は親、字は子帆、通稱文十郎、後善四郎と改む。本巢郡芝原北方の人、詩を山田芝岡に學ぶ、父兄並に詩を好くす)校字の任に當り、文政四年辛巳秋九月刊行せり。録する所、人凡そ二百名、詩凡そ一千首、美濃の詩網羅幾ど盡せりと云ふべく、又以て美濃詞壇の盛況を窺ふに足らむ。

四、大垣藩文教の興隆

大垣藩には前期既に守屋峨眉の聘せらるゝあり、續いて其の子東陽の出づるありて、文化を啓發し、風雅を維持せり。然れども當時未だ藩校の設立を見るに至らざりき。

天保八年(一に十一年とす)藩主泰嶽公戸田氏庸、儒學を尊崇し、始めて學校を設立し、名づけて致道館と云ひ、後敬教室と改む。家宰戸田睡翁主唱し、藩士岡田主齡及び菱田毅齋等與つて力あり。此他儒員には

水野陸沈、井田澹泊等あり。諸臣子弟をして皆學に入らしむ。授くる所、經史、文章、國史の類にして、先づ四書五經の句讀より初め、古文、文選等を習熟すれば、小學、近思錄等を講じ、次て四書を講習せしめ、傍ら歴史の輪講を爲し、又月次課題を定めて詩文を作案せしむ。毎月小試験を施し、歳末大試験を行ふ。春秋二季には釋奠の式を行ひ、藩主親ら之を拜し、講官以下子弟次て拜禮す。學校の制此に於て略々整備し、人材彬々として輩出するに至れり。(日本教育史資料に據る)

戸田睡翁

戸田睡翁、名は五郎左衛門、號は嚴齋、別に義竹、楓軒、氷壺の號あり、晩に睡翁又は醉翁と號す。大垣侯の支族にして藩の老職たり。學を好み詩を能くす。藩校の成れる、一に其の熱心主唱せしに因る。嘉永三年歳暮致仕し、隱居して風流を樂む。其書室を名づけて一笑茶樓と云ふ。安政四年四月卒す。壽六十七。

岡田主齡

岡田主齡(字、號、未詳)は彦根藩の浪士なり。天保中大垣に來り、自宅にて藩の子弟を教授す。後藩士樋口五郎右衛門と謀り、清水町に於て協力教導に従事す。藩學の創設に與り、擧げられて儒員となる。學派は朱子學なりしと云ふ。歿年不詳、子元太郎家を嗣ぐ。(一柳芳洲翁の談に據る)

菱田毅齋

菱田毅齋、名は重明、字は伯鷹、通稱清次、毅齋は其號、大垣久瀬川の人、父を李卿と云ふ。家世々農を業とし、傍ら陶器を鬻ぐ。毅齋、天明四年を以て生る。幼より孝謹、學を好む。嘗て郷友と謀り、合田恒齋(第二章、創始期敬義學派の條参照)を京師より招請し、館して就きて學ぶ。既にして恒齋逝く。出で、京に遊び、皆川淇園の門に入り、刻苦勉勵、遍く經史に通ず。淇園大に人を得たるを喜べり。俄に報あり。曰く「父李卿病む」と。乃ち程を兼ねて家に歸り湯藥に侍す。而して父遂に歿せり。服終りて後、家産を弟單厚に傳へ、別に家を構へて私塾を開き、(文政の初)徒を集めて教授す。從學者日に進む。後藤松陰の如き亦來りて門に入れり。

天保中藩侯の學校を創建するや、毅齋與つて功あり。擧げられて助教となり、後侍講に擢でられ、俸祿を賜ふ。同十四年夏四月、氏正侯の駕に扈して日光廟に詣づ。翌十五年侯命を受けて本藩系譜を撰し褒賞を蒙る。

毅齋早く母を喪ひ、後母、年老いて宿疾あり。兩目を喪ふ。弟單厚と夙夜侍養至らざる所なし。偶々出で、歸期例に違へば、母輒ち曰く「清次佛歸る何ぞ晚きや」と。事聞す。藩侯、兄弟に賜ふに蠶綿を以てす。侯嘗て其宅に臨みて挿秧を觀る。晩年老態を以て骸骨を乞ふや、侯允許せず。優旨、隨意進講を命じ、且其の實學篤行を賞し物を賜ふ。前後章服及び諸物の賜を拜する勝けて計ふべからず。蓋し農商を以て士班に列し、諸子雙刀を佩ぶを許されしもの、當時異數となす。安政四年丁巳二月十三日病みて歿す。享年七十四、久瀬川徳圓寺先塋に葬る。碑面題して菱田毅齋先生之墓と云ふ。碑文は後藤松陰の撰する所、現に同寺に存せり。最近大垣墓地に改葬す。睡翁の弔詩に曰く、

七十年來學二齋知。

問、經論、史、是善師。

光風霽月文場夢。

千古毅然神在斯。

毅齋學、洛閩を宗とし、最も四書、小學、近思錄を精研し、喜びて通鑑綱目を讀む。晩年毎夜誦讀の聲、妻婢紡績、兒孫嬉戯の間に琅々然たり。卒に以て常となす。性恬澹、他の嗜好なし。破几、弊氈、粗墨惡毫、終身未だ嘗て衣食の精粗を言はず。一弊袴數十年、人或は以て笑を爲すも晏如たり。其の生徒に授くるや、深切懇到、浮華を以てせず、多く人材を成就せり。著理氣說、勸善錄、詩文稿若干編あり。

り。詩は元より其の緒餘に過ぎず。左に一二を示さんか。

竹軒遊<sup>レ</sup>暑 某大夫別荘

好忘炎日苦。

閑坐伴<sup>二</sup>清吟<sup>一</sup>。

泉激將<sup>レ</sup>灑<sup>レ</sup>席。

竹涼欲<sup>レ</sup>濕<sup>レ</sup>襟。

數枝浮<sup>レ</sup>水果。

一曲隔<sup>レ</sup>簾琴。

恰有<sup>二</sup>此君在<sup>一</sup>。

和來<sup>二</sup>曼玉音<sup>一</sup>。

春日郊行

柴門晝掩寂無人。

翠竹香生雨後天。

知是前村去<sup>レ</sup>賒<sup>レ</sup>酒。

小航繫在<sup>二</sup>三岸花邊<sup>一</sup>。

配松野氏、七男一女を生む。長男旗太郎(格齋)、次男貞、四男孝、皆先ちて歿す。三男重光家を嗣ぐ。五

男守敬、赤阪竹中氏の嗣となる。六男重禧(海鷗)別に家を構ふ。七男庫、出で、族要助氏を嗣ぐ、女は族

清三郎氏に適けり。(日本教育史資料、三野風雅、墓碑銘)

菱田格齋、名は旗、字は成祥、通稱旗太郎、格齋は其の號、又別に九瀬と號す。毅齋の長子なり。蚤

く家庭に學び、嶄然頭角を露し、神童の目あり。年十五浪華に赴き、後藤松陰の塾に寓す。篠崎小竹其

詩を見、大に之を奇として曰く、「濃州何ぞ文才を出すの多きや」と。年十八、江戸に遊び、梁川星巖の

門に入る。星巖甚だ之を愛重す。一時詩名藝苑に喧傳せり。

參州道中

腰間一劍古。

頭上萬山重。

又繼<sup>二</sup>箕裘業<sup>一</sup>。

遙辭<sup>二</sup>父母邦<sup>一</sup>。

暗愁生<sup>二</sup>夕日<sup>一</sup>。

孤淚落<sup>二</sup>昏鐘<sup>一</sup>。

老僕爲<sup>レ</sup>相慰。

明朝看<sup>二</sup>富峰<sup>一</sup>。

是れ十八歳江戸に赴く途上の作なり。語々老成、已に作家の域に入れるに非ずや。

伊香保山客舎、夜清不<sup>レ</sup>寐。偶作<sup>二</sup>此詩<sup>一</sup>

滿天風露月如<sup>レ</sup>霜。

長袂短衣轉憶<sup>レ</sup>鄉。

孤笛吹殘通夜夢。

急碁擲斷遠人腸。

數聲寒磬猿呼<sup>レ</sup>侶。

一杵鐘鳴雁亂<sup>レ</sup>行。

惆悵故園看不<sup>レ</sup>見。

峽雲關樹望茫茫。

以て其才藻の一端を知るべし。惜しい哉天之に年を假さず。弘化三年三月病を以て歿す。年二十六。(海

鷗に就きては項を改めて更に記する所あるべし)(小原鐵心地下十二友詩、玉池吟社詩及墓碑)

水野陸沈、名は民興、陸沈は其の號、別に訥齋と號す。大垣藩士、天明三年を以て生る。(毅齋より長ず

る一歳)少にして司徒の椽となり、多年秋官たり。博く經史百家の書に涉り、兼ねて算數(關流和算)に長

ず。藩校致道館の創立せらるゝや、擧げられて講官となる。蓋戸田睡翁の推擧に因るものゝ如し。嘗て

詩を賦して云ふ。

致道館

右文時節講堂開。

袖<sup>レ</sup>卷群兒犯<sup>レ</sup>曉來。

衰老幸從<sup>二</sup>溫習事<sup>一</sup>。

庸才特耻育英才。

嘉永二年歲暮の詩に云ふ。

辭<sup>二</sup>去秋官一<sup>升</sup>講堂<sup>一</sup>。

閱<sup>レ</sup>書入<sup>レ</sup>髮髮爲<sup>レ</sup>霜。

君恩山積何時報。

馬齒愈加言愈狂。

蓋其の講官に擧げられたるは天保末年なりしなるべし。後擢でられて藩主の侍講となり、又命を受けて

侯の書庫を管掌す。曾て(弘化四年)庫中に秘藏せられし筆疇一卷を謄寫して之を公にせり。筆疇後序に云

ふ。

余掌<sup>二</sup>三公之書庫<sup>一</sup>。

每秋曬<sup>レ</sup>書。

偶見<sup>二</sup>此冊一<sup>讀</sup>之。

處<sup>レ</sup>已接<sup>レ</sup>人之道。

簡而得<sup>レ</sup>要。

與<sup>二</sup>余意一<sup>合</sup>焉。云々

是なり。其の交遊する所、戸田睡翁を初め、菱田毅齋、井田澹泊、小原鐵心、江馬細香等あり。殊に毅

齋とは同業同官、且年齒又相近きを以て最も親しく交れり。

水野陸沈

陸沈、尊王愛國の念厚く、最も頼山陽の日本外史並に山陽の著書を受讀し、門下諸子に勤王の精神を鼓吹せり。門下名ある者少からざれど、故安藤就高(通稱行藏、大藏省租税頭となり、從五位に叙す。大日本人名辭書に出づ)の如き其の最たり。

著す所、二倫輕重論一卷、四書度量考一卷、日本外史附錄一卷、陸沈遺稿二卷等あり。但し何れも未だ上本せず。寫本にて世に流布せり。其の本色は經史に在りて、詞章の如きは其緒餘に過ぎず。遺稿は姪雲谷任齋(兵藤弘之の輯する所、弘化二年(年六十二)より嘉永七年(歿年)に至る十年間の作、詩三百六十首を錄せり。其の詩、胸臆を直叙して、粉飾を事とせず。或は未だ銑鍊を経ざるものあり。左に其の二三を抄すべし。)

乙巳七月廿七日悼三末女

此夕是何夕。 秋風急飄零。 手脚爲之風。 心身頓不靈。 知汝柔弱質。 雁受二十六齡。

一雖爲三人婦。 因病永歸寧。 彼遺三八歲男。 孝養來趨一庭。 常信三浮屠教。 寤寐厭三世塵。

人世夢中夢。 悟得如浮萍。 嗟予過二十。 未如汝獨醒。 憂苦塵埃裡。 終日似狂蜻。

於今悔難及。 茫然望三宵冥。

東三細香女史

階前無三尺地。 細竹欲裁羅。 願借三羅人手。 壁間描三數字。

海防

遠望三夷船一人似狂。 兵勢三奔命一中先傷。 茫茫大海無三他策。 去則備三之來則防。

和二竹亭上人雨中落花作

藩校擴張

雨聲寂寔殺三風光。

遺白殘紅塵三北邙。

窺窺花神去三何處。

倚欄更檢反魂香。

嘉永七年(即ち安政元年)甲寅三月十六日病歿す。享年七十二、大垣藤江の廻向庵に葬る。男山平(名は民鐵、父にも勝れる數學の大家にして、我が國關流の大家谷岡齋が敬仰せし程なり。慶應三年丁卯三月十五日病歿、享年五十九)家を嗣げり。(陸沈先生遺稿、雲谷任齋遺書、及河合三郎氏の調査せられし所に據る)

藩學敬教室は天保八年創設の後漸次隆昌に赴きしが、大願、公、戸田氏彬の世に至り、(安政末年)一層規模を大にし、講堂、學寮を増築し、特に新に聖廟を建造し、(萬延元年十月起工、翌文久元年九月成る)泰嶽公遺墨の聖像を安置し、公の書鎌足公普公を配祀し、公が自筆の扁額を掲げて大成殿と云ふ。又總督、督學、參謀、學監、講官、準講官、句讀師、副句讀師等の職制を定め、他國子弟の入學をも許せり。是に至り文物大に備る。

小原鐵心

當時此が規畫を爲せるは、藩の執政小原鐵心、參政高岡夢堂等にして、井田澹泊、同梧窓、井上果齋、野村藤陰、岩瀬尙庵等與つて力あり。ついで文武の二校を置き、生徒は先づ文學校に入らしめ、四年以上の勤學を経たるものは武學校に入るを許し、制度茲に一新せり。後文學校を南北に分校し、南校にては皇漢學及習字を教へ、北校にては洋學を兼ね教ふ。生徒數五百名、斯くて維新後廢藩に及び、藩學亦廢せられたり。以下藩學功勞者並に藩儒に就きて記する所あるべし。

小原鐵心、名は忠寬、字は栗卿、通稱二兵衛、鐵心は其の號なり。晩年は水醉逸と號す。父を忠行と曰ひ、母は上田氏、食祿七百五十石、藩の名族たり。二男四女あり。鐵心は長男にして文化十四年十一月を以て生る。天保十三年職祿を襲ぎ、兼ねて會計の事を管す。時に年三十六。居ること二年、藩主學

政を振興せんと欲し、君特に擧げられて其の事を擔任す。

嘉永七年浦賀港警あり。鐵心藩命を受け士卒を率ひ、往きて戸田伊豆守を援け、變に備ふ、是より先國用多端飢饉荐に至り、上下窮乏す。鐵心爲に藩主に建議し、税法を改め、冗費を省き、以て財政を釐革す。數年ならずして倉廩充實し、民凍餒を免れたり。安政二年三百五十石を加賜し其功を賞せらる。固辭すれども聽されず。乃ち毎歲其の二百五十石を納めて公費に充つ。文久三年秋、藩主に從ひ京師を守らる。元治元年長州藩士の闕を犯すや、子忠迪、高岡夢堂等と急に擊て之を退く。是冬武田耕雲齋等の京に上るや歸藩して警むる所あり。當時國家益多事にして、人民窮困亦甚し。因て復献策し、兵食を調へ武備を嚴にす。慶應三年藩主再び百石を加賜せしが、復固く之を辭せり。

明治元年大政古に復するや、博く人材を徵し、國事に參せしむ。鐵心選ばれて京に入り王事に執筆し、尋て參與に任せらる。時に正月三日なり。會々伏見の事起り、藩兵徳川内府の先驅をなす。而して子忠迪其中に在り。鐵心大に驚き、即時使を馳せて忠迪を諭し、内府を直諫せしめんとす。然れども事終に及ばざりき。是に於て藩主の順逆を誤らんことを恐れ、朝に請ひて大垣に歸り、説くに大義を以てし、藩主をして上京罪を待たしむ。朝廷即ち藩主に命じ、東山道の先鋒となし、功を建て、自ら贖はしむ。當時諸藩向背を誤るもの少しとせず。而して大垣藩の翻然反正、王事に勤めしもの鐵心の功最も巨多なりとす。

是月十七日會計官判事を兼任し、從五位に叙す。五月江戸府判事に兼任す。病を以て固く之を辭して允され、特に鎧一具を賜ひて在職中の功を賞せらる。明年夏藩兵の戦功を賞し、祿三萬石を藩主に賜ふ。

藩主乃ち千五百石を頒ち與へ、其輔弼の功に酬ひぬ。版籍奉還の後大垣藩大參事に任せられ、四年正月本保縣權知事に轉任し、未だ任に赴かずして免せられ、大垣藩廳出仕に轉ず。五年四月十五日病に罹りて卒す。享年五十六。城南全昌寺に葬る。三女あり。姪忠迪を養ひて嗣となし、長女に配せり。

鐵心人と爲り磊落奇偉、夙に文學を好み、贊を齋藤拙堂に執り、能く經濟に長ず。特に學館の總督として、文教の振興に意を用ひ、人材の養成に力を盡せり。嘗て(安政中なるべし)小寺翠雨(名は弘、字は士毅、通稱常之助、嘉永五年藩命を受けて江戸に遊學し蘭學を修む)に與へたる書翰に云ふ。

當地學館一件は、足下段々丹誠之處、此度大體之學則相立、已に廿日より相始り申候。右に付而、種々異論も有之、高岡(夢堂)にも種々内評いたし候、就而は足下の不在を遺憾に存候事候。委細之書面等今便度久屋に遣し候。御内々御一閱に預り度存候。只々世間に而は文武一致ならぬ。文次に武之御主意に斟酌候には歎息いたし候。因て此節は武藝場も色々斟酌中に御座候。云々

以て鐵心がいかに藩士の教育に腐心せしかを知るべし。

鐵心亦風流文雅を好み、詩文を善くし、傍ら書畫を作る。かの江馬細香を推して社長となし、宇野南村、松倉瓦鷄、鳥井研山、溪毛芥等と咬菜社を組織したるが如き其の一例なり。爾後大垣の地、學才多能の士を輩出せしめ、地方文事の一中心となりしもの、其の餘澤によるもの多きを知らざるべからず。性又酒を嗜み量最も大、常に梅花を愛し、老梅數百株を城北の別墅無何有莊に移し、亭榭を花間に築き、暇あれば客を會して詩を賦し文を論じ、豪飲以て樂しむ。故を以て當時亦文人騷客の渴仰する所たり。著す所十數種、經世時務に關するものあり、兵事に關するものあり。其の文事に關するものには鐵心遺稿、鐵心居小稿、亦奇錄、飲夢篇、地下十二友詩、鐵心文稿、醉不記等あり。左に其の詩二三を示さん。

朝廷更下三特命。賜三臣寬一以三金銀一雙。感泣之餘。悉書三二十八字。

天賜一雙金踏履。

恩光長照子孫榮。

用三之兵馬。非三吾事。

緩轡尋花答太平。

梅園絕句

問我梅花妙。

玄玄不可言。

百端公事了。

孤坐月黃昏。

十年征役若爲情。

七八三都一五帝京。

已矣關山殘月裡。

白三人髮髮。是鷄聲。

商榷在手命三機先。

巨利流來城可連。

千古迂夫膏砥子。

百方搜得十文錢。

明治二十年一月、特に正五位を追贈せられ、後又其の遺勳を褒し、子適に男爵を授けられたり。(鐵心遺稿、墓碑銘、中村規一氏著小原鐵心傳等)

高岡夢堂、名は清宣、字は哲夫、夢堂又は西溝と號す。通稱三郎兵衛、筒見宗直の子、高岡清信に養はれ、因て其の姓を冒す。天保七年家を嗣ぎ、祿二百石を襲ひ、馬廻に班す。安政三年百石を加賜せらる。元治元年伏見の役、軍を督して之に赴く。慶應二年長州の役亦軍の帥となりて功あり。又百石を賜ふ。明治元年奥羽征討の舉復藩兵を督し、之に赴きて令名を馳す。明年功を以て六百石を賜ふ。合して千石なり。七月大垣藩大參事に任じ、十月十一日病歿す。享年五十三、城南全昌寺に葬る。

夢堂人と爲り廉直、白哲多髯、風采有り。夙に學を好み、保岡嶺南(川越藩士)に就きて孫子を受け、其の蘊奥を究む。鐵心が藩學館の總督たるや、其の督學として學政に參署し、教師を聘し、或は學制を改め、施設見るべきもの少からず。性詩賦を喜み、鐵心及び鳥井研山、松倉瓦鷄等と友とし善し。詩酒徵逐、時に時事を論し、又風月を談す、率ね虛日無し。嘗て東征奥の白河に抵り、戰纒に罷むの時、詩を

高岡夢堂

賦し毫を揮ふ。

人留後名死。

我與三土魂同。

霖雨何時霽。

白川流血紅。

(常葉神社什物)

賊忽ち床下に起る。藩兵起て其の首を斬り、血迸つて紙に濺ぐ。其の襟度想ふべきなり。明治四十二年特旨を以て正五位を追贈せらる。(野村藤陰撰夢堂高岡君行述、樂城會誌)

井田澹泊

井田澹泊、名は均、字は晁父、一字は藤卿、通稱徹助、澹泊は其の號なり。初め家學を傳へて朱子學を唱ふ。後菱田毅齋の門に入り、又江戸に出で、佐藤一齋及び龜田鵬齋に師事し、折衷學を主張するに至れり。嘉永三年私塾を開き、名づけて澹泊舎といひ、徒を集めて教授す。又擧げられて藩學館の講官となり、薰陶の事に従ふ。(蓋講官となりしは弘化嘉永前後なるべし)

澹泊最も易理に精しく、又能く論語に通ず。嘗て易象を以て論語を解し、研精倦まず、殆んど寢食を廢し、人に對して寒暄を叙べざるに至る。遂に論語經綸二十卷を著し、久しきを積んで成る。嘉永五年初夏其の書を携へて鎮西に遊ぶ。水野陸沈送るに「篤志勝於少壯人」の語を以てす。小原鐵心亦詩を賦して行を壯にせり。遂に西海に抵り、廣瀬淡窓、草場珮川等の門を叩き、示すに其の書を以てす。二子其の篤學精思に感じ、序跋を書して之に與へき。後年齋藤拙堂、土井磬牙の二子亦其の書を見、寄するに序を以てせり。

慶應二年丙寅正月二十三日病歿す。藤江禪桂寺に葬る。諡して澹泊齋宗質居士と云ふ。門人相謀り碑を建て題して唱學井田先生之墓といふ。碑は現に同寺に存せり。子讓家を繼ぐ。著す所、論語經綸の外、忠經發蒙あり。共に刊行せり。

澹泊人と爲り謙虛冲退、力を研經に專にして、曾て時俗に倣ふて詩を賦し文を作らず。故に入或は之を非議するものあり。若し夫れ論語經綸の一書に至つては、畢生心血の注ぐ所、説悉く創新に出で、周密精微、前人を踏襲せず。義、時に通せざる所無きに非ずと雖、抑々篤信好學の士と謂はざるべからず。自序に曰く。

(上略)予性至愚魯鈍。勉讀三論語。有年三于茲矣。一旦恍然如有自得焉者。始取二於易象。以爲三之解。微三諸六經傳記。旁探三諸注有據者。斷以三本文。篇篇循序。章章班次。斐然成章。粲然成經。循循乎變化不窮。猶三易之立象盡意也。積歲之後遂成三二十卷。卷各一篇。名曰三論語經綸。其意謂論語之書悉觀三法於河洛。察三象於易道。以闡三六經之蘊旨。以明三倫之要道。而論語爲三之經綸一矣。(下略)

但安政六年己未學而及び爲政の二篇を上梓せるのみにして、以下續刊するに至らず。一片の鱗甲遂に全龍を知る能はざるは實に惜しむべきなり。(日本教育史資料、論語經綸、墓碑及過去帳)

井田雷堂

井田雷堂、名は讓、字は子載、雷堂は其の號、又別に梧窓と號す、初名は五藏。澹泊の子にして、天保九年を以て生る。嘉永六年津藩士井荻牙に就きて學を受く。業成りて歸藩し、學館の儒官に擧げらる。維新の後徵されて軍務官判事試補となり、明治二年但馬國生野人民の動搖を鎮撫し、同三年十月生野縣知事、從五位に叙せらる。同四年正月大藏大丞に任ず。同五年十一月總領事に任じ、清國上海に在勤し、後澳洪國、瑞西國、西班牙、葡萄牙等の公使に歴任し、陸軍中將元老院議官を經、二十二年十一月特旨を以て華族に列せられ、男爵、正三位に叙せらる。同月廿六日病みて歿す。享年五十六、小石川傳通院に葬る。子磐楠、嗣ぐ。現に陸軍士官學校教官砲兵大尉たり。(日本教育史資料、大日本人名詳書等)

井上果齋

井上果齋、名は直、字は義方、通稱莊次郎、果齋は其の號なり。文政十一年を以て生る。幼にして學を好み、嶄然頭角を見す。十七歳にして藩校の句讀師となり、尋いで助教に任ず。嘉永三年暇を乞ひて東遊し、安積良齋の門に入り、専ら經義を講じ、夙夜刻苦す。五年春、勉強過度を以て病を得、郷に歸る。數月にして病漸く癒え、儒官に任ず。安政四年郡宰に任じ、兼ねて學校を管理す。萬延元年藩主の大政殿を創建するや、命を受けて工事を管す、翌文久元年土木工竣り、物を賜ひて勞を賞せらる。二年度支を掌り、三年文武館の學監に兼任す。明治元年十二月上旬上京して、藩の公議人に任じ、參政に準ず。二年春病を得、荏苒月餘、遂に起たず。享年四十二、淺草眞念寺に葬る。配宮崎氏三男三女を擧ぐ、長繁彌、教導團を出で軍曹に任ず。早く歿す。三男徳四郎後を承く。

果齋人と爲り峭直、果斷に富む。身を奉ずる節儉、其の郡宰と爲るや、固く請調を絶ち、公平以て吏民を監す。故に民冤枉なし。其の學専ら經術を修め、詩賦を好まず。野村藤陰、果齋より長する一歳、常に相與に切磋せり。而して藤陰は七十餘歳の高齡を保ち、果齋は不惑を起ゆる纔に二歳にして歿す。洵に惜しむべきなり。(野村藤陰撰墓碑銘)

岩瀬尙庵

岩瀬尙庵、名は顯、字は純甫、通稱中藏、尙庵は其の號、別に櫻溪と號す。學を佐藤一齋及び大橋訥庵に受け、篤く經學を修め、就中、中庸に精通す。又書を卷菱湖に學び、筆札に工なり。擧げられて藩の儒官となる。安政三年伊勢太廟に詣で、山田行記の著あり。明治四年正月六日病歿す。城北宮町屋震寺に葬る。諡して、圓定院大譽義仁居士といふ。碑は現に同寺に在り。子、道二郎、嗣ぐ。(日本教育史資料、墓碑)

宇野南村

當時大垣に宇野南村あり。詩を能くし、私塾を開きて後進を誘導せり。南村名は義以、字は士方、南村



は其の號、忠三郎と稱す。大垣藩の人、推擇せられて吏となり、頻年江戸に祇役し、梁川、星巖の門に入りて詩を學び、簿書の暇を以て、一時の名流と交る。小野湖山、大沼枕山等其の知己たり、推して作家と稱す。小原鐵心の咬菜社を結ぶや、南村之に加はり、社友諸子と詩酒徵逐せり。

初め勘定所の屬吏となり、後勝手横目に任じ、又厩主簿に轉ず。能く小官に安んじ、文職たるを喜ばず。其の學職の如き兼攝たるのみ。故に世間或は其の讀書人たるを知らざるものあり。然れども其の同窓を會して和漢の盛衰、古今の得失を論するに至りては、則ち博聞周見、鑿々證あり。終年兀々文學を業とする者と雖、亦之に過ぐるある能はず。勤めたりと謂ふべし。嘗て私塾を開き、名づけて南村學舎と云ひ、徒を集めて教授す。門に入るもの多し。

性澹泊他の嗜好なし。只詩賦を好む。耳目觸る、所口吻に上らざるはなし。平生作る所千首を下らず、其の詩みな冲澹古雅、朗々誦すべきもの多し。小野湖山嘗て云ふ。

南村詩。幽遠古雅。得二陶韋三味。兼以三放翁後拔之氣。嗚呼誰知三其爲三簿書中人一耶。

小原鐵心又嘗て其詩稿に序して云ふ。  
宇南村之於詩也。以三盛唐二爲體。以三晚唐二爲衣。百鍊千磨。格律整正。而博涉三經史。寓三典故於幽致遠約之間。未嘗要三約レ奇競レ新。以眩三惑人心目。故人讀之。或有下以爲三澹泊無味一者。必也。能至三其域一者而始知三其有滋味一也。以て其の當時同人の間に推重せられしを知るべし。左に其の二三を示さんか。

追分道中

亂山起伏怒濤奔。熊嶽岩峴獨處尊。  
馬嘶三荒驛一夕陽落。鶴唳三古林一殘雨昏。  
嶺外北開三越路。關中東瞰二毛原。  
隔水孤燈就投宿。題詩破壁一銷魂。

雨中重陽

新晴晴不得。愁雨雨偏多。  
雲霧暗三山河。不醉三菊花酒。一旅懷將三奈何。  
萬事率如此。重陽空又過。  
風霜傷三草樹。

行殿無三基草色勻。水濱何處問三遺塵。須磨關外一輪月。曾照城樓吹笛人。

劍鋒一滴化成三洲。天子天孫日月俦。揚武屢征三高麗國。控兜覽會覆三點胡舟。

芙蓉中立三干界。滄海四環六十州。周鼎無三人間三輕重。依然萬古舊金甌。

慶應二年四月廿五日病歿す。享年五十四、城南全昌寺に葬る。著す所南村遺稿二卷あり。歿後其の子及門人の編輯せしものなり。配長松氏、六男を擧ぐ。長義信、字は成卿、通稱達次郎、笙山と號す。又詩を巧にす。著、笙山集一卷、南村遺稿に附載せり。明治十年病歿す。享年三十二。次義質、通稱時三郎、南塘と號す。亦不幸早世す。三男義存(通稱易五郎、健齋と號す、大正三年八月歿す、年五十七)仍て家を嗣げり。(南村遺稿、玉池吟社詩、湖山樓詩屏風、及墓碑銘)

弘化、安政の間、僧鴻雲爪、錫を留めて大垣桃源山全昌寺に在り。雪爪、本姓宮地氏、號は江湖、藝州御調郡因ノ島の人、浮屠に隱ると雖、智謀雄偉、希世の傑僧にして、儒佛に通じ、兼ねて詩文を能くす。小原鐵心等と交好し。(後選俗して、左院講官となり、教部省に出仕し、從四位に叙す)後年山高水長圖記の著あり。(明治三十七年歿す、年九十一)此他當時鐵心の咬菜社に參し詩酒の交を訂せるもの、鳥井研山(名は亨、字は元吉、嘉永四年十二月歿、享年三十三)松倉瓦鷄(名は廣美)及び溪毛芥(後章に於て別に傳する所あるべし)等あり。以て當時大垣文學の

盛を知るに足らん。

芳山覽古(六首録二)

南朝遺事夢摧殘。 回顧當年坐三夜。 流水聲幽客夢殘。 依依花影在二關。

正月五日呈二學校諸教授

承平堪レ喜息二千戈。 更始 皇風四海加。 驚遷三喬木一能知レ轉。 梅向二青春一也自花。

病、羸命盡向二黃泉一。 已免深淵戰戰身。

鴻 雪 爪

春風曾歷レ照二金鑿一。 如意寺邊春月寒。

宇 野 笙 山

世間誰哭買長沙。 依然猶守杜陵家。

鳥 井 研 山

### 五、郡上藩及岩村藩の文教

#### 1. 郡上藩

天明年中藩主青山幸完始めて藩校を創設し、江村北海を聘して儒道を講せしめたること既に述ぶる所の如し。降りて文政の初(幸孝の時)京師の儒者杉岡瞰桑を聘して指南となし、以て藩士を奨励するの舉あり。後孝寛、孝禮を経て孝哉(天保九)の時、上有知の村瀬藤城を延きて時々經史の講明を依托せしことあり。降りて幸宜の時に至り、維新に際し、文武の奨励を加ふる前日の比に非ず。乃ち當國中島郡の人入山謙受を招聘して一藩の指南とし、尙京師の儒者山田翠雨を聘して客師とせり。文教の旺盛なる前代未だ有らざる所なり。

杉岡瞰桑

藩校はもと潜龍館と稱し、漢學のみを教授せり。先づ孝經、小學、四書、五經、文選を授け、進んで十八史略、左傳、近思錄、蒙求の類を課し、後、日本外史を加へ、又更に史類、諸子に及べり。其の後(慶應年間)校舍を改築して文武館と改稱し、兵學、槍劍等の諸武藝及び筆道、算法、習禮等を兼ね授けたり。維新の後更に又名稱を集成館と改め、醫學校を設置し、洋學をも加へしが、廢藩に及び學校亦自ら廢止に屬せり。以下藩儒に就きて記する所あるべし。(日本教育史資料)

杉岡瞰桑、名は道啓、字は公階、瞰桑は其の號、別に鈍吟と號す。京師の人にして、銅駝坊に住す。少より穎敏、江村北海及び清田儋叟に師事し、又柴野栗山、菅茶山、清田龍川、村瀬栲亭、小栗十洲等と交り、博く群書を閲し、儒典賢籍、該通せざる無く、旁ら醫理に精し。性最も詩を好み、毎に當時の豪俊と會し、險韻難題に遇ふと雖も、即ち筆を援れば立に成る。文場詩壇相抗する者無し。然れども存りに親戚の艱に遇ひ、生産蕩盡、動もすれば庸俗の睚眦を被り、鬱々として志を得ず。一旦奮然衣を拂ひ一劍に仗りて千里東遊し、遂に濃州に至る。時に文政三年庚辰春三月なり。

會々郡上侯盛に學館を修め良師を待つ、乃ち瞰桑を延きて教授を掌らしめ、潜龍館の長と爲して厚く之を遇し、又居第を襄荷溪に賜ふ。溪は即ち濃北の勝地にして、翠屏圍繞し、碧波潺湲として、所謂「探於山美可茹、釣於水鮮可食」の佳興あり。瞰桑出でては學館に後進を誘掖し、諄々として倦まず、入りては山水の勝概に對して吟詠を縱にす。期年ならずして上下矜式し、教化大に行はる。當時藩老小出謝海を初め濃北文雅の士、松村霞涯、飯田白齋、齋藤春圃、鷺見春宇、二村梅山、淺井五臺等みな之に師事し、詩社を設けて相唱和せり。其の得意想ふべし。

居ること僅に三年、惜しい哉、文政五年壬午二月俄然病に罹りて歿す。子良策、字は君輝、父の業を紹ぎ、兼ねて醫事を能くし、又詩に巧なり。藩侯之に命じて、學館の長となし、寵祿父に異ならず。此に於て諸弟子と相謀り、遺稿を纂集して之を割刷に付す。襄荷溪詩集九卷是なり。

嗽桑詩名夙に世に籍甚す。其の「書中乾胡蝶」を詠する七律四十首、「鴨東四時詞」六十五首の如き、或は「鼠雀益梅」及び「患瘵美人」の詩の如き當時既に人口に膾炙し、遠近嘖々傳稱せり。南洞日野資愛卿其の詩集に序して曰く、

杉岡嗽桑、自少穎敏、博通群書、性最好詩。每與當世豪俊一會、雖遇艱險、即援毫立成。長篇累章多々益奇。未嘗見其操思也。所謂七步八叉、不足比其捷。自非錦繡心腸、珠玉咳唾者、安能如斯耶。是以人莫不稱一焉。而五七小詩尋常題詠。時或逡巡、差勢三推敵。人誦之平平淡淡。至細味之則如管三八珍。穎敏博通之美隱然于其中一矣。云々

其の推賞を被れる此の如し。

左に其の二三を示さんか。

餓脚老人歌

餓脚老人足如鐵。  
人寰來往探三奇。  
拾了名勝歸何處。  
夜夢猶是事三躡攀。

孤筇春曳芳野花。  
家在蓬萊不死鄉。  
富嶽金峰路悠悠。  
輕笠冬戴越路雪。  
兒孫待門迎朱顏。  
松島天橋風標浮。

到處取景入錦囊。  
畫堂開宴玉壺霞。  
大地假汝以老健。

疊嶂連山素練長。  
一雙仙鶴水天鄉。

空明瀟瀟泛輕航。  
移篙欲問坡翁跡。

風清石壁金波冷。  
蘆荻煙深鎖雪堂。

月自滄江玉露涼。  
千里輪囷鶴驚夢。

以て其の才藻一斑を知るべし。(襄荷溪詩集、日本教育史資料、三野風雅)

天保弘化の頃村瀬藤城(藤城に就きては既に頼山陽門下の條に述べたれば茲には贅せず)聘せられて屢々郡上藩に來り潜龍館に於て經史を講し、また詩社を設けて藩中有志の士に詩文を教授せり。同社の重なるものに藩老小出羅溪(名は公綏、字は履卿、通稱彌左衛門)鈴木滄海(名は重信、字は孔和、通稱吉左衛門)を初め、鈴木觀瀾(名は重武、字は弘文、通稱帶刀、御用人たり)桂東峰(名は光弘、字は千秋、通稱傳太夫、御代官)神谷愚溪(名は直島、字は士生、通稱勘左衛門、別號倚翠亭、御代官)山田惟逸(名は宜胖、通稱助太郎、三右衛門と改む、勘定奉行たり)等あり。又以て濃北文雅の盛を窺ふべし。(村瀬藤城、南北起謬曆)

山田翠雨

山田翠雨、姓は橘、名は信、字は義卿、翠雨又は鶴巢と號す。攝津八部郡中村の人、父慶純、醫を業とす、母は箱本氏。翠雨幼にして學に志し、天保四年浪華の後藤松陰の門に遊び、又京師に出で、摩島松南に師事し、爾後京阪を往來して、力を經史に用ひ、孜孜として怠らず。後學を京師に講ず。從遊するもの多し。又詩を梁川星巖に問ひ、江馬天江、藤井竹外、清原梅東、源綾洞等と交遊す。安政四年初秋諸子と巨椋湖に遊びて蓮花を賞し、詩酒相唱和せり。棕湖觀蓮集一卷是なり。

明治中興、郡上青山侯其の賢を聞きて、之に師事せんとし、禮を厚うして之を聘す。翠雨其の殊遇に感じ、決起召に應じて來り、藩校の客師となる。居ること三年、老を扶けて京師に歸れり。幾もなく疾に罹り、一たび郷に歸る。未だ期年ならずして又京に入る、疾愈篤し、終に起たず。明治八年乙亥八月五日歿す。享年六十一。洛東長樂寺に葬る。碑面題して翠雨山田先生之墓と云ふ。

著す所丹生樵歌八卷(小竹、松陰、淡窓、星巖等評、嘉永三年小竹の序、松陰の跋あり、安政四年刊行)翠雨軒詩話四卷(文久元

年の自序あり、慶應二年出版あり。翠雨人と爲り重厚寡慾、人最も其詩を好くするを稱す。左に其の一二を示すべし。

癸丑三月將ト三居於京師。十一日入レ阪調ニ松陰先生ニ與ニ令嗣子長ニ同賦

不似生平戰酒過。此行奉母又携家。松聲靜入三茶壺一煮。梅氣自和墨氣一磨。出谷還鷺息三喬樹。

渡江征雁宿平沙。從今寄跡向京洛。何日占來安樂窩。

竹中重治墓(在播州三木郡平井村)

三軍誰不飲英風。カレ病猶從征戰中。只唱猴郎功業大。何知籌策出茲公。

看 蓮

始悟金仙愛水華。淫而不緇自然佳。坐魚也似解禪味。偏向三荷心平處一踰。

廣雅、蛙一名坐魚、以二其性好坐也。

水煙籠月夜朦朧。重泛三輕航趁三曉風。十里蓮花始明了。一分是白九分紅。

(長樂寺內墓碑銘、丹生樵歌、及山田喜市氏の調査による)

入山謙受

入山謙受、字は士恭、半間と號す、文政十二年美濃中島郡に生る。天保十三年三月(年十四)尾州丹羽郡丹羽邑なる鷺津益齋(名け弘)に從學し、翌十四年正月より又其の子毅堂(名は宣光)に就きて學ぶ、同年七月より笠松の角田錦江に、又翌弘化元年より尾州犬山の村瀬太乙等に從ひ皇漢學を修む。

弘化四年浪華に遊び、篠崎小竹及後藤松陰に從ひて經史を研鑽し、且旁ら書法を受く。嘉永二年五月更に豊後に赴き、廣瀬淡窓の門に從學すること三年、同四年江戸に出で、安積良齋、鷺津毅堂、森田貞介、莊原文助等に從學し、居ること五年。後三河源德寺に於て皇學を受く。

岩村藩

2. 岩村藩

安政二年郷に歸りて家塾を興し、爾後明治元年に至る十四年間、徒を集めて皇漢學を教授す。同二年正月聘せられて郡上藩文學都講となり、同三年十月藩校督學に進み、四年十一月藩校の廢止せらるゝに及びて職を退けり。六年七月より八年正月まで、一時、八幡町學校教員の職を奉ず。九年十月、八幡町に私塾を開設し、名づけて灌花私校と云ひ、爾來青年の薰陶に盡瘁すること十七年、(日本教育資料には灌花私塾開業の時を慶應二年となせり。思ふに謙受が郡上藩に聘せられたるは慶應二年にして、同時に私塾を開き、是に至りて再び塾を開きしものなるべし) 明治二十五年三月十八日病を以て歿す。享年六十四(日本教育史資料、及び山田喜市氏の調査せられし所に據る)

元祿年中藩主松平乗紀が學舎知新館を創設してより文教蔚然として興隆し、遂に林述齋、佐藤一齋の二碩儒を出すに至れるは、前章に於て既に述べたる所なり。天保年間に至り藩主松平乗喬(天保十三年襲封)儒教を尊崇するを以て、幕府儒員佐藤一齋の門人若山勿堂、田邊恕亭の兩名を聘し、恕亭を以て知新館儒員とし、勿堂を以て江戸詰儒員とし、大に學事を擴張す。茲に於て藩士の子弟は言ふに及ばず、他邦の士も陸續入學を請ひ、頗る旺盛を極めたり。續いて元治元年に至り、(藩主乗命の代)芳野金陵の門人原田文嶺を聘して儒員となし、知新館内に寄宿寮を置き、藩士及他邦の士をして入寮勉學せしむ。

漢學は朱子學と定め、孝經、小學、四書、五經、左傳、史記、國語、文章軌範、八家文、七書等を教科用書とし、其の他は各自所好の書を授く。外に和學、算法、筆道、習禮、兵學及び各種の武術を課し、

田邊恕亭

入學の生徒には必ず文武兩道を兼修せしむるを制規とせり。生徒の數、寄宿生通學生を合して四百餘名に上れり。以て當時藩學の盛を知るべきなり。(日本教育史資料)

田邊恕亭、名は瞻、字は淇夫、通稱鏡之助、後歸一郎と稱す。文化九年壬申四月五日上有知に生る。文政六年癸未正月(年十二)村瀬藤城の門に入りて業を受く。又時に名古屋に赴き、村瀬立齋の家に寓して醫事を學ぶ。同十三年(天保元年)庚寅三月京攝に遊び、頼山陽、篠崎小竹等の諸儒を叩問す。天保二年辛卯二月江戸に遊學し、佐藤一齋の塾に入る。同五月父の疾危篤なるを聞き、郷に歸りて看護す。六月父遂に歿す。喪に服する半歳、十一月除服して再び江戸に赴き一齋の塾に入る。家弟春鴻の送詩に云ふ。

奉送三家兄淇夫之江戶

馬頭殘月朔風寒。

千里憐君行路難。

但願武城解鞍日。

一封書早報平安。

又村瀬藤城の送序に云ふ。

送三田淇夫再赴江戶序

田淇夫吾同里生、常抱レ經道レ余。自レ幼至レ長。不以下風雨一轡、一日上。已有四方之志。負、發赴江戶。就三齋先生之塾、而學焉。居未數月、乃父疾作。吾代三乃父。致三書於淇夫。亟歸、鄉侍養其病。病終至不起。因又爲淇夫一謀。助三喪事、而治焉。今也淇夫之服除矣。則復遣之赴江戶、成一其業。亦遂乃父之志也。嗚呼乃父之初病、而淇夫未至、至家也。吾往視之。病既危篤。恐淇夫未至、而或有上レ不可レ諱。乃父時屏人。屬我以三後事。至談淇夫之事。乃父謂我曰。請公善視之。然至如三彼事成否。唯從三彼之自爲。成則誠天幸。不成亦不恨。幸勿以此爲患也。時吾正レ禮諾之。以三乃父爲下獨善處三死生之際一者也。既而再四思之。而後知是乃父之期三淇夫也切矣、而其屬三之余一也重上矣。特竊三其辭一以庶三幾余之釋以盡三其任一焉耳。(中略)故余欲下三淇夫於成、而果中乃父之託也。雖然淇夫之行也。家破產殫。獨往千里。囊粟僅留數錢。自非三千辛萬苦以服三其勤勞。其何以能成三事耶。是所下以余說三乃父之事情。以爲淇夫一丁寧上也。(下略)

以て恕亭が經歷の一端を知るべく、又以て其の勤學の勞苦を察すべし。

當時神田、柳、溪、江戸に遊びて恕亭に邂逅し、詩を贈つて云ふ。

八代洲晤三田淇夫一賦贈

事舍吟唔裏。

同鄉認三語音。

愧將三吾白髮。

笑對三子青衫。

塵土自朝夕。

文章有古今。

但當一杯酒。

細話三歲寒心。

(南宮詩鈔)

天保三年壬辰十一月朔、一齋の薦を以て岩邑藩臣に列し、翌四年より五年の間學職を勤む。同六年秋八月候に從つて大阪副鎮に赴き藩士を教授す。八年丁酉正月世臣と爲り、翌九年正月岩村儒學師範を命ぜらる。此の歳正月日光に奉使す。三月移りて岩村に住す。嘉永二年暮秋郷里上有知に歸り先塋に拜展す。終りて舊友小坂海岳(三宅權齋)の春曦塾を過ぐ。時に海岳詩あり、云ふ。

巖邑藩文學田邊淇夫、歸三風先聲。過三我春曦塾。喜賦。

霜後林梢帶三夕霏。

待看學士錦衣歸。

里中子弟推迎處。

即是兒時舊釣磯。

(權齋詩鈔)

文久三年癸亥二月十二日病歿す。享年五十二。諡して文明院と云ふ。岩村町妙法寺に葬る。配伊澤氏、名は歌、高遠藩士與右衛門清庸の女、嘉永七年三月朔病歿す。享年四十。後配、名は借、秋芳と號す。大垣藩士伊藤勝之進の妹、明治三十八年十一月廿日病歿す。享年七十一。(日本教育史資料、藤城詩文集及船戶義實氏の調査に據る)

若山勿堂

若山勿堂、名は極、通稱壯吉、勿堂は其の號、又用極と號す。阿波の人、年十八九、笈を負ひて江戸に遊び、佐藤一齋の門に入る。業成りて後岩村藩に聘せられて江戸詰の儒員となり、又私塾を興して他邦の士を教授す。後又松代藩の請により、月次之に赴きて經書を講ず。佐久間象山嘗て勿堂記を作りて之に

與へき。

文久三年九月廿八日幕府に仕へ、昌平齋の儒員となる。慶應年中病みて歿す。麻布深廣寺に葬る。著す所、祥刑要覽あり。其の門下に勝安房、板垣退助、土方久元等の諸名士あり。(日本教育史資料、人名辞書、象山全集)

原田文嶺

原田文嶺、名は紀、字は立夫、通稱徳三郎、文嶺は其の號なり。文化八年、尾張國知多郡富貴村に生る。父は利助と云ひ、農にして郷士たり。母は同郡布土村の郷士伊藤仁左衛門の姉、文嶺は其の第二子なり。幼にして温良能く父兄に事へ、村校に素讀を學びて、勉勵常に儕輩を抜く。稍長じて、兄龜藏が夙くより江戸に出で、商賈となれるより、専ら家業を習ひて家を嗣ぐべかりしが、既にして青年に達するや、久しく田夫野人に伍するを好まず。遂に三十歳にして志を立て、笈を負ひて江戸に遊學し、當時安井息軒、鹽谷宕陰と共に海内の文運を左右せし鴻儒芳野金陵(名は世育、今の世經氏の父)の門に入れり。文嶺、温讓恭謙、能く年少子弟と共に經書を繙き、研鑽年あり。學大に進む。金陵の撰せる墓表に曰く。

立夫の吾門に入るや、年已に壯、自ら晩暮と謂ひて、銳意頓々、子に難れ寅に起き、終始晝一、未だ嘗て一日も暇逸せず。嘗て謂ふ「實才は實徳に出づ。實徳は之を實學に得」を。乃ち志を詩文に絶ち、經書を讀攻す。

と、以て其の志を知るべし。

當時幕府は威勢衰替、加ふるに洋舶屢々邊海に出沒して、海内騷然たり。金陵深く之を憂へ、或は支那の新報を搜索し、或は蘭書を讀み、以て海外の事情を察し、同志と俱に天下の形勢を講論し、密に閣老久世侯に啓沃の意を竭せる等の事ありしが、文嶺亦之に與りて畫策する所少からざりき。安政元年文

嶺年四十、幕府旗士平瀬平四郎の家來深山周造の女琴子を娶る。二年長男孝太郎を産む。天す。四年二男縮太郎(後晉改名)を擧ぐ。後大久保支藩の儒官に薦められしが、姦邪の非政を論詰し、爲に讒誣を被りて退き、去りて七日市侯に客たりしが、元治元年岩村藩に聘せられ、十五人扶持を受け、一藩の教録を執り、又繙經堂を開きて子弟を教ふ。文嶺時に五十四歳、金陵其の爲人を叙して、

沈實にして淵着、退讓自ら律し、行を顧みて言ひ、言を顧みて行ふ。而も治亂の隆替の由を論じ、忠奸消長の機を語るや、侃々として辨折し、必ず至當に歸して止む、和易物に接すも雖も、友朋過あれば必ず之を規し、改めざれば措かず。急を見て必ず救ひ、難を見て必ず趨く。未だ嘗て人に後れず。古道を今世に行ふものと謂ふべし。

と論せり、蓋し過言にあらざるべし。文嶺岩村藩に聘せらるゝの翌年八月、配琴子を亡ふ。琴子臥床年餘、文嶺看護能く勤め、而して幼兒を教養して日々怠らず。來訪者皆襟を沾さゝるは無かりきと云ふ。温厚篤實の資性知るべき也。然れども大事に臨みては決然起ちて一身一家の利害を顧す。大義を明にせざれば止まず。時恰も勤王佐幕の論喧しく、物情恟々として藩中亦物議多く、人々適從する所を知らず。文嶺即ち慨然として意を決し、思へらく、「安危の繫る所名分の定る所、一に此の時に在り。」と、同志を糾合して切々反覆時事を論究し、名分を重んじて、大義を明にし、一藩の歸嚮する所を示し、人心漸く安きを得たり。而して藩主始め藩の當局も亦大義名分を知らざるに非ずと雖も、未だ幕府を敵として敢て起つことをなさず。而も時運は刻々逼迫す。文嶺即ち天下大義の定まるの機を逸し去らん事を慮り、敢然として起ち、同志と俱に勤王の事に従はんとするや、忽ち藩命を以て蟄居仰付けらる。實に慶應三年なりき。文嶺幽閉せらるゝと雖も藩主の恩を忘れず。後幕府の勢威全く地を拂ひ、岩村藩が討幕に與せざりし所以を以て、其の知行を

廢せられんとするや、即ち其の筋に歎願して藩の廢滅を免れしめたり。戊辰正月、東山道鎮撫總督府の名を以て文嶺等に對し左の如き達示あり。

其方共主人今日に至り、朝敵徳川慶喜に屬し居候事、不埒の儀に付、知行可被三召上二答之處、其方共歎願之趣不憫に被三思召一未だ其御沙汰には不レ被レ爲レ候間、早々關東へ罷下り、主人相誘ひ、歸國の上、謝罪之儀相立、勤王の實効相願候はゞ、其節至當之御處置可被レ爲レ在候間、其旨相心得可レ申事

戊辰正月二十七日

別紙の通被三仰出一候間相違候事

東山道鎮撫總督執事

ついで王政復古に及び、明治二年四月を以て岩村藩議政局より左の達あり。

原田 徳三 郎

當年重き御法會(?)にも被レ爲レ當候へば、出格之以三寛典二懲居被レ免、隠居被三仰付一候事

但自分謹慎可三罷在一事

巳四月十三日

議 政 局

翌三年謹慎を命ぜられ、養老の爲め二口を下附せられ、兒縮太郎元服せり。同年十月十二日病を以て歿す。享年六十歳、岩村城西盛巖寺に葬る、諡して文嶺院徳翁良三居士といふ。金陵訃音に接するや、墓表を作りて之を悼む。中に曰く、

天下の廣き其の能く書を讀むものは鮮からざる也。而して能く儒たる者は萬中一二に過ぎず。儒なるの難き已に斯の如し。而して其の儒行あるものに至つては則ち寥寥乎として長星の如きのみ。吾れ帷を下してより斯に四十年、其の來り謁せざるものは唯豊隱二州の人のみ。而も能く儒たるものは多からず。儒行ある者に至りては能く十指を屈せず。立夫の如きは即ち其の一なり、而して今や則ち亡し。

以て其の面目を窺ふべく、又いかに金陵が其の學徳を推重せしかを知るに足らん。(令孫原田棟一郎氏手記原田文嶺小傳)

### 六、高須藩及今尾藩の文教

#### 高須藩

##### 1. 高須藩

享保年間藩主(松平義淳なるべし)始めて學校を創建し、日新堂と稱せしこと既に記せる所の如し。爾後多少の消長盛衰ありしならんも、文獻の徵すべきもの無ければ、詳細を知るに由なし。

降りて天保三年藩主松平義建の封を襲ふや、主として儒術を尊崇し、其の封國に就きて、屢々學校に臨み、右文左武の四字を講堂に掲げ、子弟を奨励せり、因て爾後文教頗る振起したりき。

學校はもと高須町「山の手」なる地に在りしが、校舍狹小にして教育に不便なるを以て、文久年間(松平義勇の世ならん)南主水町なる官邸(今の高須小學校の地)を増築して茲に移轉せり。

學科は皇漢學及算術筆道とし、教科書としては孝經、學庸、論孟、詩經、書經、及國史略、日本外史、皇朝史略、日本政記、左傳、史記、前後漢書等を用ひ、大率先づ四書五經の素讀を授け、ついで經書は講義或は輪講、歴史は質問或は輪讀せしめたり。外に弓馬槍劍等の教場ありて、子弟は素より文武兩道を兼修せしむる定なりき。春秋兩度には聖像の畫幅を掲げて、釋奠の儀を擧げ、冬至には詩會を催すを例とし、其の際藩主の臨校あり。又不時に藩主臨校して生徒と共に講義を聴取せることありき。

職員には總教(兼攝)及び教授あり。維新後改めて文武總督(兼務)、教授、監事、助教、訓導等を置く。

生徒約三百名あり。以て學校廢止の際に及べり。(今の高須小學校は其の後身にして明治六年三月の創立に係る)(以上主として日本教育史資料に據る)

藩儒の重なるものには寛政文化の頃日比野秋江あり、聘せられて藩の文學となる。ついで川内當當、擧げられて藩學の教授たり。當當の歿後森川謙山、教授を襲ふ。維新の際河原湊南、岡崎格堂等の諸氏並び立ちて儒員となる。以下是等藩儒につきて記する所あるべし。

江日比野秋

日比野秋江、姓は藤原、名は仲援、字は肇甫、通稱彦太郎、秋江は其の號なり。家世々名古屋城南に住す。父名は成軌、市長たり。母は宮田氏、寶曆六年八月廿六日を以て生る。幼にして讀書を好み、岡田新川(名は宜生、字は挺之、第二章古註學派の條参照)に學び、又淺井圖南の門に入りて、扁倉の術を叩く。壯に及び、家を辭して京師に遊學す。詩を善くし、兼て書及墨竹を善くす。又音韻學を好み、頗る慧解する所あり。後郷に歸り、前津の里に居を卜し、子弟に教授し、傍ら醫を以て人を救ふ。人多く之を稱せりと云ふ。

寛政七年褐を解きて高須藩の文學となり、月俸十口を賜ふ。十年教授勞あるを以て、特恩菊輪の紋服を賜ふ。人皆之を榮とせり。文化十四年月俸二口を加賜せらる。文政二年致仕して、駒野村に隱居し、専ら吟哦を以て自ら娛しむ。詩稿三十餘卷あり。

文政八年九月九日病みて家に歿す。享年七十六、高須瑞應院の後丘に葬る。配中野氏琳子、先だちて(文政五年)歿す。子無し。中島重芳の次子豊を養ふて嗣となす。豊、字は子蔀、繼いて藩の文學となり。家聲を墜さず。維新前後日比野掬治あり。擧げられて藩校の教授とたる、亦其の子孫たり。一家世々相襲い

松尾東萊

で文教に貢献す。其の功大なりと謂ふべし。(瑞應院内墓碑)

同時に松尾東萊あり。東萊、名は世良、字は子顯、東萊は其の號、岡田新川に學び詩を能くす。屢江戸に祇役して菊池五山、大窪天民等と交る。文化の初、年六十を過ぎて、詩力益々健なり。文化八年辛未火災に遭ひ、詩稿盡く灰燼に歸す。然れども猶且逸存するものあり。五山勸めて上梓せしむ、名づけて東萊焚餘(文化十三年丙子、五山及天民の序あり)と云ふ。左に其の詩一二を示すべし。(東萊焚餘、五山堂詩話)

輕黃梅已熟。 窓下坐懸梧。

却愛無二人間。 清吟與不孤。

秋夜讀書

齋雨鳩追婦。 梁泥燕養雛。

獻將上三衣術。

溫箱透三書厨。

雨聲點點滴芭蕉。

窓下挑燈坐三寂寥。

讀史最耽遊俠傳。

老來豪氣未全消。

川内當當

川内當當、名は泰、字は交通、通稱甚左衛門、當當は其の號、寶曆十三年癸未三月十五日を以て生る。四世高須藩に仕へ職武弁に在り。當當幼より學を好み、博く經史百家の書に通じ、兼て書法を好くす。尾藩の督學細井平洲を師とし、また同藩儒官秦滄浪(名は鼎)と伯叔の交をなす。曾て江戸に祇役し、本多和明に従ひて量天海運の術及び諸豐饒策を受け、盡く其の蘊奧を極む。また廣く太田錦城、菊池五山等知名の文人と交る。五山嘗て記して曰く、

高須爲三尾支封。 土壤亦相接。 殆有都魯之風。 余所最知一者川泰。 字交通。 號當當。 資性敦厚。 替人竭力。 百方獎勵以成其美。 云々

其の五山の詩社に入るや、五山最も善く款接せりといふ。其の他山本綠蔭、大窪詩佛、梁川詩禪(星巖)



秦屋池等一時の文人概ね交を訂せざるなし。

享和二年私塾を開き、名づけて方靈館と云ひ、また擧げられて藩校日新堂の教授となり、子弟を薰陶すること五十餘年、桃李三千に垂んとす。安政四年丁巳三月十一日病みて歿す。壽九十五、河戸村寒窓寺に葬る。碑は現に同寺に在り。題して川内當翁墓といひ、松倉瓦鶏撰する所の碑文を刻せり。門人戸倉竹圃嘗て賦して云ふ。

樽三川内當翁先生

翁年八十一。

吾始入三藩門。

雖三問有二三進退。

就正十數年。

博識多聞。

有壽或不賢。

先生向三上壽。

學亦有三淵源。

老健教不佞。

桃李及三三千。

就中憐三年少。

詳詳頗特溫。

爾後每趨謁。

清譚悉金言。

數部爲割愛。

贈遺今猶存。

珍重坐右置。

披閱憶三手痕。

慚愧學未達。

難報麗澤恩。

丁巳二月朔。余往問三先生病。乃有易象解、左傳詳節句解、古文折義等之賜。至三月十一日。終爲三永訣。焉。今猶不勝三愴然一矣。(養老山房詩鈔)

以て其の爲人を想見すべし。

當當資性敦厚、其の詩極めて率易、諷誦すべきもの多し。左に其の短絶二三を示さんか。(日本教育史資料、五山堂詩話及墓碑)

答人

靜對床頭道德經。

朝回日日掩柴扉。

老來無三句酬三知己。

愧使三故人留三眼青。

連日晴喧春已過。

滿村花柳爲人容。

繡鞋拾翠誰家女。

笑我龍鍾倚三竹筇。

詠三蜀 人一

沐雨梳風最策功。

長管立盡野田中。

西成今已收禾盡。

辛苦爲誰費三竹弓。

川内老泉、名は行、字は三藏、號は玉圃、後老泉と改む、當當の子、寛政九年五月廿五日を以て生る。幼にして家學を傳へ、後尾藩の秦鼎に従ひて經史を問ひ博く文籍に渉る。平生勤儉、忠孝を以て自ら厲む。長沼兵要を原田氏に、兵法を中山氏に、鎗法を箕浦氏に受け、皆其の室に入る。其他書、數、射、騎、劍技通習せざるなし。文政二年己卯春、命あり、黄金三兩を給し其の功を賞せらる。惜しむべし。一旦疾に罹り、文政六年癸未三月八日遂に歿す。年僅に二十七、高須圓心寺に葬る。碑文は秦鼎の撰する所、現に同寺に存せり。(墓碑及五山堂詩話)

落花

滅却春光無三幾在。

何堪紫蘂又紅飄。

殘鶯寂莫深絨恨。

狂蝶翩翩暗斷魂。

未忍呼三僮奴掃三徑。

自緣三辭客不三開三門。

如今又作三經年別。

淚滿綠陰過雨痕。

天保の頃藩主に松平秉齋侯あり。侯名は義建、字は懿德、秉齋は其の號、幼より學を好み、詩を能くし兼ねて書に巧なり。詩を尾藩の深田香實(名は龍、字は子純)に問ひ、能く宗室の貴を以て、文藻の美を擅し、殆んど鄒枚の輩をして身を措くの地無からしむ。

當時藩主に林欄亭あり、名は正幹(略して幹とも云ふ)字は子與、通稱忠右衛門、本居春庭に國典を受け、和歌を善くし、また詩に巧なり。同時に小山田恬齋(名は信、字は言人)萩原簡亭(名は成章、字は孔思)及び竺竹亭(名は詩國、字は風篁)の三子あり。並に業を菊池五山に受け、詩を善くす。稍後れて川出龍山(名は碧、字は霞生)

通稱章三あり。學を柴山老山に受け、兼ねて醫理に通じ、詩を善くす。以て當時高須藩文學の盛を知るべし。(三野風雅、五山堂詩話、三野人物考)

雨

冷透三紗窓、午夢殘。

臥閣春雨滴、層樓。

床頭一縷香煙細。

松平乘齋侯

秋

掃三盡痴雲、雨始晴。

湘簾捲、月坐三更。

影透三疎林、殘滴歇。

閑把三花經、枕上看。

林 欄 亭

霽師何處曉、食、眠。

霜滿三征裘、待渡船。

沙上淡描孤笠影。

刺繡罽、壁、風聲。

萩 原 簡 亭

山雨初過、頓涼。

悠悠袖、手立三四處。

月輪雲脚相馳走。

寒蟾猶在、遠山嶺。

小山田 恬 齋

滿園濃綠透、窓紗。

關關蛙聲聽不、諱。

只道春歸無、興趣。

人自清閒天自忙。

竺 竹 亭

布穀聲中雨、忽晴。

微風習習拂、衣生。

昔庭移、榻、蒸、三新茗。

川 出 龍 山

森川謙山

森川謙山、名は重謙、通稱篤藏、謙山は其の號、文化九年を以て生る。業を津藩の齋藤拙堂に受け、又尾藩の秦鼎に従つて經籍を修む。特に周易に精し。卜筮を請ふもの多し。川内當當の後を承けて、藩學校の教授となる。(蓋安政年中なるべし)職に在ること十一年、明治十七年五月廿三日永眠す。享年七十三、神葬を以て高洲山瑞應院に葬る。子畜家を繼ぎ、醫を業とす。次子良弼出で、前田氏を繼げり。(前田良弼氏寄)

孤竹二君天下稱。

春風香滿探薇衣。

至誠駐、馬情、何厚。

清拂三風塵、安三銀鏡。

座田維貞

當時高須藩より出でたる士に座田維貞あり。勤王家として名を知らる。座田維貞、字は子正、梅首と號す。通稱右兵衛大尉、高須藩醫速水玄仲の子なり。出で、院雜色座田維正の嗣と爲る。座田は紀氏なり、故に常に紀を以て稱とせり。(歿年より逆算すれば、其の出生せるは寛政五年なり)

少壯にして和漢の學に通じ、勤王の志最も厚し。平素和氣清磨、菅原道真の誠忠を慕ひ、竊に以て範となす。關白鷹司政通、三條實萬、三條西季知等の知遇を得、又梁川星巖、小林良典等の志士と交はり、屢々國事を議せり。時に思へらく、「中世以來皇威振はず、幕府の專横を馴致せしは堂上公卿の無爲無識なるに因る。宜しく一學館を興し、専ら堂上子弟を教育し、以て大に皇家の爲に盡さしめん」と。之を以て當路に建言す。直に官の採用する所となり、弘化三年(紀元二五〇六年)閏五月、建春門外に始めて學習院を設立せらる。乃ち維貞は井上主税、稻波主善と共に學習院雜掌を命せられ、特に德行を以て精勤すべき内旨を傳へらる。爾來十餘年一意其の職を奉ず。偶々中風に罹り、行步自由ならざるも病を推して勤務せりと云ふ。

維貞また國體の鞏固を圖るは、君臣の大義を闡明して、大和魂を養成するに在りとし、伯夷叔齊を激賞して、遂に「國基」一巻を著せり。後年 孝明天皇の御覽に供し奉り、叡威を賜ふ。維貞感激之餘一首の歌を詠じて曰く

唐大和、道のけぢめの手引草つたなき文も、御手にふれにき

知己朋友之を祝し、詩歌を贈りて、之を賀する者あり。後之を集めて「國基題詠集」と稱す。終に幕府の譏察を受け、殆ど厄に罹らんとして纒に免るゝを得たり。

維貞また嘗て和氣清麿の墳墓（洛北梅尾に在り）の久しく荒廢して徒に狐兔の巢窟となれるを慨き、自ら費を投じて之を修理せり。嘉永四年三月、朝廷詔して清麿の廟（當時高尾山神護寺に在りき）に正一位の神階を授け給ひ、護王大明神の神號を賜へるも、其の建議に基くものなりと云ふ。

安政四年（紀元二五二七年）八月廿二日病歿す、年六十五。是より先、正六位下に叙せらる。墓は京都寺之内大宮妙蓮寺に在り。明治四十五年二月廿六日特旨を以て正五位に追陞せらる。身後の光榮之に過ぎずと云ふべし。

國基一卷、斷するに和漢水土の異を以てし、證するに孔子の言を以てし、論旨精確、引證該博、萬古不易の大道を闡明して、また餘蘊なし。其の要に云ふ。

漢土の俗、代徳革命を以て常道とし、天を以て主とし、民を以て本となす。然れども、是れ水土の關係上、止むを得ざる所に於て、固より天地の大經萬世の定法に非ず。堯舜の授禪、湯歩の放伐は獨り漢土にのみ行ふべくして、他國に通用すべからず。

とて、漢土と比較して、我が國建國の基礎を辨じ、孔子の語を引用して、

孔子曰、太伯、其可謂三至徳一矣。三以天下讓。民無得而稱一焉。又曰、三分天下有二其二、以服事於殷、周之徳其可謂三至徳一而已。又曰、伯夷、叔齊、求仁而得仁、亦何怨也。孔子生于周世、長于魯國、不欲三顧言三先王之非。故與太伯、以三至徳一而武王之失徳自明矣。與三夷齊、以三仁而武王之不仁自明矣。

とて湯武の失徳を論じ、漢土の水土の薄惡なる、自ら惻怛の心を失ひ、仁厚の風壞れて、暴厲の俗作れるに言及し、更に孔子の意を付度して

孔子大聖。深察天地之經、洞觀三皇之跡。能察革命之俗、因水土薄惡。新國非新俗、不可爲治。於是策考三代之禮、作春秋、以則天地之經、而寓萬世不易之法。

と云へり。要するに

孔子が堯舜の禪讓、湯武の放伐を崇びたるは、唯天時に律り、水土に應りて、以て教法を垂れたるのみ。其の眞意は春秋に在り。春秋は萬世不易の法にして、其の君臣の道は我が國體と相戻らざれども、堯舜湯武の道は獨り漢土の俗に施すべくして、之を他國に通用すべからざるもの也。

と斷じて、我が國風土の厚薄なる、淳厚の風自ら興り、未だ嘗て觀鏡の徒あるなく、皇祚赫々以て今日に至れる所以を述べ、我が國君臣の義を明かにせり。實に一種の卓論と云ふべし。岩垣月洲が同書に跋して、

此書發前人所未發。有二獨得之妙。云々と云へるも亦宜ならずや。

此の書の成りしは天保六（乙未）年にして、其鏤行せられたるは、月洲の跋に依れば、天保八（丁酉）年なり。一本には卷頭に神祇大副大中臣教忠の序あり。（余の藏本此の序を載せず、恐らくは初刊本なるべきか）之に依れば安政二（乙卯）年に至り、天覽を経たるを知るべし。其の間十九年にして再び板行したりしなるべし。明治四十二年乃木大將、井上哲次郎氏の藏本に依り之を翻刻し、以て知人に頒與せらる。越えて四十四年有馬（祐政）文學士等大將の許諾を得、之に依りて國民道德叢書中に收載す。同叢書附載の小傳も亦主として大

將の手書に據れるなり。(國基、同題詠集、國民道德叢書、一徳會誌、平安墓所一覽)

2. 今尾藩

嘗て中西淡淵が今尾に來りて私塾を開けることありしは既に記せる所、然れども未だ學校の設無し。文化文政の頃藩士近藤活齋自宅を以て愛敬堂と唱へ士族の子弟を教授す。ついで弘化の頃より岸上老山自宅を以て弘文館と唱へ、同じく教授す。是等を藩の師範家と云ふ。竹腰正定の代始めて藩立學校を設け、文武館と稱し、文武の各科を備へ、普く士族の子弟を教授す。維新の後、舊藩主本邸の内二棟を學校とし、校名を格致堂と改む。廢藩の後學校亦廢止に屬せり。(今の今尾小學校は其の後身なり)

學校は文武兩局に別ち、生徒は文武兩道を兼修する定なり。教科書としては孝經、小學、四書、五經、十八史略、元明史略、左傳、史記、綱鑑易知錄、古文眞寶、八大家文並に王代一覽、國史略、日本政記、日本外史、類聚國史を課せり。職員には督學、教授、助教、句讀授等あり。生徒凡百五十名に上れりと云ふ。以下藩儒につきて記すべし。(日本教育史資料)

近藤活齋、名は彦三郎、字は主靜、竹腰氏の臣なり。尾州藩儒中村習齋(名は蕃政、中村厚齋の弟なり。蟹養齋に就きて經學を修む。寛政十一年歿す。年八十二)に就きて程朱學(山崎派)を受く。文化文政の頃私塾を開きて愛敬堂と唱し、子弟を教授す。竹腰正定の代(蓋文政中なるべし)學校勸立の際儒官となり、爾後藩の士弟を教導すること三十餘年、安政二年十一月廿日歿す。(日本教育史資料)

天保の頃藩主竹腰正美(正定の子、天保三年開)封に臨む。正美、字は子暢、豫堂と號す。幼より典籍を好み、長じて詩文和歌を能くし、兼ねて書畫を善くす。生平詩を大沼枕山に問ふ。上の好む所、下これより甚し

きは無く、文雅の道因て盛なり。作家の重なるものには渡邊橘堂(名は文禮、字は子節)山中春洞(名は恒、字は料平)水谷菊泉(名は直方、字は子義)松梅窓(名は賢瑞、字は五鳳)等あり。左に其の作二三を示すべし。(竹腰侯墓碑、三野風雅)

多度山看梅

疎影橫斜淺水涯。

暗香浮動月升時。

黃昏立盡溪橋上。

眼見孤山處士詩。

秋

夜

繡書竹几坐秋宵。

疎雨無端窓外響。

誘三將詩思到芭蕉。

題自畫山水

水谷菊泉

溪流經雨水溶溶。

密竹疎松夾徑封。

更有三閑翁竟三詩句。

白梅花下策孤筇。

(岸上老山に就きては後章に記すべし)

七、加納藩及尾州領岐阜の文教

1. 加納藩

藩校は始め學問所と稱す。創立の年度分明ならず。文政中第七代藩主從五位永井尙佐儒學を尊崇し、學事の擴張を謀り、校名を憲章館と改稱し、時々臨校して講義を聽聞し、春秋兩度には文武の優劣を視、以て子弟を獎勵す。其の後制度大に亂る。依て第九代藩主永井尙服文久中大に藩制を變革し、盛に土木を起し、文武を合併して文武館と改稱し、一層文武を擴張す。故に藩士等奮つて事に従ひ、文武共に大に面目を改め、また疇昔の觀にあらず。當時此の改制に盡力せるは藩老片岡成齋とす。かくて廢藩置縣